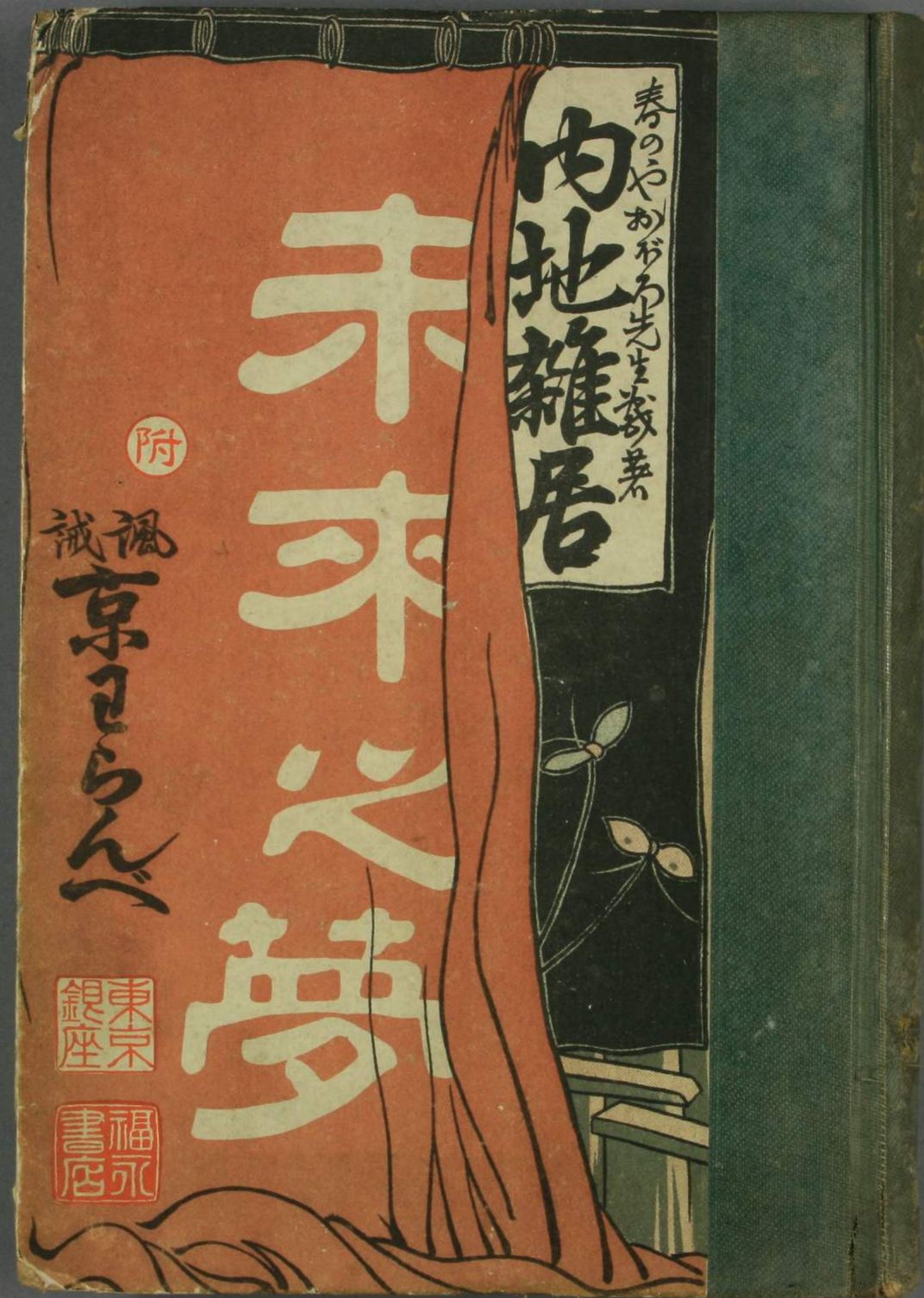

春のうやおばろ先生叢著
内地雑居
未来之夢
附
誠堂主人
京伝らんべ
東京銀座
福永書店

南北
雜居
東來氏夢
明治十六年
春彌生
一冊

解題

坪内逍遙補
神代種亮稿

内地雜居 未來の夢　春のやおぼろ戯著

口絵　初版本口絵（原色版一葉）（寫眞網版一葉）　稲野年恒畫

挿絵　初版本挿絵（寫眞凸版九圖）　稲野年恒畫

諷誠 京わらんべ　春のやおぼろ戯著

挿絵　初版本挿絵（寫眞凸版四圖）　歌川國松畫

内地雜居未來の夢

春のやおぼろ戯著

内地雑居 未來の夢解題

坪内逍遙補
神代種亮稿

「内地雑居未來の夢」は、春のやおぼろの雅號を以て逍遙坪内雄藏の著作せる小說なり。卷首の「附言」中に作者云ふ。『本書はもと純粹の小說とは異なり。能ベル(novel)といはむよりは、寧ろ亞ルレゴリイ(allegory 寓意小說)ともいふべきものなり。』と。

「當世書生氣質」第十五號の卷末に附せる廣告文に云く。

内地雑居 未來の夢

右は春のや翁の新案にて、内地雜居後の有樣をば一部の小說に綴りいだしたる者なり。世態の變遷、輿論の傾向、ならびに風俗の進化の如きも、よつて以て一斑を窺ふに足るべし。第

一號は小田原ステーションの間違ひにはじまり、箱根溫泉場の話に移る。篇中の人物には西洋人支那人等あり。間々英話にての對話などありて、面白きか面白くなきか、書肆も知らず。體裁は總て書生氣質におなじ。乞ふ四方の君子第一號より陸續愛讀を賜へ。』

此の廣告文中に說明せる所と、本書の內容と異同あるは、恐らくは作者の腹案に依りて廣告文を草せしものならむ歟。

最初作者は二十冊を以て結了せしめむ豫定にて起稿せるものなるが、第十號（第十四回）發行後幾もなく出版者側に支障ありて、其の以後執筆を中止したりとなり。

第一號は明治十九年四月、第二號は同四月、第三號及び第四號は同五月、第五號及び第六號は同六月、第七號は同七月、第八號は同八月、第九號は同九月、第十號は同十月の刊行にして、出版者は「當世書生氣質」と同じく晩青堂間野秀俊なり。定價各冊金八錢。總紙數通算百九枚。

第一號には彩色刷口繪二圖あり。第二號以下各冊に挿繪一葉あり。共に畫者稻野年恒（可雅賤人）なり。表紙は共紙にして、「春のやおぼろ先生戲著」とあり。

本文の組方は、「當世書生氣質」とは少しく異なり、「妹と背鏡」とほゞ同體裁なり。三書とも清朝四號活字旁訓附なるは同じけれども、對話を別行とし、其の首に人名を括弧にて包みたるものを置きたることが、後二者の「書生氣質」と不同なる主なる點なり。分冊式刊行法を採りたることは三書皆然り。

第一號には再版（明治十九年七月）あれども、第二號以下不明なり。合本は發行されざりしもの如し。（第十号と同時（但し奥付には九月）に刊行。）

第十號末紙の廣告文に據れば、第十五回の要目次の如し。

第十一號摘目

第十五回

○不慮の珍事佳人の行方を失ふ

○菱野詞狂の義おみやの母親を助く

（巻末ページ）

○獨立黨の政略頻に教法家に依頼す
○私立大學の建設
○獨立黨員の雄辯時弊を論じて田所鼎を誘ふ
○田所晤夜怪しの人物に逢ふ

（作者直話）『その頃、內地雜居といふことが輿論の題目だつたので、友人に勸められて漫然と筆を執つただけのもので、たいした抱負も何も無かつた。勿論、實際の事を寫したものではない。たゞ政治家の事が書いてある條は、あれは私が大隈さんに始めにお目にかゝつた時の有樣を寫したのである。後に「外務大臣」といふ小說を「讀賣新聞」に寄稿したが、內容は「內地雜居」と幾らか聯絡あるものと言へる。』

大正十五年六月

覆刻に方りては、句讀、記號等總て原本に準じたれども、用字、語格等は新たに原作者の指示を受けて、少しく改めたり。又、原本欄外の註は、本文の相當箇所に挿入したり。

附言　本書の刊行後、「未來記」的小說の續出せるもの數種あり。その二三を擧ぐれば、

（一）末廣鐵腸作「二十三年後未來記」明治二十年刊行
（二）松永一道作「內地雜居　經濟未來記」明治二十年刊行
（三）夢遊居士（大久保常吉）作「內地雜居　東京未來繁昌記」明二十年刊行

校訂本解説

本書の表紙は「内地雑居未來の夢」原本の表紙を摸寫し、之に「諷誠京わらんべ」初版本の扉の中の題號を加へたるもの。

校訂本解說

本書の表紙は「内地雜居　未來の夢」原本の表紙を摸寫し、之に「讀賣京わらんべ」初版本の扉の中の題號を加へたるもの。

緒言

社會は劇場なり輿論は人氣なり。人氣よく劇場の趣を換へ。輿論よく社會の局面を變ず。人氣活歴史をよしとすれば。團州眞面目にて目玉をひからせ。人氣世話物をほめそやせば。菊五そりかへりて車輪となる。社會もまた如斯ぞかし。其の振ふと不振とは。專ら時の人の氣込によるなり。そも劇場の進歩せざる。座長の罪歟。舞臺の都合歟。思ふに責任は世間にあるべし。人氣の奮起ぬによる事ぞかし。若夫人氣にして振はざれば。二三の見功者がわめけばとて。將又效能をいうたればとて。座長もヲイソレとは取あげざるなり。嗚呼人氣よ人氣よ。扨も足下は强氣なものかな。太した勢力を有れしものかな。足下にして奮起たん歟。此活劇場の進歩は目前。なぞや因循して姑息しておはすぞ。エイコウ。奮起てよ奮起てよ。グット思ひきつて奮起よかし。曾て聞く外國俳優が。我日本座の劇場に乘込み近々新案の世話物を演じて。喝采と Bravo（感服）とを博せんとすると歟。前觸大業にて人、目を側だて。評判大層にて。耳、たこを生じぬ。然るにいかにせしか中折なし。風説もいつしかに立消となりぬ。同座贔屓の見功者連は。まちくたび

れ。打なげき。座長へそれとはなく掛合ひしかども。結金の談判折合はざるにや。舞臺の準備とゝのはざるにや。そも〳〵また人氣の加減歟。二年三年といたづらに過ぎて。番附もできねば音沙汰もなし。見功者連も待あぐみて。竟には泣寢入の盧生の境遇。ねむるともなく醒るともなく。又もや一二年を經ぬる程に。夢か現かまた〻く間に。はや若干の星霜や經にけん。風說にきたる內地雜居を。今は目のあたりに見ることとなりぬ。

海關稅權の回復と。治外法權撤去の大事は。夙に愛國家が思を焦して。飽くまで痛論せし事にてありしが。十分思ふ程の出來榮にはいたらず。外交官の非常の盡力と。時の內閣のおん骨折にて。まづ〳〵稅權は我手に復しぬ。(Hurrah!) 法權回復の事につきては。餘程談判もむつかしかりしが。(Might is right!) 輕罪違警罪は日本の裁判所にて之を糺し。重罪の審糺の如きは。(Alas!) 矢張從前の慣例の如く。彼の裁判所の所轄ときまりぬ。されば我政府も之に應じて。多少彼方よりの要求をこばみぬ。たとへば雜居地の區域を限りて。三府七港と定められたり。蓋し七港とは更に新港を開かれしによるなり。下ノ關の港敦賀の港すなはち是なり。尤も雜居地の外といへども。旅行通商は許されたりしが。通商券といふ制限いできぬ。扨又雜居地の外に於ては。日本の不動產を買ふことを許されず。居留も無論ながら (*De jure* not *de facto.*) 許されざるな

り。但し雜居地の內に在ては。永住も勝手たるべく財產をも有し得べし。且や公債は十中八九は賣買することを許されたり。勿論財產を所有するには。我法律によるとの事なり。其ほかいろいろの定どもあれども。煩雜しければ。こゝには省きぬ。

現時の條約は十分ならねば。今より十五年の後にいたりて。再び締盟の諸國と談じて。更に改正する約束と聞えぬ。定めし其時の條約面には。光風霽月の文字も見えなん。不服だ不服だとつぶやくもあれども。今更是非もなき事といふべし。

內地雜居の行はれたると同年に。東京の市區も四分の一ほどは改正になりぬ。其中取わけて著しきは。公園の區每に備りたると。重なる町々の幅廣うなりたると。小田原町邊の魚市の。洲崎ならびに佃島の二ケ所に移されたると。上野の公園のステキ滅法に廣くなりたると。國會議事堂の巍然空に聳えたると。教會堂の增加したると。(一年二年と過るうちに) 寺院が段々に廢滅して。いつしか煉瓦作のチヤルチ (耶蘇院) と變りたると。馬車の殖たると。フラフの增したると。銀座がめづらしうなくなりたるぞ。まづ目にとまる現象なんめり。扨又風俗はいかにといはんに。中中一言にてつくしがたし。只々一ツ二ツこゝに示さば。蛇のとぐろ卷は豕の尻尾とすれちがひ。炭團は白蠟に隨つてゆく。男のショウル (shawl) 姿やうやくすたり。店頭の西洋女褌。まつたく

箱のうちへ形をかくしぬ。○外資次第に入りて資力大に增し。鐵道むかしに似ずズツト長くなりぬ。されば朝に福島にて食ひし肉をば。夕に東京の厠に投じ。五十里六十里の遠きを思はず。芝居を觀にでかける地方人もあるべし。資本が右のごとく殖きたりしかば。金を貸す者も多くなりて。金利も隨つて廉うなりつ。資本も隨つて得易かるゆゑ。事業もおのづからなし易ければ。處處に工業所も起りたりしが。怪しや何故にや勞役者流は。あんまり其御庇をうけざるやうなり。工業增加すれば勞力の需用生じ。勞力の需用多ければ賃銀したがつて騰貴す。賃銀騰貴すれば勞力者利を得。這は是財學家の定論なるに。何故我國の勞力者流は。依然みすぼらしき有樣ぞと問ふに。蓋し競爭者が多いゆゑなり。群然むらがりて內地に入たる。一種の大敵を四方に引受。一上一下虛々實々チヤンチヤン發市と戰ふが故なり。嗚呼まことに氣の毒なる事なり。是も今すこしく資本がましなば。あるひは競ひかつ時節も來らん。まづ〳〵出精して一生懸命。むかしの怠惰がちな習癖をうちすて。負ずにやらかす方よかるべしとは。當時の經濟家の寢語なりと聞えぬ。之を要するに雜居の結果は。善とも惡しとも確言し難し。其の善惡のいづれなるやは。本文多少の物語に徵して。讀人御勝手に判斷あるべし。前にも大概は陳たてたれども。更に統括めていふときには。內地雜居後は社會の有樣。どうやら何事もシヤボン臭くなりぬ。智識の進むことは魂

消るほどにて。德義はなか〳〵に追つきかね。舊弊は我を折ていでてもきたらず。警察は行屆きて道に遺たるを拾ふものなく。窓の硝子張はます〳〵流行て。夜も大方は雨戸を鎖さず。珈琲を飲過てか老幼腹鼓をうち。ジン(酒の名)に醉ひたるにや男女太平樂をならぶ。國土ゆたかに民靜なる。內地雜居の幕あきこそ。まことに芽出たしといはざるべけんや。其ため口條カヽチ。

内地雑居 未來の夢 附言

一　此物語の筋は。條約改正以後の事なり。内地雑居も已にゆるされ。國會も已に開けたる體なり。萬般の筋すべて作者の空中樓臺なり。政府のおぼしめしを推測したるにもあらず。作者の願望をうつしたるにもあらず。

一　本書はもと純粋の小説とは異なり。能ベル（novel）といはむよりは。寧ろ亞ルレゴリイ（allegory 寳意小説）ともいふべき者なり。故に不條理なる廉もなきを保たず。

一　完全なる條約改正を寫さむとして。わざと不十分に作りなしたるは。多少思ふ所あるが故なり。但し作者の想像に鈍き。或は描き洩したる要點も多かるべし。信切なる看官。もし心附きたまふ事あらば。乞ふ其筋をしらしめたまへ。作者は謹で之を取捨し。（所謂三野話の顰にならひて）可及的は。本書の物語に編入せんと期す。

明治十九年三月

春のや主人識

目次

第一回　汽車中に圖らず故人に遇ふ
第二回　時勢に應じて少年大志を興す
第三回　家内の風濤少年をして數奇を歎ぜしむ
第四回　一雙の星眸詞狂の魂を奪ふ
第五回　田所「コヒイ」店を叩いて舊友の所在を尋ぬ
第六回　二通の手紙によりて田所舊友の身の上を卜す
第七回　客氣の少年そゞろに險を冒す
第八回　Struggle for Life.（稲積一家の落魄）

第九回　菱野詞狂ふたゝび田所に逢ふ
第十回　政治家の小集會
第十一回　狡兒の佞辯淫美をおとしいれんとす
第十二回
第十三回　印度洋の難船
第十四回　市中の騒擾

田所鼎
玩淡平
毘志野
詞狂
ジヤック
シユーラ
阿つか

内地雜居 未來の夢

東都 春のや主人著

第一回

汽車中に圖らず故人に遇ふ

時に八月の末つ方。午後の四時に近き時刻にやありけん。上州高崎より發せし汽車。已に深谷宿に近づきたり。下等の乘合は其數夥多しと見えながら。上等の室は寂靜なり。第二番目の上等室には。乘客只僅に三人をのせたり。一個は婦人にして外國人なり。言語容體。佛蘭西の貴女と思はる。今一個も外國人にて。年頃五十二三の男なり。貴女とは年齡も大に違へば。勿論夫婦とは思はれねど。頗る親密なる交際ぞと思しく。いたう打とけて物語らひ居たり。殘るは年若き日本人なり。二十を六ツ七ツ越たりと見ゆ。中肉にして中背。肌の色は淺黑き方なり。鼻と口とは著しき廉もなけれど。人の目にとまるは其眼附なり。所謂圓十形の眼の玉なるが。常にしばだ

たく癖あるが故に。尙更目にたちても見らるゝなりけり。大方はさしうつむきて居れども。時々何物に感觸なしてか。俄に其額をふり動かして。二ツ三ツ四ツ目ばたきして。前をキと見やる奇異なる癖あり。見なれぬ人などは。氣味わるく思ふもあるべし。洋服にて久しく旅をせし事と思しく白リンネンの胴衣と。薄羅紗の白細袴とは。已に黎明の色合をばなしたり。薄き綾羅紗の半マンテルも。是又だらしもなく苦めたるにや。其色羊羹に近づきたるに。無殘や膝頭の所飛いでたるやうになりぬ。衣服の見苦しきに似ず。甚だ立派なるは懷中時計なり。たしかに金側の龍頭卷と見受られぬ。別に中形の革胴亂一個。蝙蝠傘一本。荷物はそれのみと見えたり。高崎より深谷に到る間は。外に乘あはせし日本人もなければ。共に物語らんよすがもなし。普通の旅人なりせば。欠伸の二ツ三ツはなすべきなれども。件の旅人はさる振舞もなし。言葉敵手などのあらざるこそ結句幸ぞと思惟せるが如く。只管其頭をうなだれて居り。蠅が飛來りて其額にとまれど。さながら五月蠅とも思はぬ體にて。沈思默考に餘念なきは。憂ふる所あるもののごとし。されども時々にフツと見あげて。眼を急がしうしばだゝきて。莞爾と我しらず打笑むを見れば。流石に苦勞のある人物とも見えず。いづれ說明を要すとは見ゆれど。いまだ一言だも發せざるゆゑ。說明の鍵を得るに由なし。

さる程に汽車は深谷宿に近づきぬ。件の日本人は俄に思ひ得たる事ありと思しく。急ぎポツケツトを搔探りて。手帳とペンシル〔鉛筆〕とを取いだして。何にやあらん二三行。サラ〳〵と書認めしが。たちまち悟る所あるが如く。其二三行を抹殺し去りて。更に筆を取りて書もてゆく。其速き事雷光の如く。五六分の間に凡五枚ばかり認め了りぬ。若夫眼ばたきする癖だになかりせば。今一枚をも認め得べうぞ見えたる。

此時汽車はとまりぬ。深谷引と叫ぶは鐵道の役員の聲なり。扉をヒラリと開きぬ。人ありヒラリと入來りぬ。年の頃は二十六七なるべし。見にくからぬ洋服を着して。中高の帽子をいたゞきたり。帽子の庇にて顏は見えねど。高やかなる鼻と赤き脣とは。いと著しく見られにけり。鬚髯殘りなうそり棄たる。其跡靑うして色の白きを知る。日本人たるは明かなれども。緊く結びたる口元の嚴格なる。威儀おのづから髮に存じて。思慮と決斷とを示すものの如し。件の日本人は內に入りつゝ。只一通り見渡したるのみ。別に座を選べる氣色もなく。以前の旅人の向ひの處へ。いとものしづかに腰うちかけぬ。○チリヽン。チリヽン鈴鳴り渡り。汽車また遽然として動きいでぬ。

此時までも以前の旅人は。只管筆記にのみ意を注きて。人の殖たるをも知らざる體なり。今しも

漸々に手を留めて。再び默考する氣色なりしが。たちまち額をふりおこして。向うをきッと打見やるとて。これはれい　のくせなり。　圖らず日本人と面を見合はせ。三ツ四ツ引續けて目ばたきなし。さらでも大なる眼をパッと見ひらき。眉をつりあげしは。いとをかしゝ。紳士らしき彼方の男は。此時にはかに帽子を脫して。

(紳)失禮ながら貴君は、菱野君ぢやありませんか。

と尋ねられて以前の旅人。覺えず二ツ三ツ目ばたきなし。

(旅)さうおつしやるは何君でしたか。ツイお見それ申しまして。○いかにも私は菱野詞狂で……

紳士は淸しき眼に笑を含みて。(但し口元には笑たる色なし。)

(紳)まことに久濶。お見忘れなさるも當然な譯です。我輩も先刻より。屢御容子を窺つて居て尙思ひだし兼た位……

(詞)貴君はどなたでしたかネ。

(紳)田所鼎です。

詞狂は覺えず頓を持あげ。

(詞)ですか。イヤ寔に一別以來。これは實に圖らぬ奇遇で。

トいひつゝ急がはしく手帳と筆とを。「カクシ」へ納めながら會釋をすれば。田所も禮をかへし。

(田)屈指すれば。已に七年の星霜を經ましたが。其後益御壯健で……。家大人のおなくなりなされた事は。其折お手紙で承知しましたが。恰も歐洲へ遊學をいたす砌で。僅に御弔詞をさしだした計り。其後東京へお移寓ときいたまゝ。今のお宿所がわからんので……。

(詞)澱南學校以來已に七年になりますかネエ。シテ君には御時御歸國になりました。

(田)此春でしたが。其後何の爲出したる事もなくて。イヤ實に赧顏に堪ません。

(詞)私こそです。引續いて父母に死なれましたので。竟に學業をも中絕しまして。……

(田)重々の御不幸で御愁傷察し入ます。學業中絕とおいひなさるが。君はもと學者を以て自任すべきお方でないて。……此節は美術振興の御本願はどうなすッた。

(詞)彌〻志を決しまして。美術の犧牲になる積ですが。イヤ實に難い事〳〵。已に先日も私に向つて。美術を修むるは。果して何等の利益かある。と眞地目で問かけた男があります。さう實利ばかりに凝固ッちやア。まるで論談が出來ませんテ。科學と美術とは其目的を一にす。共に眞理を知る方法ではあるが。一は智識を以てし。一は感覺を以てす。是相異る第一なり。と斯說きましたがわかりませんテ。ハヽハ。

(田)成程それぢやア俗人には通じますまい。○兎にも角にも美術家と御決心なされたは祝すべしだ。君にして美術家とならずんば。○君にして小説を興さずんば。誰か我國の稗史を興さんデス。人各〻長技があるから。長所に依らざるのは拙策の極だ。しかし天稟の奇才があつても。地位が。イヤ。其境遇がわるい時には。其器を利用する譯にもいかんし。たとへば渥美なんぞは。……

トいひかけて覺えず歎息す。

(詞)ヲヽ、渥美といへば ○ アノ渥美は如何しました。まるツきり音沙汰を聞ませんが。

(田)それでは渥美の一條は御存知なしですか。卒業後國へ歸つて。家内に風波を生じた事から竟に大阪へ出奔した事を。

出奔の二字は、深く小説家の腦髄を感觸せしめたりと思しく。たちまち二ツ三ツ目ばたきなし。

(詞)出奔とは……　まるきり風評にだも聞ませんが。抑又何等の理由があつて。

(田)これには込入つた理由があつて。回想する毎に慨嘆の種です。君はあまりよく御承知でなからうから。まづ家系からいはなくては解らん。抑渥美の家といふのは……。ハヽかういふと何やら君にかぶれたやうだ。

(詞)ハヽヽヽ。

田所鼎は「カクシ」の中より。煙草の「ゴム」袋を取出して。みづから「シガレツト」(巻煙草)を製しながら。やをら語りいづる物語は。さまで異やうなる筋にてもあらねど。辯舌爽かにして雄快なるのみか。感慨すべき筋にいたれば。一段其聲音に力を入れて。屢現在にあるが如くに。問答をさへにまじへしかば。話はさながら活て聞ゆ。蓋し演説の熟練よりして。得たりし辯舌ぞと思ひながらも。菱野は肚中に歎賞して。我筆及ばずと嘆息すめり。嗚呼。此處はバルク(英の辯士)の記事體に似たり。こゝはシエリダン(英の辯士)の口氣に類せり。之をこのまゝ英語に寫さば。甚だマコウレイに似たらんかし。速記を學び得ておかざりしは。寔に殘念の事共なり。三日見ざれば刮目せよ。古人の金言眞なるかな。吳下の阿蒙は我のみなるか。と且聞き且案じ。且またおのれをかへり見る。をかしきまでに忙しきは文人の癖なり。詩人は氣狂。兎に角半狂でなくては不叶と。英の博識も曾ていはれき。さもさうず。さもありなん。

第二回

時勢に感じて少年大志を興す

（以下田所が物語れる渥美が來歷なり。）

渥美氏。其名を恭輔といふ。愛知縣下知多郡。半田の造酒家。渥美丈輔の長男なり。其母は產後に身まかりぬ。恭輔乳母の手に人となりて。齡十二歲に及びし時。丈輔故ありて後妻を迎へぬ。後妻の腹に男子いできて。之を太市郎と呼做したり。恭輔人となるまゝに學を好み。十四歲の春。父の許可を得て大阪にたちいで。其頃名高かりし私立の大學。澱南學校に入學して。拮据勉學。晝夜を舍てず。居る事二三年。學力おどろくべく進みしといふ。其頃恭輔と机を同じうせしは。田所鼎。菱野詞狂の兩人にて。共に莫逆知音の友なり。恭輔。文學科にありて。專ら政治學を修めしといへども。其志は政學にあらず。然るに政學を修むるものは。一ツは學問の利用をしらずて。只管政治學を尊しと思へる。父の嚴命にいでたるなるべく。一ツはおのれも又政治學ををさめて。深く外國の事情に通じて。大に爲す所あらんとするなり。故に政治學を研究するも。空

しく。空漠たる理論を攻ねて。哲士の振舞に效ふことを好まず。專ら實利をのみ目的とせり。政治學を學べるかたはら。近世の哲學をも繙きしかど。是又學ぶこと一年にして廢ぬ。渥美の本心を覺らざる族は。往々其浮佻を嘲りしかど。恭輔これをもて敢て意とせず。孜々政治學を修めて倦まず。十八歲にして政學の業を了りぬ。もと此澱南學校といへる所は。豪商某の創立に係り。府下の有志者等の寄附に成れり。組織の大體は。むかしの東京大學（一ツ橋）にならひしと思しく。學科を大別して三となしぬ。曰く文學（此內に政治經濟の學をも含めり）。曰く法律學。曰く理學なり。理學は化學をもて主髓とせり。蓋し製造を奬勵して。大に國益を圖らんする校主の精神に出たりとぞ聞えし。恭輔已に政治學を卒りて。更に理學科に就學しぬ。同窓の學生等或は恭輔の物數寄なるを笑ひて。陰にて譏りたるも多かりつべし。渥美が胸懷をいとよく知りて。之を賛成しつ奬勵なせしは。獨り鼎のみと聞えたりし。土曜の閑談。日曜の散策。恭輔鼎と相面へば。喟然歎息して語つていふやう。我國土地狹く兵弱し。而して猛鷙北に迫り。獰獅西より窺ふ。兵を以て之に當らん歟。其の敵し難きを如何せん。產物を以て之に當らん歟。東に農產に富む米國あり。西に製造に巧なる佛蘭西あり。我爭でか彼に及ばん。論者或はいふ農產以て我國を富すに足る。農業以て我國を護るに足る。トまことに誤れりといふべし。耕地に界限あり。產出に

極度あり。畢竟英米に競爭しがたし。海軍を張り。陸軍を備ふ。其必要なるいふまでもなけれど。兵の强弱は專ら國財の多寡に伴ふ。國人いかほどに氣力ありとも。內に供給の滿るなくんば。何とて其兵威を張る事を得んや。倩〻惟るに。御國の地勢は。四方海をめぐらして。西の方支那朝鮮に近し。之を大ブリタニヤの本島に比ぶるに。髣髴相似て優る者あり。大に商業を振ひ興して。我日本國を護らんとせば。或は萬國と競ひ得べし。若夫商業は。本國の產物にのみ依賴する者にあらず。本國の製造にのみ依賴する者にあらず。今や內地雜居ゆるされて。貿易やうやく昌盛を極む。此時に乘じて更に一步を進め。商業國を以て自ら任じ。米が直接に支那朝鮮に輸入する所のものを。我より直接に彼に送り。英が數萬里の波濤を航して。遙に支那國に送れるものをば。我より直接に彼に送らば。其利莫大にあらざるべけんや。いにしへのウベニス。又は荷蘭陀の輩にならはば米の仲買となり得ることは頗る爲易しと思惟すと雖も。只彼の英を凌がんには。更に一奮發なさでは叶はじ。其法もとより一にして足らず。其中最も難儀にして。最も重要なるものこそあれ。卽ち英國が本尊視せる。金巾製造を奪ふこと是なり。英國の金巾を製造するや。遙に其綿をば印度に仰げり。今若數百萬圓の資金を募りて。一大製造所を我國に設置し。直に印度綿を御國に輸入し。盛に金巾をば製出して。之を支那其他へ輸出せん歟。海路近き故に運輸に

便なり。よし製造費は廉ならざるとも。日を經て英國をば壓し得べし。財力は兵なり。金力は權利なり。國にもあれ。一個人にもあれ。金力なかりせば何をか爲得ん。見たまへ英國の國會議員を。金力の推擧する所にあらずや。見たまへ米國の代議士を。畢竟財力の奴にあらずや。人間にして財力に富まん歟。議士をも買ふべく。政權をも買ふべし。英國の上院議官を見ずや。皮相論者が下院の勢力を稱歎するにも係らず。其實暗々裡に。國家の權威を。彼貴族輩が握れるならずや。蓋し下院中の議官等は概ね貴族輩の領地の民にて。彼が財力にて買はるればなりけり。財力の萬能なる。まづ之をもても知るべきなり。しかるを御國人の慾すくなき。こゝらに其眼を注がざるにや。僅に小官吏となりたるをもて。名譽の梯を得たりとなし。たま〳〵國會に召れたるをもて。靑雲の足場を卜したりとなす。故に政治學の一部を嚼りて。少しく其武器を得たりと思へば。無資無力にして大聲叱呼。進んで政治界に其敵を求む。嗚呼。財力は本なり。名譽は末なり。財足れば名隨ふ。名なくして譽を求め。譽を得て財を得んと思ふ。其序を誤るの甚しき。何ぞ一にこゝにいたるや。笑ふべし。憫むべし。と且慨し。且つ說く。傍さながら人なきが若し。其論痛切。取るべきの廉頗る尠しとなさずと雖も。要するに血氣輕躁の論。蜃樓其物の如く然り。憚る所なき友垣の中とて。鼎は且贊し且つ駁して。或はユートピヤ(架空論)をもて目する事あり。

或は其誤謬を摘發しながら。益〻其志望を鼓舞する事あり。相扶け相敎へて。共に學ぶ事又一年。（當時田所は政學を卒業して。更に法學を修めたりといふ。）會〻恭輔の祖母某。老病やうやくに重り來りて。命旦夕に迫りしとて。父より急報にて知らせこしぬ。母親に早く離れし身とて。祖母の鍾愛をうけたること。世の並人には優りにたり。殊に養育の恩も重かり。せめて其息のあらんうちに。と急ぎ學校より暇を乞ひうけ。先年敷設されし鐵路を經て。僅一日餘にして。山鳥の尾張にかへりぬ。是なん恭輔が望を失ふ。其踏はじめの石段にぞありける。

第三回

家内の風濤少年をして數奇を歎ぜしむ

去程に渥美恭輔は。深き愛育の恩ある老婆に。いかで生前に對面をと思へば。電光の如き汽車の歩も。なか〳〵に遲くももどかしくも思ひぬ。家に歸りて父母に見え。いそぎ奥に入りて祖母に逢ふに。祖母は此年七十六歳。さらぬだにみつはぐむ老の身なるに。久しく病ほうけて。肉おち骨いで。さながら人ならぬ人かとぞ見ゆ。まめ〳〵しく枕邊に居寄りて。安否を問ひ藥をすゝ

め。力をつけいひ慰むる。孫がやさしげなる言葉をききては。苦痛もまづ一入薄らぎつべし。とても望なしと竹菴老さへ。さきには饐も匕も擲たりしには似ず。病はやう〳〵に平になりて。凡十日程も過たる頃には。床の上に坐り得る程にもなりけり。粥も啜りぬ。肉汁も飲みぬ。扨も介抱の甲斐ありき。と父母にさゝやきて欣喜ぶ。孫より病人はひそかに勇みて。喜ぶ氣色あるは何故ぞや。人生七十は古來稀也。かくても尚死にともなきにや。浮世の樂は消はつべき齡なるに。何を賴にしてながらふるにか。心得がたきは老婆の心よと陰にて造酒男はしためなんどが。譏るは人情を解せざるが故也。處世の目的は自營と他營なり。自己の營のをはりし後には。さらに他に及ぶは自然の情なり。老婆はもと富たる家に生れ。更にゆたかなる家に嫁ぎて。年頃何不足なく暮し來りて。今しも何不足なく老果る身なれば。おのが一身に關する限は。此世に殘る憾あるべきならねど。我身の外の人の身の上につきては。いと大なる苦勞もあれば。又大なる心配もありけり。其故はいかにといふに。當主丈輔と聞えたるは。もと此老婆の實子にあらで。店の番頭より引上たる。老婆が愛女の壻にしあれば。恭輔は血筋の初孫なり。しかるに後妻のお何といへるは。其齡も若く縹緻もよく。殊に男兒をさへ儲けしかば。丈輔いつとなく其色に溺れて。二男太市郎を深くも愛して。長子恭輔をば忘れしが如く。二男に世を讓らん氣色も見えたり。さ

家内の小風波
少年壮大志を誌す
「勁材不啻千鈞弩
豪家真成百尺樓」

彫圖活

れども長子恭輔事は。老母が最愛の孫にてもあり。且は長男の事にてもあれば。寢物語の折々に。斯と心底は定めながらも。今尙打出していひもいださず。さはあれ老母の目の慧き。耳のはやき。いつしか其心を推するものから。之を公然だちて論ずるに由なし。かくては恭輔が身の行末。心元なき限にこそあれ。さりとて丈輔が義理をしりたる。我身が存生せる間に於ては。さる不正わざすべうもあらねど。我身一たび目を瞑らば。嗚呼不便なるは「恭」が身の上。さりとて今直に呼戻して。此家を讓るべし。といひたればとて。兎や角道理つけて聽かぬは必定。心いられや氣づかはしと。老の癖とていろ〳〵に。取越苦勞駿河紙。ひるまもしらず鼻かみて。袂も重う氣も重く。いつか病にふし柴の。こる肩癖は我孫の。行末思ふ慈悲ぞとは。知るものたえてなかりけり。かゝれば恭輔がたちかへりて。其枕邊に侍するに及びて。病の奇異にも薄らぎしは。蓋し奇異に似て不思議にあらず。又喜びしも嘗然なりかし。去程に祖母の病痾も。凡二十日ばかり過るに及びて。ほと〳〵本復せし氣色なれば。かくては看護すべき要もなからめ。不肖は二三日に暇を賜はり。再び學校に歸りたしと。父母に恭輔が乞ひける程に。父は異議もなく承諾ながら。やがて其頭を傾けていふやう。祖母御の病痾の怠りしは。偏に足下が來て看護せしに因るなり。祖母御の足下を愛したまふ事は。父母の思ひにもいや優れり。まづ祖母君の許を得ずては。匆卒には歸

しがたし。此由祖母御に申傳へて。みづから其許を乞へかし。とは繼母が吹込たる言の葉にてはなきや。隔ありげなる御言葉やと。恭輔肚の中に面白からず思へど。かにかく論じつべき場合にあらねば。直に病人のふしどにまゐりて。歸阪云々の許可を乞ふに。祖母はさめ〴〵と涙を流して。其方の學問の妨ぞと思へば。留るはなか〳〵に無情に似たれど。今一二年家に居てたべ。其方はやう〳〵に二十歳。今しも一二年廢學すればとて。後に學びがたき齡とは思はず。此度は思ひ寄らず命を拾ひて。斯語らひ得る身とはなりしが。其方が家に居ずば又たちまち。病は重らんずる心地ぞする。愚痴なる老婆かなとじれるではあらうが。これには忍びがたき事情もあるなり。今日只今といふ譯にもいかねど。假に一二年と腰を落つけ。其方が此家に居てたまはるならば。婆が圖らふべき事あるなり。其方が學問に心を凝して。稼業を見返らぬはよき事なれども。惡魔は此懈怠を「口實」にとりて。眞に思ひよらぬ害をもするなり。父御も已にすでに五十三歳。家を讓つたとてよい頃なり。其方も此家を貰つておき。其後學問をしたればとて決して邪魔になる事にてもなし。兎に角歸ることは思ひたえて。一旦廢學と決してたべ。表面だけさう決してたまはらば。婆がよきやうに圖らふ程に。事さへ纏まらばいつ何時。再び遊學に出掛ようとも。最早此婆はとゞめませぬ。決して未練らしう愚痴などはいはじ。只一旦の廢學なるに。婆が情

願を聽いれてたべ。ト流石にそれとうち明ねど。斯ぞとはしるき老婆の心底。深き慈愛の言の葉草に涙の露をさへに置そへたり。恭輔は手を突たるまゝ額をさげ。覺えず涙にくれたりしが。よしや祖母御の命なればとて。父御の思召の裏をかきて。強て此家を得たればとて。我爲にまた何の利かある。財産は寔に權力なれども。遺傳の財産を讓り受るは。なか〳〵に是立志の害なり。長子惣領の慣習なるゆゑ。我身長男に生れながらに。父の財産をば受得ずといはば。いかにも不條理にも見ゆべけれど。今は封建のいにしへと違ひ。社會は一個人を單位として。獨立獨行を主とするに。一家を繼得ざるも歎く事かは。我身已に家恩をうけて。久しく大阪に學に遊び。多少形のなき財産を得たりき。しかるを之にだも飽く事なうして。更に父母の心に背きて。家産を讓られんと圖るは不理也。學を修め業を興す。其目的は果して何ぞ。國の爲に父母の爲に。又身の爲にあらずして何ぞや。父母の御心を樂ましむるは。已に目的の隨一なるを。父母に背戻して何にかせん。やみなん〳〵。と思ふものから。かくと理を正して論じたればとて。老婆が腦髓には入るべうもあらず。餘儀なく餘所事に言葉を託して。いろ〳〵さま〴〵に辭みしかど。祖母はいかにして之を聽くべき。果は腹立もし泣わめきもすめり。病が又候ぶりかへりはせずや。と流石に心配しつ持餘して。わづかに其意に隨ふといへども。本心いかばかり不樂かりけん。斯て

後老婆は何樣に主人を說こしらへけん。竟に恭輔を家に留めて。其月より店の事を扱はしむ。嗚呼正理一たび世にいでてより。桀紂の暴虐も恐るゝに足らず。陋習の束縛も解くこと易かり。たゞ恐るべきは義理の柵。さては恩愛の絆にぞある。人間多少の事。區々たる恩愛のために。誤たれ誤つ。干將莫邪を以てしても。正理公道を以てしても。斷に忍びざるは此絆にぞありける。斯て祖母の病痾は平癒果ぬ。其冬もいたづらに暮て。年もあらたまの春邊とはなりぬ。恭輔は心ならずも。しばらく修學の志望を忍びて。家にて商業にかゝづらふほどに。元來商業は好める道なり。實地に取引を行ふに及びて。次第に其稼業を面白く覺えつ。怠るとはなしに學問の思想は。日を經て其熱度を減じにたり。或日恭輔は父に向ひて。いと熱心なる面地にて。釀酒の方法を論じていふやう。不肖近頃より新聞を閲して。竊に思立し事こそ候へ。傳聞れば東京大阪。并に新潟なる西洋人等が。近來釀酒場を頻々設置し。廉價に日本酒を賣出せしと歟。機械の效能とは申しながらも。其廉なる事驚くに堪へたり。幸なるかな西洋商等は。いまだ其祕法を悟らざるから。價廉なれども其品下れり。故に現今の所にありては。さまで恐るべきの敵にもあらねど。今一二年を過ぎたる後には。我業の盛衰果していかに。恐れても又恐れざる可けんや。否我業の盛衰のみかは。之を大にして御國の安危也。過し昔の日に事かはりて。今の競爭者は外國人なり。

競うて打負なば御國の損耗。豈たゞ一商家の損のみならんや。今にして豫備せざれば甚だ危し。而して其豫防の方法はといはんに。日本酒改良の一事是なり。倩惟るに日本の銘酒は。之を特別の手段を用ひて。精製なすことを得たらんには。其味美なる事西洋酒に優らん。蓋し先入の僻見を去り。公平私なき評を下すも。米は穀類の最上等にして。其味麥なんどに優れる事は。疑ふ可らざるの事實に候へ。現に鞆の津の保命酒。さては濱松の忍冬酒は。其製尋常の比にあらねば。陸續海外に出るにあらずや。しかるに世の人の忍耐なき。只管目前の利德を圖りて。釀酒て程もなき新酒をば。所謂斗水にして賣出して。之を海外へも賣らんとぞ思ふ。偶〳〵輸出せし例はあれども。途中で腐敗せしが多しとぞ聞く。他なし水の割が多きに因るのみ。今や舊來の製法を改め。大に外國より機械を買入れ。彼の外商等と相競ひて。盛んに釀造をなしゆくかたはら。總て西洋酒の顰にならひて。諸味を其儘にて六年七年。味の定まる迄貯藏し置きて。扨罎に入れて賣出さば。第一輸出にも便なるべく。第二彼方此方と移しかふるの際。あだに呑口より。洩泄する。多少の無駄酒をば救ふを得べし。彼のブランディといふ洋酒の如きも。專ら年數の長短によりて。其味其價を異にすとぞきく。西洋人の商利に敏き。秋毫も無駄をなさじとぞ力む。しかるに日本人の輕忽なる。一向眼前の報酬を求めて。水を割り腐敗をまねき。樽に入れ多く泄しむ。

豈利に暗き話にあらずや。其酒忍冬保命酒の如く。若くはブランディ其物の如くば。飲者てんでんに其量に應じて。隨意に水を交へ。砂糖をも加へん。造酒家がみづから爲すには及ばじ。釀法改良の重なる所以は。專ら此邊ぞと思ひさふらへ。扨また此事を實行なすには。僅〳〵二三ケ所に行へばとて。元來莫大の利益にもならねば。國家のおほんために詮なき事なり。是非とも全國の造酒家たるもの。悉皆此策に心を傾け。外敵壓倒の精神を以て。協力一致せでは叶ひがたし。さりとて全日本一致の事は。今はいふべくして行ひがたし。如ずまづ一部分。卽ち知多郡をもてはじめんには。我家はもと當郡の舊家にして。とにかく此國の造酒家中には。年頃勢力のなきにしもあらず。父上にして嚆矢となり。卒先此議案を行ひたまはば。衆豈其顰にならはざらんや。兒不肖なりと雖も父上の名望を戴き。乞ふ郡中を巡回して。他の豪商等を誘說せん。日本酒改良は國家の爲なり。奮然御英斷あらまほしと。熱衷おもてに顯れて。繰返しつゝ述にけれども。丈輔しば〳〵首肯くのみ。其議を取上べき模樣もなし。其後二三日を過るに及びて。再び此事をば言出せしに。丈輔其眉根を顰めていふやう。其方のいふ所理なきにはあらねど。所謂空論にて實行はしがたし。其方は我を知りて他を知らず。我肆をしりて他の肆をしらず。凡造酒家といへる者はいづれも。同樣ぞと思惟せるに似たり。それは甚しき料簡違ひなり。我家は造酒家の大

なる者なり。一年間の釀造高少くとも數百石。且や本來がゆたかなるゆゑ。敢て今年の所得をもて。直に今年を維持せんとはせず。故に六七年資本を停滯すも。別に難儀なりと思はざらんが。他の釀造家は大に異也。百石以下を釀すもあれば。五十石以下の小肆もあるべし。而して稅額はいかにといへば。酒造所一ケ所につき金三十圓。一類一石につき金四圓也。若し資本にして活動せずんば。此大負擔を何とかなすべき。其方の議論面白けれども。行ひがたきは此故也。といひ放ちつゝ取合はざれば。恭輔再び膝を進めて。酒稅減額の事は歎願すべし。それが爲の國會にあらずや。何ぞ我國の人民等は。議士を利用するの道を知らざる。日本酒改良の擧の如きは日本全國の公益なり。一家一個人の私益にあらず。曲て御奮發あらまほしといふ。語氣常には似ず激しかりしかば。丈輔はいたく思ひ僻めて。おのれを嘲るとや思惟なしけん。竟に答もせで奥の居間に入りぬ。恭輔竊に歎息して。面白からず思ふにつけ。また學遊の志望切なり。獨熟々と思ひけるやう。さきには祖母君の御心に隨ひ。空しく凌雲の志を禁めて。こゝに埋もれてありけるものから。元より家を繼がむ心はなかりき。むしろ相續の權利にかへて外國學遊の資金を賜はり。遠く旅立せん心なりしに。生中我本意をあかしもまつらで。膝下に未練らしう留まりたればこそ。繼母きみはいふも更也。父御も御憎み重なりやしけん。けふ此頃の御素振は。むかしに異

らずとは思はずかし。斯思ふは我身の僻見歟。兎に角家にあるは得策にあらじ。折を得て父母に乞ひて。再び遊學に志すべし。たゞ難儀なるは祖母君なり。いかに說諭さば聽容たまはん。困つた事なりと苦慮する折から。祖母は病痾のまた發りて。ふたゝび起得ざる身の上となりぬ。是よりさき祖母なにがしは。さまゞ孫の爲に心を勞して。いかで丈輔に說すゝめて。家督を讓せんと企圖せしかど。流石に今直に此事をば。實行なすべしともいひ出がたさに一日〳〵と遷延して。竟に其年も秋となりぬ。苦勞が積り〳〵ての病なれば。こたびは生がたしとおのれも思ひつ。或日丈輔を枕邊に招きて。兼て思ふ由を細々と語りて。我身が息のある其間に。願ふは恭輔に身代を讓りて。我身に安心をさしてたべ。勿論今すぐに讓れとはいはず。只讓るといふ證文だに。今此婆が目前にて。孫にわたされなばそれにて宜し。承諾てよとの母の嚴命。丈輔腹の中に嘗惑すれども。義理ある身の上とてあらがふこと能はず。多少の苦惱を經て竟に其命に隨ひけり。恭輔は恨めしげなる繼母の面を見るにつけても。不愉快なる事限なけれど。祖母の恩命に背くべうもあらず。病褥の前にて。身代讓與の證文を貰ひぬ。式終りて僅に三時間。病人は眠るが如くに身まかりぬ。朝露夕電脆きは人の命なり。恭輔のかなしみはいかばかりなりけん。目になかぬ丈夫の死別は。思ひやるさへにいと痛まし。今一日早かりせばと繼母は肚の裏につぶやけども。

さすがに斯ぞとは夫丈輔にもいはぬなるべし。三七日も過ぎ七々日も暮ぬ。祖母が身まかりて後は。繼母の振舞やう〳〵に目ざましうなりて。恭輔が心苦しさも彌増りぬ。之を女子にして「缺皿」が境遇。之を男にしては「源之助」が身の上にまさりて。危き事屢〳〵あり。今更證文をかへしまつればとて。母ぎみの嫌疑を消すべうもあらず。親族緣者などの手前もあり。父上もいかでかうけいれたまはん。不孝と世の人が譏らば譏れ。大丈夫有爲の志を抱きながら。豈いたづらに雌伏せんや。小義の犧牲となりて死なんや。去就を決すべし。と竊に決意し。ある夜しのびやかに用意をとゝのへ。兼て貯藏なして置たりける。金員若干を懷中にをさめ。學問修行のため洋行すと書置なし。添ふるに身代讓與の證文を以てし。別に一通の證書を認め。此身代は弟太市郎に悉皆讓與るとなん書たりける。かくして眞夜中に我家をぬけいで。急ぎ大阪へとこゝろざして。日ならず大阪の府下に着しぬ。兼て思ひ立し事あるゆゑ。まづ學校(澱南學校)の塾舍にいたり。舊友田所の宿所をとひ。やがて其下宿に音信しに。田所は此時しも。ある豪商の助力を得て。正に英吉利に學遊せんとて。已に神戸港まで出向きたりと聞えぬ。恭輔は羨ましくて。たゞちに鐵路を經て神戸におもむき。鼎がやどりたりし旅店を叩きぬ。田所驚きていで迎へて。別後を語り。來意をとふ。渥美は來歷を物語りて。しきりに田所の洋行を羨み。共にゆくべき方なきかと

いふ。鼎も情實をきくに及びて。轉同感の情を發して。はじめは(そゞろにも若き心とて)いかで恭輔をも同伴して。英にゆかばやとまで思ひしかど。たちまち其非なるを覺りしかば。大に恭輔を諭していふやう。對面今四五日早かりせば。君が爲人を財主に語りて。扶助を乞はむ事もかたきにあらねど。發航明朝に迫りにたれば。今更いかにとも詮術なし。洋行の志は思ひとゞまりたまへ。殊には父母の許可も得で。ト半いひかくるを渥美は打消し。誼もなき由緣もなき貴君の恩家に。僕が世話をかくるいはれはなし。よしや二三日の猶豫はありとも。僕は其手段を取らうとは思はず。賴むは莫逆たる君の義氣のみ。君もし其昔の交誼をわすれず。僕を友人ぞと思ひ給はば。只乞ふ。僕に與ふるに。君が荷物たるの資格を以てせよ。(鼎)そはまたいかに。(渥)されば。僕二三日の窮屈を忍びて。君が古行李のうちに潛まん。君荷物なりといひこしらへて。之を汽船中に積のせたまへ。斯て洋中にいづるに及びて。僕機をはかりて大に叫ばば。船中定めし騷動せん。僕が兎角して出現せば。多少君の言を煩はすべし。斯樣々々にいつはるべければ。決して君の爲に難儀とはならじ。且又英國にだに着達しなば。其後の事は僕の手にあり。決して君が身を煩はしはせじ。鼎は聞も果ず。莞爾とうち笑み。扨も相かはらぬ架空の策かな。君の熱心には感服すれども。其稗史的の。否。いふべくして行ひがたき。架空の方策は。贊成しがたし。ま

づ神戸よりして長崎まで。早くて二日餘かゝりつべし。たとへば飲食をば忍ぶとするも。しらず如何にしてか便をば足すべき。たとへば長崎までは忍び得るとも。いかでか香港までは忍ぶことを得ん。長崎の手前にて發覺せんか。僕が如何ほどに說たればとて爭でか船長が承引なすべき。たゞちに長崎の港へ上して。そこにて警官へひきわたすは。元來いはずしても知れたる事なり。贅な事也。無益の業也。斷然その志望はとゞまりたまへ。かくいはば友甲斐なし。不信の仕方なりと思すべけれど。よく思ひても見たまへかし。君は豪商の子息にあらずや。かゝる冒險の手段をとらずて。いくらも洋行する便宜はあるべし。繼母御の憎惡。父御の偏愛。果していか程につらかるべきか。それらは局外にてしるべうもあらねど。鼎が心をもて之を見れば。走りて家を出る程とは思はず。何とて一二度は面を冒して。父御に遊學を願ひたまはぬ。何とて遊學を口實として。家督を令弟に讓りたまはぬ。これを公然に試みずして。ひとりで輕忽に前後を思量し。たしかに目的をも定めずして。匆卒家を去るは不覺にあらずや。これらは今更にいひいでずとも。君の智識をもて覺りつべき筈なり。しかるに其邊の遠慮もなく。輕々幸福なる家をいでて。ほとほと千金の身を誤らんとす。蓋し忍耐に乏しきが爲なり。否。一旦の情にまけて。己に克ことを得ざるが故也。君は夙に大志を抱きて。御國の公福を圖るにあらずや。一家の風濤をだも忍び得

ずして。國家の狂瀾を回らし得るや。君にも似あはざる擧動ぞかし。君は不幸にも豪家に生れて。いまだ辛酸の味をしりたまはず。口には忍耐を唱へたまへど。みづから其局に當りしときには。わづかの痛疼をば得も忍ばず。かゝる輕擧を行ひたまふ。是併しながら客氣の弊なり。僕とてもまた同樣なれども。君は不足しらぬ家に生れ。早く母御前に離れたまひて。所謂お坊さまで。否。我儘に……氣儘に生長りたまひしゆゑ。いくらか此病が多きぞかし。財力は權なりとは。君が常にいふ套語にあらずや。財の山をあとにして。無資無力にして世にいづるは。處世の良策といふべきものか。酷だ君の主義にたがふにあらずや。曲て今一たび家にかへりて。父上母御前にも詫言して。更に新生涯をはじめたまへ。たとへ幸に洋行するとも。けふの心にては益なき事也。奮然心持をいれかへたまへ。ト諫むるがごとく勵すがごとく。憚るところもなく直言して。くりかへしつゝ諭せしかば。渥美も一たびは憤りしが。やうやく思ひ得たる所やありけん。深く田所の實意を謝して。其意にしたがはむと約束せしにぞ。鼎も斜ならず打喜びつ。たがひに將來の希望を語りて。急に些ばかりの酒肴を命じて。別離の盃を酌かはしぬ。兎角するうちに日は暮れぬ。渥美は田所に打向ひて。いづれ乘込は明曉なるべし。僕は些少ばかり所用あれば。トやがて田所に辭し別れて。急ぎ旅店をたちいでゆくは。或は餞別の用意にやと鼎は思ひしまゝ。急が

しければ。別にとゞめもせでいだしやりつ。夜も深ぬ。恭輔はかへり來らず。いかにせしやらん。氣兼して餘所へ泊りたる歟。かう思ひながら鼎は臥しぬ。去程に乘込の時刻ともなりぬ。渥美は此時まで影だに見せず。さても何とせしか。不思議なるかな。あのまゝ沙汰なしに歸るべきやうなし。あまり公然に罵りしゆゑ。或は腹をたてて。歸りさりし歟。否。さる氣の狹き男にてはなし。奇態な事かな不審也と思へど。今さらこれが爲にたゆたふべくもあらねば。やがて蒸氣船に乘込にたり。船は程もなく港をいでつ。さすがに心の中安からず覺えて。とさまかうさまに思案すれど。何とも其理由を思ひ得るに由なし。時しも東の空白みそめて。横雲面白く引わたしたり。ありあけの月もやう〳〵に隔たりゆきて。今は依稀として影薄うぞなりたる。日ならで我國の音信も。かやうに遠ざかりゆく事ぞと思へば。猛きますらをも。さすがに悄として心細う覺えつ。故郷なる父母の上はさら也。あやしうゆきちがひて別れたりし。渥美恭輔が事なんども。すべて氣を沈ましむる媒とはなりける。馬ケ關をこえ長崎をすぐ。雲か山か。天邊わづかに見る筑紫の峯々。これを我國の名殘也と思へば。平生詩を嗜まぬ心ながらに。覺えず絶句二ツ三ツならべたるもをかし。香港に着するに及びて。心やう〳〵に雄々しくなりぬ。印度洋を渡るに臨みて。豪氣天を衝がごとき思ひありき。その何故にしかるにやあらん。其身もしらざりしはをかしから

ずや。

鼎は英國に着してのち「ヲックスフホウド」の大學に入り居ること。一年あまり二月となりぬ。いまだ卒業にはいたらざりしかど。大に國事に感ずる由あり。且は大陸漫遊の念あり。久しく英國に滯在せむこと。元來田所が本意にあらねば。竟に大學の門を辭して。やがて歐洲の大陸に渡りつ。佛蘭西にあること三月あまり。政治界の現況。風俗人情。其大體をば觀察し得て。更に獨逸國の「ベルリン」に移りぬ。こゝにて一年の月日を費し。をさ〳〵獨逸語を修めしほどに。談話も殊の外達者になりて。一層研學の便宜はましたり。名高き碩學の門を叩きて。政治法律の奥義を窺ひ。かたはら此國の施政の狀況。さては其利害を觀察して。頗る得たるところ尠からねば。もはやいたづらに遊子となりて。異國にさまよふべき身の上にはあらず。いでやふるさとに立歸りて。我身の本分を盡すべけれ。ト竟に獨逸國をかしまだちして。佛の「マルセイル」の港に趣き。そこより日本ゆきの汽船にのりこみ。今年三月のはじめつかた。やうやく神戸港にかへりつきぬ。鼎の故園は安藝の廣島也。母親は洋行中に身まかりたれど。父は今なほすこやかなり。鼎は故園にかへりて。およそ二十日あまり家にをりぬ。明年は議院の改選期なれば。いかで其候補とならばやと思へば。父にも其心をあかしつげて。一まづ東京へたちいでたるうへ。時世の風潮

をも窺ふべし。とやがて廣島をばあとになして。陸路を東京へと登る程に。彼の恭輔が身の成行。さすがに今も尙心にかゝれば。わざ〳〵宮驛より路を轉じて。汽車にて知多郡の半田におもむき。渥美の造酒店におとづれしに。恭輔は先年たちいでしまゝ。今尙行方をしらずと答ふ。田所は胸潰れて。望を失ふこと大方ならず。かくては其父親に逢はむも管也。さらばとて。宮驛に戻りつ。竟に東京にたちいでたりしが。兎角に氣にかゝるは渥美が事也。日本橋の邊に假寓して。鑑定代言に從事しながら。折々政談の演說をもすなる。東京にいでてより。いまだ半年にも及ばざれど。其名は遠近の縣にも知られつ。此日も高崎の有志に招かれ。政談演說におもむきたりしが。今しも故ありて近在を廻りて。あたかも東京にかへるにぞありける。（以上鼎の物語也。）

第四回

一雙の星眸詞狂の魂を奪ふ

田所鼎の長物語を菱野は只管に聞とれつゝ。彼の熊谷の宿に於て。汽車を乘かへしも夢心地なりけり。桶川より乘客一人を增しぬ。年齡二十二三。眼鋭く色白く。鼻筋通りたる支那人也。身

粧も何處となう卑しげなれば。上等室は其分に非ざるやうなり。殊にジロ〳〵と他を見るは。pick-pocket〔巾着切〕の亞流にあらずや。油斷なりがたし。ト田所鼎は早くも用心をばしたりしかど。之を菱野には告るに間暇なし。されども物語をなす間に。始終其眼を斜に注ぎて。暗に防衛をばなしたりしかば。果は彼男も心附しにや。遙に片隅の方に居寄りて。態と此方よりは遠さかりぬ。菱野は斯有ことに毫も氣附ず。「何時の間に田所は斜視となりけん。否。斜視にはあらざるに似たり。眼の見當が違ふのみならん。妙な癖を得たる者かな。」ト肚の裏に思ひながら。たちまち二ツ三ツ目ばたきなし。キツト田所の面をみやりぬ。「離婁の明も其背は」とやらん。我癖は棚へあげて。

其日の夕暮に。汽車は東京の下谷に着しぬ。此時田所の長物語も。やう〳〵其局を結びたりしかば。嗟嘆を幕無にし居たりし。菱野はやう〳〵に嗟嘆を止めて。

（詞）實に思ひよらんお話で。轉感慨に堪ませんでした。我輩は恰ど渥美が卒業以前に。……□年の七月に歸省しましたから。全然內實も存じませんし。渥美の大志も。……ヲツト停りましたネ。○サアまづ。

田所は一寸會釋して。（むかしならば。まづ貴君からなどと虛禮をする所なれど）。直に先に立て

立出れば。詞狂も引續いて汽車を下りぬ。鼎は急はしく菱野に近づき。Beware〔警誡せよ〕云々とさゝやく。詞狂ははじめて心附て。たちまち以前の支那人に向ひて。三四度目ばたきを注ぎかけぬ。

斯て兩人は停車場をいでて。兎に角彼處にて食事をなすべし。「彼處の新しき洋食店で。」ト鼎が指さしして打さゝやけば。菱野は異議もなく同意せしが。

「一足お先へ。我輩は便所に急務が……

ト叫びながら。再び停車場へ駈戻りぬ。鼎は嘲るが如く。憫むが如く。少しく口元に笑を含みて。菱野の後影を見送りしが。やがて廣巷路の方へ向ひて。獨おもむろにギッシ〳〵(靴の音)。詞狂は暫くして便をたして、再び元のとこへ來りて見るに。鼎はもはや先へゆきぬと思し。後れたりと急ぎゆくに。但見る well known の岡田の此方に。頗る新しきコヒイ店あり。店より不慮面さしいだすは。不知其店の娘子などにや。黄昏の薄明にて能は見えねど。星のやうなる隻の眼は、不取締なる菱野の眼へ。たちまち電氣然。きらめき入りぬ。詞狂はもと小說肌也。美麗を神として崇むる性あり。決して其色に迷ひしにはあらねど。其美に魂をば奪はれやしけん。恍惚ボカンとしてたちどまりぬ。バタリと衝當る人こそあれ。詞狂は我しらず仆れんとして。

(詞)エイ支那奴め……ヤヽやられたぞ。○ウヌ泥棒ウ。

ト叫びながら踵をひッかへして追かけたり。

第五回

田所「コヒイ」店を叩きて舊友の所在を尋ぬ

かゝる事のありとはしらず。田所鼎はさきにたちて。獨廣巷路の方へと向ひて。已に割烹店の前まで來りぬ。何心なく回顧るに詞狂の影だにも見えざりけり。いかにせしやと思ひて。彼方をあちこちと打見やれど。絶えて鼠色の白細袴も見えねば。大なる眼の玉の光は更なり。扨は便所などへ立寄りし歟。獨さきへ往きて待べき歟。と徐に「ハンケチ」を取出して。鼻を押拭ひて突立居り。折から三橋の方にあたりて。俄に騒がしう人立して。たちまち黒山の如くになりしが。程なく黒山は動きいだして。やがて廣巷路の方へと進みぬ。遠くして之を望めば。うば玉の黒き蟻が。辛く大なる毛蟲を捕へて。或は頭或は足。ところさだめず喰ひつきて。我巣へひきもてゆく樣にも似て。皆人ぞろ〳〵と隨ひゆくめり。「ヤア何だ〳〵。とわざ〳〵遠方から馳てゆく書

生あれば。「コウ見や喧嘩だぜ。ト飛だす勇俠。とかく物見だかきは都會の癖にて。さまでにな
き事だにもてはやして。貴重の時を潰す野次馬ぞ多かる。鼎は此體をば打見やれど。我に要なけ
ればふたゝび見ず。さるにても菱野はいかにと。覺えず半町ほど立戻れど。詞狂の影だにも見當
らねば。こゝにやう〳〵疑念を生じて。或は我と彼と行違ひて。詞狂がさきへゆきて待つにあら
ずや。一まづ料理店に登るこそよけれ。彼亭と取極て置たる事ゆゑ。よしや一旦は間違ふとも。
到底は間違ふべき氣遣はなし。途中でまごつくは行違ひの種なり。然なりと決心して急ぎ足に元
の料理店に戻る程に。すれちがふ人があるきながら。

(甲)さやうさ。うまく引かゝりましたヨ。近頃の拐賊は素敏て。なか〳〵捕まらぬと聞ました
が。多い中にやアあゝいふ初心な奴も。……。

(乙)ありやア正眞の支那人でせうネ。中にやア支那人の僞物があるといふはなしですが。イヤ
兎角時器なんぞを見せびらかすは能ない。いくら要慎をしたからツても。フツト思ひよらん所
で。……。

(甲)さやうさ。其濺を考へるから。我輩なんぞは。始終時器をかくして居ます。もつとも飾に
もならんはうですが。ハヽハヽ。

(乙)ハヽ、それに限るテ。我輩なんぞは。もつと堅固です。二三ケ月以來藏の中へ仕舞ツてお
きます。ハヽヽヽ。

用所鼎は此時しも。已に料理店に入らんとせしが。今圖らずしも洩聞たる。言葉の端々に不審
を起して。支那人といひ時器といふは。多少我菱野に因あるに似たり。先刻汽車中にて見たりし
支那人。いかにも怪むべう思ひたりしが。菱野が油斷して彼の爲に。時器を掠奪れたるに非る歟。
料理店を叩きし上。若し彼在ずと定まりたらば。一まづ警察署をたゞすべしと。やがて料理店の
門にたちより。菱野は來らずや。ときゝたゞすに。さるお客さまは無しと答ふ。しからば。かく
かくの客人來らば。云々の故ありて。其の來る事遲きがゆゑに。其行方の探索かた〳〵。お成街道
までゆきしと答へよ。此事依頼む。といひ殘して。急ぎ廣巷路を斜にあゆみて。お成街道の方へ
たちいで。程なく警察署のほとりに到れば。男女今もなほ群集りて。馬車と人力車の邪魔をなす
を。巡査がいかめしう罵り制して。退け〳〵といふ聲きこえぬ。鼎は辛うじて人を押わけ。已に
警察署の前へいでたれど。故なく門内に入るべうもあらず。かたへに立居たりし男に向ひて。

(鼎)何事があつたのです。

話しかけられたる男は。開いたる口を。俄に「へ」の字形に塞ぎて。たちまち田所の方へふりむき。

(男)拐賊です。
(鼎)シテ其掠奪れた者は。どんな人物でしたか。
件の男は面倒な事をといはぬ計なる面地にて。
(男)ナニ田舎……イヤ旅人風の男さ。
田所は覺えず進みよりて。
(鼎)フム。シテ年齢は何歳位で。面相はどんな風で。
件の男は五月蠅と思ひたるにや。聞えざる振をして。彼方へふりむき。やがて後の方へ引さがりぬ。
十三四歳の小學校の生徒らしき一個の小童。先刻より此問答を聞居たりしが。仔細らしき面して。横合より田所の面を見あげ。
(童)巡査もよく其職を盡しますネエ。今捕ッた拐賊なんざア。餘程有名な奴ださうです。
鼎は其言語の大人ぶりたるを。傍痛く聞做しながら。要する折なれば其人を選ばず。鼎はふりかへりて小童に向ひ。
(鼎)ハヽア左様か。……其のすられた男と云のは。何歳計の男で。何様な體裁の……。

(少)さうですネエ。二十有六位でせうか。色は黑いやうな方で。
(鼎)フム。洋服か。日本服か。
(少)洋服です。今ちよいと目擊しましたがネ。まるで地方人としか見えません。粧ひ得て妙とはあれでせう。
「ハテサテ生意氣なる小僧かな。と思へど。話の様子にて考ふれば。どうやら菱野らしう思はる故鼎は又更に少年に向ひて。
(鼎)それでは。賊は捕まッたのだナ。
(少)アヽ。此一舉で賊も大に勢焔を減ずるでせうヨ。
此一句をきゝて鼎は我しらず吹いだしぬ。少年は尙語をつぎ。
(少)どうも此頃は非常にビクポケ(これはビックポッケットのよこなまりなり。)卽ち拐賊が殖ましたネエ。それに非常に猾智が進んだから。日本人で居てチヤン〳〵の風をしてるのがあるさうです。實に慨歎の次第です。○それだもんだから大概の者は拐奪れるんです。しかし査官にあつちやアせうがないと見えて。甘くひッかけらりやアがつたんです。
(鼎)ハヽアそれぢやア何歎。巡査がよい所へ通りかゝッたのか。

(少)ナニ査官の時器をすらうとしたんです。

田所は眉を顰めて。

(鼎)それぢやア地方人といふのは。

(少)忍巡査が地方人の風をして甘ツく奴をかけたンです。ソラ〳〵二局へ送られるンだ。○ヤア出てきた〳〵。

トいふ中拐賊と見ゆる五十計の男を。(支那人風の男を)巡査が引連てたちいでつゝ。頻に退け退けと制するにぞ。鼎は急がはしく其場をぬけいで。「ハテサテ無益なる問答せしかな。我身ながらに鈍しかりき。詞狂は來りしかも圖りがたし。今一ど料理店に戻りて見ん。と再び元の道へ足を轉じて。程なく前の店に歸り來りて。菱野の音信はなきやと問ふに。何の音沙汰もなしと答ふ。流石に不審は晴やらねど。此時。已に黄昏にて。何處も燈火を點る頃なり。北山となりたる腹には。東墓の鐘の音も。さながら貫くやうに聞えぬ。兎も角も晩餐を。と鼎は此樓に登りて見るに。此家は新しき料理店にて。さまで上等といふ際にはあらねど。總て見にくからず建做したり。所謂追込の食堂にて。貴賤上下千種萬狀共に團居して物喰もをかし。「シャンパン」一罎。別に三品四品料理を命じて。鼎は只一個卓子に向ひて。語らふ人やあると四下を見るに。右の方

なるは女連なり。をさなき子供さへに伴ひたれば。話の敵手にはなるべうも見えず。左は紳士風の男と見ゆれど。若き束髪の婦人をつれたり。夫婦歟「准夫婦」歟。ひそ〳〵話に餘念なきを。妨げんは無心に似たり。更に向ひなるは如何にと見るに。いづれも年若き書生風の男。人もなげに差向ひて卓子を二人にて專有したるが。已に陶然に近づきたり。と思しく。段々聲高に打語らふ。聽苦しき筋の事も多かり。

(甲書生)ヲイ耳塚。君はさういふがなア。我輩は是非。イヽヤ是非さ。キツと志を遂て見せるヨ。

(乙耳塚)止ヨ〳〵。それぢやア君は尚知んな。あの花に主のある事を。

(甲)エ。何。主だと。主たア何だ。

(耳)主とは owner 〔持主〕さ。ありやア君。高崎の商人の妾だぜ。

甲は飲かけたる「コツプ」を下にさしおき。グツと眼をすゑて耳塚を見やり。

(甲)エ妾だと。○こりやア驚いた。こりやア奇だネ。それにしちやア〔○○〔餘〕〕恍惚だネ。〔○○virginish〕〔未通女らしすぎる〕。ハヽヽこんな字はないかしらん。兎に角驚いたなア。エ。君眞實歟。其商人の名を知ツて居るのか。

（耳）ハヽ、大層頭腦を痛めだしたな。それだから置けといつたのだ。全體君は迂濶だなア。あの fair〔美人〕の履歴を知らんたア。高崎の生絲製造所の番頭。渥美某の「准妻」たる事ア。已に十目の認る所だ。

鼎は此話を先刻より聞ともなしに聞てありしが。渥美といふ言葉に心附きて。眞地目で耳をたてて聽ゐる程に。「ナイフ」と肉叉の手中の作用。やう〳〵なまのろくなりたるもをかし。

（甲）ダガどうも解らん譯だなア。製造所の番頭の妾にしちやア。矢張舊風に江一格子。松に板塀ときさうなものだが。「コヒイ」店とはスコシ變だな。

（耳）底にも蓋ありと嘗て聞けりだ。たしか渥美とかいふ男は。元が愛知縣の書生とやらで。佛へ遊學もした者ださうだが。其際かの fair〔美人〕の「ブラザア」〔兄〕とかに。世話になつたとかいふ理由があツて。日本へ歸ツてから恩がへしに。あれと mother〔母〕とを厄介にして。內々世話をして居るとかいふテ。准妻といふは內々の事で。恐らく公然ぢやアないのだらう。

（甲）ヘヽイ。君はまたよく探ツたなア。ゲーツプウ。どうしてしツてる。

（耳）實は我輩の cousin〔從弟〕がネ。

といひかけしが。俄に聲をひそめ。洋語にて何やらうちさゝやけど。間遠ければ此方には聞えず。やゝありて次第に調子高くなりて。

爰に於て乎 cousin〔從弟〕も失望。褒美の金を占損つたといふ話さ。勿論公然と渥美の妾だ。と先方が明言した譯ぢやアないが。そりア言ずして明なりだ。

（甲）ゲーツプウ。恭輔とかいふ奴ア。甘くやつて。ゲーツプウ。居やアがるなア。それぢやア果て駄目かなア。シカシ君。金づくでゆかん事も腕づくで〇ウヽイ〇隨分ゆくぞウ。

（耳）ハヽヽ。腕力づく歟。

（甲）馬鹿いへ。策略さ。

（耳）君の手練ぢやア當にならん。寧ろ腕力の方がよからうゼ。腕力といやア。手段は幾許もある。「カズン」〔從弟〕は「ビゲイ」〔佛人の名〕から傳授を受て。mes ——をうまくやるヨ。あれをおそはツちやどうだ。

（甲）可厭だ。正々堂々でなくては……それはさうと歸途に寄らう。

（耳）何處へ。

（甲）あたりまへさ。「コヘ」〔コヒイ店〕へさ。こゝの「コヒイ」は甘くないから。直に例のと

こへ往うぢやないか……ドツコイ可厭アに熱心だな。といひさうな口つきをするが。マア來いヨ。たツた半町の附合だア。○ヨイ boy。勘定だ〳〵。ゲーツプウ。

書生二個は勘定をなして。やがてドサクサと樓を下りぬ。二人が始終の物語は。さまで著しき筋にてもあらねば。餘人は氣にもかけぬ樣子なれども。鼎は思ひ當る廉々多くて。覺えず頬杖を突たるまゝ。「ナイフ」と肉叉をば遊ばせたるゆゑ。惜しや。「カテレツ」の一皿だけは。すこしも味はずて。奪ひさられつ。鼎肚の裏に思ふやう。

愛知縣の書生……渥美といふ商人……恭輔とかいふ奴……佛蘭西へ遊學をした……

どうもあの渥美に相違ない……不思議だ。どうして佛へいつたか……「コヒイ」店……

半町計の附合だ……ハテナ何邊だか。試に訪ねて見ようか……生絲商人……成程渥美がやりさうな事だ。

と今聞たりし言葉の端々。獨で肚の中に繰返して。疑團は段々に大きくなりぬ。

(鼎)ボーイ○ヨイ勘定だ。

此中ボーイ來り勘定書を持來る。

(鼎)此邊に……半町計の處に。「コヒイ」店があるか。

(ボーイ)ヘイ直停車場の手前に一軒……廣巷路にも。池の端にも。……。

(鼎)半町ばかりの所はどこだ。

(ボーイ)停車場の手前のが一番近うございませう。

トいひかけて鼎の面をながめ。

(ボーイ)評判の娘の居る店でございます。ヘヽヽヽ。

鼎は苦き顏をして。ボーイの愛嬌をきかざるが如く。

(鼎)若し余を尋ねて人が來たら。……二十五六の旅人風の。洋服の男が來ら。其「コヒイ」店に居るいつてくんな。……田所といふ名前を尋ねて來たら。

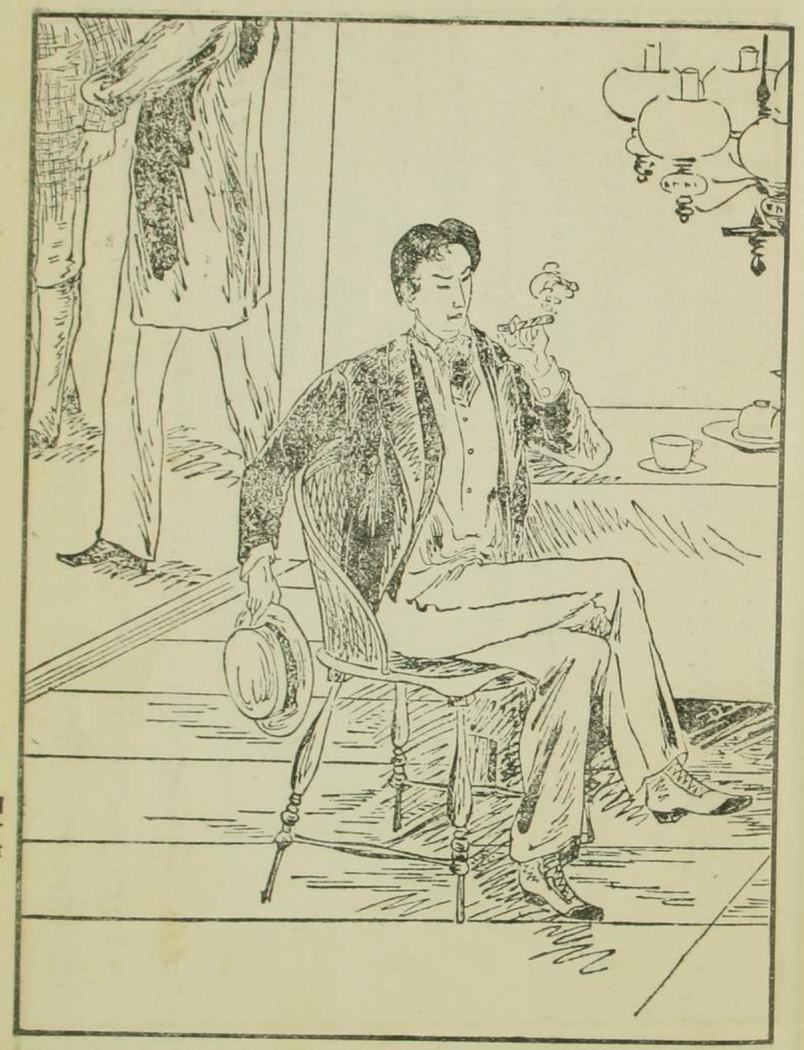
(ボーイ)畏諾ました。

鼎はやがて此樓を下りて。元きし停車場の方へとゆく。途すがら思ふやう。さるにても詞狂はいかにせしや。今まで尋ねこぬは不思議といふべし。家を間違ふべき道理もなし。奇異なる事もあるものかな。かゝる事がありぞとしらば。先刻其宿所を問ふべかりしに。別後の話やら。渥美の事やら。話が色々に錯交して。竟に要點を聽くにいたらず。我宿所をさへ告ざりしは。近頃ぬかりたる事にてありき。今宵このまゝに逢はずもあらば。明朝は新聞紙へ廣告して。早速其宿所を

たづぬべきなり。不思議に相逢うて不思議に別れ。又々不可思議の傳手よりして。渥美の近況を
ば知り得たるは。奇中の奇なるものといはざるべけんや。嗚呼今日はいかなる日ぞ。頻に故人緣
の纏る日かな。イデ〳〵「コヒイ」店を叩きて見ん。
ト獨うなづきつゝ歩む程に。忽ち一「コヘ」〔コヒイ店〕の前に來りぬ。是なん第四回の末に於
て。詞狂の目にとまりし同じ店なり。さきに詞狂をして畫蔦の爪にかゝらしめし。其動機とも云
べき乙女は。今しも腰掛をば踏臺にして。庭なる「テイブル」の上に登りて。「ランプ」の機關
などを正すにや有ん。通街を背にして立たる體なり。淺ましき品柄の洋服にはあれど。（西洋人
に見えたらんには。寢衣を被てゐるかといはれつべき。いと〳〵麁末なる洋服にはあれど。）處柄
いとふさはしう。さすがに可憐なりと見る目ぞ多かる。店に客一個もあらざるこそ。結句便宜よ
しと鼎はうなづき。獨ツカ〳〵と進み入れば「ヲヤ被爲入と急がはしく。乙女は振回りて一寸會
釋し「御免なさいまし。と面を赧めて。急ぎ「テイブル」より降んとして。「ランプ」を背にし
たる其姿は。月を背負ひたる嫦娥にや喩へん。明眸皎齒。蛾眉豐頰。薄化粧のみと見えながら。
色あくまでも白うして。綠のたばね髮と相映ず。打扮の淡白なる。言語の無心氣なる。色好まぬ
目にもとまるべらなり。愛嬌毛の眉のあたりへ振かゝりたると。白薔薇の花釵が。將にぬけん

として落ざる風情は。何とか形容のあるべき事なり。菱野に見せざるこそ遺憾なれ。と鼎は肚の
裏に打咲みたるのみ。ふたゝびは見もかへらず。「コヒイ」を製してよ。と命じながら　やをら傍
の椅子にかゝりぬ。乙女は奥へ入ぬ。やゝありて十二三歳の女の童が。「コヒイ」を臺にのせて
持いでたり。「菓子やある。と問へば。「いろ〳〵あり。と答ふ。「さらば云々の品をと。わざわ
ざ指名して吩咐るは。元來喰はんずる心にてはなし。流石に突然と湿美の事をば。明ては問ひが
たきに因る事ぞかし。
折からバウワウと二ツ三ツ叫びて。表の方より一散に。店へ走り入るは大きな洋犬なり。Cake
（菓子）を皿に盛りて立出たる。以前の Damsel〔娘〕の姿を見るより。ワウーと嬉しげに聲を
あげて。前より跳る如くたちかゝれば。「アナヤと聲をあげて二足三足。覺えず後の方へ退きし
が。
（娘）ヲヤマア Perro（犬の名）だヨ。今朝から何處へいつて居たんだヨ。ほんたうにマア吃驚
したヨ。サア〳〵邪魔だヨ。お客さまへ菓子をあげるンだ。エ、お退といふに。
犬はうれしげに裳裾にすがりて。クル〳〵附纏ふと見えながらに。なく聲なにとなう悲しげなり。
鼎は年久しく泰西にありて。粗犬の性もしりたる故。其の吠る聲の調子によりて。犬の心持を推

旅工圖活



し得しが。今此犬の様子を見て。たちまち不審なりと思ふ事あり。眼をとゞめて犬を見るに。たしかに佛蘭西南方の産と思しく。毛は茶色にして白斑あり。眼のするどき。耳の大やかなる。なみ〳〵一様の種類とは見えず。年齢は三歳ばかりにやあらん。其形も常並より大なり。口に何やらんくはへたるは如何に。不思議と更に見るに西洋紙と思し。

(鼎)姉さん。此犬は家の犬かネ。

(娘)ハイ。ほんたうは預ものでございます。

(鼎)さうだらう。大層いゝ犬だ。何かくはへて居るぢやアないか。

娘ははじめて心附きて。

(娘)ヲヤほんに。……アラ可厭だ。ヂツとして居なヨ。

といひながら犬がくはへたる紙をとる。此時先刻の女の童もきたりて。

(女童)なんだかいやアな泣聲をいたしますネエ。

(娘)ほんたうに變な聲をするヨ。

といひながら紙の皺を押のばせば。パタリと落ちるは一通の手紙なり。鼎も首さしのべて打見やるに。卓子の陰になりてよくは見えねど。たしかに「渥美さま」と讀まれたり。もつとも上封も

せざる文にて。女の手蹟なりと見えたる程に。鼎は我しらずたゝんとせしが。さすがに落附きて。

(鼎)ヲイ「コヒイ」のかはりを。

(女童)かしこまりました。

娘は落たりし手紙を拾ひて。そつと卷戻して。六七行文の中程をよみたりしが。たちまち顏の色あかうなりぬ。急に卷收めて懷中にいれ。以前の西洋紙を押展しゝが。之には要なしと思ひたるにや。押まろめて放りいだし。(放りいだせしは仍なげなれど。これには因緣がありさうなり。)たちまち奥の方へはしり入りぬ。犬は此時しも草臥ぬと思しく。卓子の脚のそばに打臥してありしが。俄に起あがりて。奥の方へと。娘のあとを追つて走り入りぬ。

故ありげなる始終の様子に。鼎は我しらず立あがりて。庭の向ひがはへ放りだしたる。以前の西洋紙を顯にたづねて。そつと拾ひとりて椅子に戻ば。此時又「コヒイ」を持いでたり。折しも二三人の客來りて。菓子「コヒイ」等を求むるにぞ。女の童はいそがしげに。一個で彼方此方周旋しぬ。娘はいかにせしや。いでてもきたらず。

鼎は彼紙を握りたるまゝ。故意と我椅子を片隅へ移して。今きし人々に目だゝぬやう。陰にて彼の紙を展て見るに。正しく佛蘭西文の書簡と見えたり。鼎は英學には長じたれども。佛の文章は

能くも得讀ます。さりとて全盲目といふにもあらねば。（嫉妬ぶかき細君が。夫の宴友から來た手紙を。そつと開封して讀むが如くに。）ボツ〳〵拾ひ〳〵讀もてゆくに。

――――十分甘く成功すべしと存候――――甚だ危險なる策にてはあれど――――（此邊二三行未詳）されども其大量なるが我奇貨なり――――主人の寛大と主人の――――とは彼を救はずして彼を――――するや必せり――――拙者が當製造所の名前人となるは――――貴殿を拙者方の番頭とするも――――さはいへ心懸なるは令妹の身の上なり――――

以下は走りがきにかきたるゆゑ。ます〳〵解しがたき文字多くて。ほと〳〵意味を得る能はざるゆゑ。鼎は遺憾ながら讀も盡さず。名宛は。

ユバラ君へ。

とありて末には。

辱知　イ。チモト。

とあり。チモトとは何處の人にて。ユバラとは何者なる歟。文の意味と共に詳明ならねど。思ふに彼方此方の意味を推すに。チモトは製造所の番頭などにて。ユバラは其者の下役ならん歟。主人といへるは何者にて。「彼」と冥示せるは抑誰ぞや。前後の文意を見て推測るに。蓋し「イ。チ

モト」は邪佞の者にて。窃に陰險の手段を用ひて。所謂「彼」といふ一個の男を寃に斃さんとするにはあらずや。今しも看一看たりし手紙といひ。此文中の意味といひ。所謂疑中の暗鬼かしらねど。渥美に關係ある者に似たり。其關係は善歟。惡歟。進んで叩かでは叶ふべからず。今しも猶豫すべき限にあらず。と斷然意を決せし其折しも。ふたゝび店の中は靜寂になりて。客は悉く歸り去りぬ。「扨も尻の長き客人かな。と言ぬ計の面地して。さも不審さうに控へ居たる。以前の女の童を近くまねきて。

（鼎）渥美といふ人の身の上について。少々折入て話があるが。此家の主人にはあはれまいか。

○主人は今家内に居ないか。

少女は聞き眼を一面に見はりて。凡二分間は答もなさず。鼎はさもあらんと言葉しづかに。

（鼎）もし主人が不都合ならば。先刻の姐さんでもわかるであらう。予は恭輔さんの舊知己で……實は色々と聽く事があつて。わざ〳〵尋ねて來た譯であるから。兎に角この事を話してくんな。

少女はやう〳〵に合點せしと見えて。

（少女）お老母さんは病氣ですから。おみやさんにさう申しませう。

やがて少女は奥に入りぬ。やゝしばらくして出來りて。こなたへ來たまひて。ト奥へ請ず。たゞし奥といへど深くもあらず。二間並びたりと見えながらに。一間は障子をもてしきりたれば。いかに建做したるか。窺ふに由なし。此方は四疊半の小き部屋にて。勝手臺所客の間をも兼たり。されども心地よく掃除し盡して。疊も尚新しげなり。乙女はしとやかに出迎へて。マア〳〵此方へと鼎を請じて。堺段通の座布團をしきぬ。おかまひなさるなと會釋をして。鼎は靴をぬぎて座敷に登り。

(鼎)だしぬけに聞ますのも。甚だ如何らしい譯ではあるが。少々氣に懸る事もあるゆゑ。萬事打明ていひますから。かならず疑はずに聞て下さい。もとわたしは。

ト膝を進めて。大阪以來の物語を。ざつと掻つまんで語り了りて。更に今日の經歴より。彼の料理店にて聞たる話。はじめて手がかりを得し事まで。手續一通を說しめせば。乙女は聞每に驚き歎じて。はじめは訝しげに聞居たりしが。いつしか安心せる容貌とかはりて。竟には嬉しげなる肩を開きつ。頻に茶菓子など鼎にすゝめぬ。

第六回

二通の手紙によりて田所舊友の身の上を卜す

娘は急須の茶を注終りて。鼎の膝の前へさしいだしながら。

(娘)それでは貴君さまのお名前は。もしや田所さまと……

(鼎)さやう。田所鼎とはわたしの事です。

(娘)ヲヤマアさうでございましたか。兼々湿美さんのお話で。お名前やお風說は。度々うけたまはつて居ましたが。お目にかゝりますは。

トいひかけて更にうや〳〵しく頭を下れば。鼎もよきほどに頭をさげて。「コヒイ」店の給侍にしては。頗る溫藉な女かな。と肚の中にて感じながら。

(鼎)湿美さんは製造所にとか聞ましたが。全體……おまへとは如何いふ關係で……親類で

すかエ。

顏を赧むる歟と心配せしに。娘は一向に平氣の體にて。

(娘)イエ親類でもございませんが。思ひよりません御縁で。横濱に居ました頃から。渥美さんには一方ならず。いろ〳〵御厄介になりまして。

(鼎)フム。してそれは又如何いふ譯で。

トいひつゝ。pocket(カクシ)に手をさし入れ。しづかに「ハンケチ」を取出して。鼻を拭はんとなしける程に。先刻拾ひたりし洋紙の手紙。此時「ハンケチ」に附着てありしか。圖らず膝の上にひらめき落ぬ。鼎は俄に心附きて。

(鼎)渥美さんの來歴もきゝたいが。それよりさきに聞たいのは。此書……イヤ「チモト」とかいふ人は存じて居ますか。

(娘)ハイ一二度お目にかゝりました。製造所の番頭さんで。

(鼎)それでは渥美さんの同僚だネ。

(娘)イエ渥美さんは一番番頭で。千本さんは二番番頭だとうけたまはりました。

鼎はしきりに打うなづき。

(鼎)そしてユバラとかいふ男は……

娘はすこしばかり面の色をかへしが。

(娘)その方も存じて居ます。佛蘭西の「ビゲイ」といふ人の内弟子で。元は横濱に居ました人で。

(鼎)これも渥美の友人かネ。

(娘)イーエ。(此言葉に餘程力が入たる樣なり。)

(鼎)フム。して此ユバラとかいふ男に。妹でもありますかネ。

(娘)ハイおつかさんといふ妹がございまして。

トいひかけしが。たちまち口隱りてさしうつむき。

(娘)渥美さんの旦那の妾になつて。今は前橋に居られまする……製造所の名前人でございます。

鼎は件の話をきゝてたちまち又思ふやう。

千本某は製造所の二番番頭……「ユバラ」某佛人の書記……其妹おつかは。千本並に渥美の主人某の妾……渥美は一番番頭「先刻の手紙の文言によれば」千本は「ユバラ」と相謀りて製造所の名前人とならうと思ふ……「ユバラ」は番頭にならうと思ふ……而してお つかは名前人なり……名前人とは如何なる譯歟……「手紙の文言によれば」さはいへ心懸りなるは令妹の身の上とあり……これは又如何なる理由ぞや……先刻の落たる手紙……女の手蹟にて渥美さまとあり……前後を對照して考ふるに。事の詳細はわからねども。千本

と「ユバラ」とが相謀りて。渥美にわざはひするものに似たり。仔細を推問せばおのづから知れん。……尋ねて見よう。

元來聰明なる鼎なればたちまち肚の裏で問答して。理由の幾分かを推定せしかば。煎茶を取あげて舌を濕し。まづ彼の手紙をとりあげつゝ。

(鼎)實は此手紙の事について。色々氣にかゝる事があるが。おまへの方に心當があるか。一一きかないではわからないが。

娘はいぶかしげにさしのぞきて。

(娘)そしてその御手紙とやらは。……

(鼎)これは今店でおまへが打棄ッた紙だが。

(娘)ヲヤそれぢやア其紙はお手紙で。

(鼎)サアこれが最も大切な手紙だが。

トおのれが思ひ得たる一伍一什を。わざと事短に物語りて。もしや右樣の事につきて。思ひ合したる事はなきや。千本が恭輔をけぶたく思ひて。竊に追はんとせし事などはなきや。おつかと恭輔の關係はいかに。千本とおつかとの交際はいかにと逐一事細に問ひたゞせば。おみや(娘の名)

は聞たびに打驚きて。俄に懐中を搜探りて。以前の女の文とりいだして。

(みや)それぢやアこの文は。どうしたのでございませう。渥美さんはわたくし共へは。何にもおはなしは御座いませんが。いつうかさる處からきゝましたには。千本さんと渥美さんとは。内々すれやつておいでなさると。……それにお塚さんの兄さんが……

(鼎)おつかの兄といふは。彼のユバラとかいふ……

(みや)ハイ其弓原といふ人が。著名の奸物でございまして。千本さんとは親い中だとか申しますから。事によりますと只今のおはなしは。二人の惡だくみかもしれませんが。マア此文を御覽なすッて下さいまし。渥美さんに限ッてこんな企をなさりさうにございませんけれど。トいひかけて文をさしいだすを。鼎は手に取て打見やれば。渥美さま御許へ。塚よりとあり。卷もどしてはじめより讀むに。さすがにつたなからぬ女の筆にて。

御恙もなう御歸あそばし候よし御めでたくぞんじ上り〳〵。一日も早く御目もじいたし度ととび

たつばかりには思ひ候へども人目を忍ぶ身は心にまかせず。とく〳〵濱の用事すめかしと只管

念じをり上り〳〵。兼々御やくそく申置候事一日もはやくかたをつけ候はずば。思ひよらぬ故障

出來いたすべくと。まことに〳〵心もとなう。それゆゑわけて御歸の日を指折まちくらしをり〳〵。

千本もうす〳〵は二人のたくみを推察いたし候やうぞんぜられ候へば。もはやゆうよいたすわけにはまゐらず。御まへさま御かへり次第に。早々くびにいたし候やう旦那へわたくしより申すべく候。千本さへをらずなり候へば。後々の事はいかやうにも。旦那をだましおき候ゆゑ。さまでにあわてるにも及ばず候。とはいへ御歸のなきうちには。千本をおひいだし候わけにもまゐらず。かへりてあべこべにこなたの内事を。旦那にしられさうで心元なく。さりとて一筋縄ではゆかぬ旦那。いかにほんとらしく申せばとて。わたしの口のみでは承知もすまじく。それこれ御はなしあひいたさず候ては。互の身のやぶれとならんもしれず。用事が大概にすみ候はば。一旦御歸なされ候やう。くれ〳〵も念じ上とり。くはしき事は御目もじのふしと申のこし。まづは用事のみあら〳〵とり。

とかきたりけり。鼎はつく〴〵と讀了りて。やをら卷をさめて下にさしおき。小首をかたぶけて思案せしが。やゝありておみやに向ひ。

(鼎)此文面の様子で見れば。どうやらおつかといふ婦人と。渥美と密通して居るやうに見えるが。いかさま此事には多少の理由が。かならず別にある事であらう。一體製造所の主人といふは。何者で何といふ人で……渥美はもとどういふ譯で。其人の番頭となつた事だか。一通話

しておきかせなさい。

(みや)それをお話申しますれば。長い事でございますが。

トいはんとしたる其折しも。いと苦しげに奥の間にて。打咳ける女の聲「みやや〳〵。」と呼たつれば。ハイと應へて急がはしく。おみやは鼎に會釋をして。障子ひらきて奥に入り。何にやあらんやゝ暫らく。打さゝやきて居たりしが。又次の間にいで來りて。

(みや)まことに失禮ではございますが。母があなたさまにお目にかゝツて。色々おはなしをいたしまして。行末ながく(我身勝手ではございますが。)お力になつていたゞきたいと。……誠に身勝手な事を申まするが。お逢ひなされて下さいませうか。寔に尾籠な處で恐れ入りますが。

(鼎)たしか病氣だとき〻ましたが。……加減は。……大きに宜しい方……それは結構だ。

渥美さんのお馴染とあれば。餘所人とは思ひません。それではそちらへ參ツてもいゝかネ。

(みや)誠に取散して居りまして。甚だ失禮でございますが。サアどうぞこちらへ。○へみせのかたきいちやん臺所の方もきをつけておくれヨ。

奥の間は六疊敷にて。押入あり床の間あり。簞笥の上なるは縁起棚なるべし。燈火二臺までも點

してあり。風吹通せ。とて押開きたる窓の内へ。十七日の月今しもやう〳〵にさし入たり。葭簀屏風の陰にうちふしたるは母親なるべし。此時手杖つきて起直るを「其儘々々」と鼎はとゞめて。此方の一隅に座をしむれば。娘は母親を抱き扶けて。やをら床の上にすわらしむれば。母はうやうやしく手をつかへて。初對面の挨拶なす。鼎もよき程に禮をかへして。薄暗き「ランプ」の光につら〳〵病人の爲人を見るに。年齢は四十の上五六なるべし。已に年久しく病ほうけたるにや。顏色淺ましう憔悴衰弱へ。眼さへ恐ろしう凹みたるが。さすがに其氣分はたしかなりと思しく。言語應對は常人に同じく。毫も取亂せし樣もなし。幾分か繰返して鼎が信切の訪問を謝し問はるゝまゝに。かたみ代りに親子が語りいづる其身の經歷。渥美の身の上。鼎は膝の進むを覺えず。耳傾けて聽居たり。

第七回

客氣の少年そゞろに險を冒す

（以下母子の物語なり。）

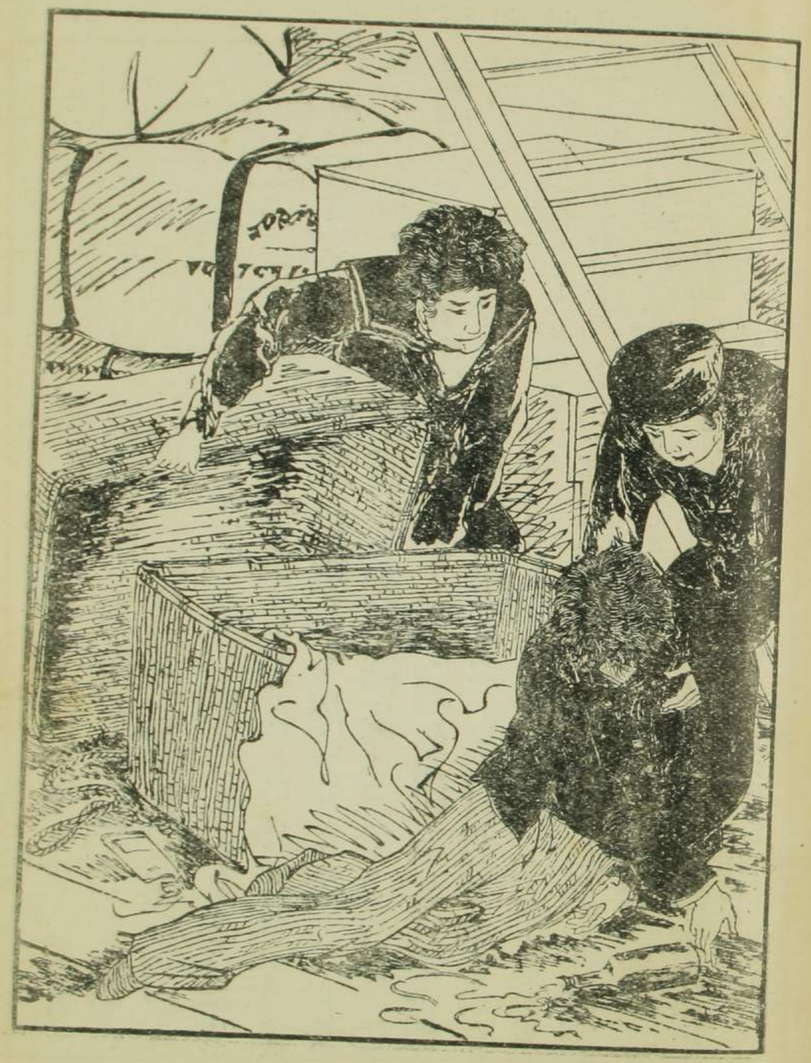
おみやの父親は何人ぞと問ふに。大阪府下堂島の米商。稻積庄次郎といひし者なり。今を去ること五年以前。庄次郎の倅玄治といふ者（おみやの兄）嘗て東京に遊學して。ある有名の學校に入り。年比佛學を修めてありしが。俄に洋行の志を興して。强て父に乞ひ。其用意をなし。時に十月の末つかた。佛國の汽船某號に乘こまんとて。まづ神戸までたち出つゝ。其地の旅籠屋にて親族なりける。梶田といふ家へに一泊なし。次の晩十時頃に汽船に乘込み。海を經て馬關にいで。其次の日の眞晝過に。玄海洋をうち越て。はや長崎に近づく程に。玄治は生來虛弱にして。殊には船に醉ふ癖さへあり。心地堪がたう苦しけれど。今より斯の如き容體にては。名高き印度洋をいかにしてか渡らん。あな我ながら男甲斐なし。痛疼快樂は雙つながら。大方神經の作用によるのみ。力めて忍びがたき譯やはある。奮發忍耐は此時にこそあれ。イデ〳〵と心を勵まし。わざと甲板にたちいでつゝ。彼方此方只一個そゞろあるきして。渺たる海原を詠めて居り。折から船の中俄に騷がしく。人々かしましく罵わめくを。玄治も甲板にてきゝつけつゝ。急ぎ何事かと階子を下りて。下の部屋の方にゆきて見るに。騷ぎは客部屋の內にはあらで。客の荷物を置くほとりなりと思しく。客も船長も水夫もボーイも。總て眞黑によりこぞりて。ガヤ〳〵ワヤ〳〵と罵わめきて居り。何事とも解しかぬれど。人排除きて近より見るに。水夫一個三個立かゝりて。一個

の齢若き男を捕へて。頻に聲鋭く罵るなりけり。傍に大なる古行李あり。はじめ古席もて掩ひたりしにや。蓋もろともに裂破りて。遙に彼方へと放出してあり。男は顏色青ざめて。眼の色かはれり。さまでに憔悴せし者とは見えねど。舌も手も足もきかぬと思しく。たゞ苦しげに喘息くのみ。「太い奴だ。こんな奴は以後のみせしめ。打擲れなぐれ。と罵るあれば。「兎に角長崎へ着たる上にて。處分は領事館に任すこそよけれ。此儘絶息せば面倒なるべし。水でも飲せよ。とわめくもあり。玄治はます〳〵其意を得ず。急ぎ船長のほとりに赴き。其事の由を問ふに及びて。はじめて事由の仔細をしりぬ。

先刻水夫輩が集會りて。客の荷物おける傍において。竊に勝負事してありしが。怪しや傍なる荷物の中より。水おびたゞしく流れいでぬ。こは何事ぞと驚き怪み。俄に起上りて四方を見るに。そこらに水あるべき理由はなし。扨は荷の中より流れいでしぞ。Hask の栓などが拔たるにあらずや。餘所へ浸染もせば。大變なるぞや。とく〳〵其荷物を取除よと。人々たちよりて檢ぶる程に。不思議や人の氣はひするものに似たり。此處か彼方かと窺ふうち。人のうめく聲たしかに聞えぬ。扨こそと一箇の行李を。やがて前の方へ引いだせば。水は其中より流れ出ぬ。耳さしよせて窺ふに。中に藏れたる人ありと覺し。スワ曲者よ引いだせと。誰行李たるやを問ふにも及ばず。血氣に

まかする水夫輩は。たちまち荒縄を引釋て。破るが如く行李を開けば。思ひがけなき一個の壯夫。半死半生の有樣にて。行李のうちよりして轉びいでぬ。但見れば大小の酒罎ありて。一箇は堅く栓をしたれど。一箇（卽ち小き方）はいつしか栓を脫せしと見え。こゝより彼水は流れしなりけり。何者なれば大膽にも。竊に行李中に身を潛めし歟。狂人なる歟。賊なる歟。と引起しつゝ詰問すれども。彼者いたく飢たりけん。將又いたく衰弱せし歟。一言半句の答も得せず。只苦しげにうめくのみなり。

玄治は件の話をきゝて。不圖肚の中に思ふやう。今此男の樣子を見るに。被たる衣服も醜からねば。容貌もまた賤しからず。警吏の追捕に逃場を失ひ。こゝに潛みたる者とも見えず。これには然るべき理由こそあらめ。或は氣狂かも圖られねど。狂人にしても奇狂といふべし。いかなる理由なる歟。しりたき事よと。流石に少年とて奇を好めば。尙も其樣子を窺ひ居たり。此時船長は心附きて。そも此行李は誰有ぞや。とく持主を檢べずやと。水夫に命じて檢めしむれば。行李の横側に一箇の札あり。佛國理溫行稻積玄治荷物の內。と英吉利文字にて認めたり。玄治は斯と洩聞くより。惕るゝまでに打驚きて。こは抑いかなる間違なる歟。おのれはちと計の手荷物あるのみ。さる大なる行李とてはなし。おのれに難儀を負せんとて。怨ある者の惡戲歟。兎にも角にも



其男を。叩かば理由は判然たらん。迷惑なれども斯なりては。流石に連累はまぬがれがたし。ま
づ兎も角も其男を。ト其旨船長にいひ傳へて。療治よ藥よと指揮をして。急ぎ我カビン（部屋）に
伴ひゆきて。頻に治術を加ふる程に。やうやくにして人心地いできぬ。兎角する程に其夕暮。船
は長崎の港に着きぬ。爰より上陸する乘客もあれば。こゝにて積込むべき荷物もありて。船はや
や暫らく錨を投じぬ。此時件の怪しの男は。全く元氣づきて見えたりしかば。まづ飲食を與へな
どして。玄治は其傍に進み寄りて。靜に事の元を詰問すれば。男はあまたゝび叩頭して。無禮の
罪を謝していひけるやう。僕は愛知縣の平民にて。渥美氏恭輔と稱るゝ者なり。其經歷は斯樣斯
樣。其現狀は云々なり。此度餘儀もなき事情ありて。他邦に赴かんず志願を興して。一昨日神戸
港に舊友を訪ひ。彼が荷物中に身を藏して。共に洋行せん心なりしに。友は甚しく之を非與とし。
中々同意すべき氣色もなし。餘儀なく友人に立別れて。其後街頭まで立いでしに。圖らず其昔見知
越なる。了八といふ男に出逢ひぬ。こは是澱南の學校に於て。曾て賄方せし者なり。今は當港
の梶田といふ。老肆の旅籠屋の手代なりと申しき。はじめ學校にありける頃。同人が意外の間違
にて。負債をこしらへ。一時困難せし事ありしを。僕がさり難き理由ありて。爲に分外の周旋を
なし。愚父に此由を申傳へて。一時金子をば用立たりしが。それらは前ツ年事濟にたれば。もは

や恩もなく德もなきに。流石は正直なる實義の者とて。今尙其恩義を忘れずやありけん。僕が現
狀をば頻に悶み。兎に角我肆まで來たまふべし。少しく心當さふらへば。トいはるゝもいと頼
母しくて。急ぎ梶田方に赴きたり。彼人（了八をいふ）は肆口に入るやいなや。主人と見受られし
年增に向ひて。「まだ玄治さんは在すや。と問ひたり。「否已に乘込たまひぬ。と答へぬ。「ヤ
レ失敗と了八は叫びて。やがて奥の間に僕を誘ひ。扨あらためていひけるやう。實は當主人の親
戚にて。稻積玄治さんと申お仁。此度佛國へゆかるゝとて。今晩佛汽船に乘込まれぬ。此仁頗る
の金滿にて。且は慈善深きお方なりと聞ぬ。賴まば貴下さまお一個位は。兎に角佛蘭西までゆく
ばかりならば。隨分伴てゐて下さるべし。ト斯樣に私メが思ひましたゆゑ。かうしてお伴申した
譯なりしが。已に乘込まれた跡で見れば。今更如何樣にも詮方なし。主人は玄治さんの親族なれ
ども。根が女なれば量見狹く。どないに利害いうて聞かせたればとて。諾と承知すべき人物では
なし。全くお前樣の御運がなきなり。是非もない事とお諦念なされて。一旦私の宿元まで。ト
いふに恭輔はいふ道理もなし。されど爰に一ツ賴がある。元來希望なせし事にてもあらねば。今更
愚痴をいふ道理もなし。されど爰に一ツ賴がある。何と聞屆けて下さるまいか。其譯は外でもな
いが。僕を大行李の內に收めて。急に荷造して同じ船へ。（稻積とやらが乘たる船へ）。同氏の荷

物にして積込んで下され。ハテ荷物賃は拂ふ程に。陽面は荷物の積で(積遺れた荷物の積で)。急に該船まで送ッて下され。イヤ迷惑は決してかけぬ。決してお前などに累はかけぬ。斯いふ内も一刻千金。船が出帆せば十日の菊なり。云々斯様々々の目論見あれば。トおのが心算を了八に語りて。是非に計らうて。ト乞ひける程に。竟には了八も辭みかねて。さらば命どほり計らふべけれど。跡にて連累に「ハテ其邊は大丈夫だ。死すともお前さんに迷惑はかけぬ。「然らば。とて承諾して。急ぎ古行李をば取出しきて。渥美を其内に潜ばしめつ。麪包二ッ三ッ罐二本。共に行李の中に携へしめぬ。蓋し一本の罐の中には淨き飲料を貯たり。又大なる硝罐の方は。正可の用心に備へたる者にて。便壺の代なり。と了八が言ひぬ。準備たちまちに整ひしかば。力めて知れぬやうに行李の四隅に。空氣の通ふ穴を穿つなんど。用心をさ〳〵嚴重なりし。やがて稻積の名札をつけて。了八は急ぎ人力にて。荷物の扱所へかけつけつゝ。是はお客人の手荷物なるが。先刻はからずも積遺れたり。急に該船へ積乘て。トさも眞實らしうたばかりいひて。船賃其外の費を拂ひて。時後れたれば積がたしといふを。强て端船までも別仕立にして。幸く積込まるゝ事を得たり。寔に此時は一分千金の時にてありし。何となれば。此「活荷物」が船の甲板に登りて後。いまだ二十分も過ざる間に。船は駛々と運動をはじめて。たちまち神戸港を出帆しぬ。ソラ

積遺りの荷物だぜ。と水夫が二人して引かつぎて。やがて甲板より階子を下りて。「僕を板の間へ投出たる折には。恰も何やらん堅き物にて。脊骨を甚しく打たるのみか。大事に搔抱きし罐の胴にて鼻先火のでる程。打こすりたり。鼻血甚しく流れ出て衣類も斯の如く汚れしかど。痛と叫ぶべき境遇にあらねば。苦痛を堪忍びて。息をのみて居り。やゝありて何品にやあらん。僕が潜びたる行李の上へ。更に重やかに積のせられぬ。爲に息穴をば半塞がれ。頗る不安心に思ひしかど。幸ひ鼻先なる空氣の穴をば。十分其儘にて存したるゆゑ。是より忍びやかに。呼吸をなして。只管時の經過を渇望しぬ。飢れば麪包を喰ひ。渇すれば水を飲み。身動きならぬ行李のうちに。時を消する事十有餘時。便をたしたしと思ふ時には。非常の困苦をして。硝罐を用ひぬ。さる程に呼吸やう〳〵に難澁になりて。頭いたみ。胸苦しく。肢體堪がたく痛みいだして。心地死に果べう覺えしかど。さりとて今少しく辛防せずては。かの稻積とやらんに逢ふとも。强て請願せん口實もなく。丈夫甲斐なき者とやいはれん。せめて長崎か支那海までは。ト自ら奮勵して堪ふるものから。今しも何邊まで來りしやらん。馬關をや越えし。玄海をや過ぎし。長崎はまだ程あるべき歟。之を窺ひしるたよりを得ず。息迫り眼眩みて。苦痛に煩悶して身をもがけば。硝罐はしなくも栓を脱して。水は外の方へ流れていでけん。たちまち水夫輩に見咎められて。事こゝ

に及びてさふらへ。甚だ鐵顏の御願にはあれども。あはれ小生の卑望を憫み。願ふは佛國の波戸場の邊まで。共に將て往てたまはれかし。已に佛國に着したる上は。如何程陋劣なる職業と雖も。和君の奉爲には厭ひはせじ。また航海の費用の如きは。其節いかにもして償ふべければ。いかで此願を許容ありて。ト熱心面に現れたる。渥美が始終の物語に。玄治はあまたゝび驚歎して。之を憫む事大方ならず。殊に其豪壯なる膽略をば。心に斜ならず感ずる程に。元來俠氣ある性質とて。異議なく其願を諾きつゝ。渥美に打向ひていひけるやう。君の豪膽なる感ずるに堪たり。宜矣。僕正可に引受たり。但し豫想外にいでたる事故。元來其準備のあるべきならねば。不潔と窮屈とは忍びたまへ。それだに忍耐せん心にてあらば。僕の下僕にして。否。伴人といふ名儀にして。兎に角理溫までは伴ふべし。其他は又更に談ずべければ。まづさしあたりて此事を。トいふに恭輔は雀躍して。其任俠を喜び謝し。萬事唯命に。トことうけしぬ。かくて玄治は船長の許に赴き。如何に談判をばなしたるにやあらん。渥美は其日より稻積玄治の。隨行人といふ名儀にて。獸豚人豚（是は下等の支那人をいふ。）ともろともに。最下等の部屋に入れられ。見しらぬ海を見る身の上となりぬ。

以下の議論は總て讀人の便宜を思ひて。作者が筆序に書加へたる者なり。鼎がおみや親子よ

り聞たる時には此事は告ざりしと思ひたまへ。以下物語の條下に於ては屢此類の事あるべし。是等は便宜上の沙汰と思して。實地に違背するを咎めたまふ勿れ。

さらぬだに友ほしき船旅の空なるに。かゝる思ひよらぬ友達を得て。（野乘小說にあるべき樣なる。不思議の友人を得たりしかば）。玄治は何とやらん面白う覺えて。屢恭輔を「カビン」（部屋）に招きて。互に經歷を語りあふ程に。いつしか學問の話に移りて。やう〳〵言論も佳境に入れば。渥美は我しらず興に乘りて。例の大志望を演說なし。御國は商業の國になるべし。商業擴張は目下の急なり。就ては英國の製造事業を。いくらか我國に奪はずては。此大素望を遂がたかるべし。僕が英國に往んとせしは。彼の製造の實況を窺ひ。其組織をも知んとせしなり。其故は斯樣々々其目的は云々なりと。辯舌大川を決したるが如く。滔々雄快に述立たる。議論もしかすがに貫目ありて。書生の空論とは異なれるが如し。玄治は斜ならず歎賞して。よき友得たりけりと心に喜び。例の船病の惱悶も忘れつ。「君の志は極めてよし。但し英國の製造事業を御國へ奪はうとは架空の談なり。寧我國の開拓事業を一段今日より擴張して。農產を增し米穀を輸出し。兼ては內國の富源を固くし。非常に備ふるに如ことあらじ。夫製造を盛にするは。至極上乘なる策にてはあれども。之をなさんとせば。大資本を要す。我國はもと

微力の國なり。よしや外國に資本を募りて。扨其局に當ればとて。爭でか英國に敵し得べき。君の大望は壯なりといへども。所謂根據なき理論にして。實地に施行すべき道なきを如何。（淫美莞爾と打笑みつゝ）扨は和君もまた農業主義歟。いかにも開拓は良事なり。之を奬勵して擴張せむ事。無論贊成なる事にてはあれども。知らず。如何にしてか擴張したまふ。日本は彈丸の小國にあらずや。土地に際限なき歟。洋中に屬國ありや。北海いか程に廣しといふとも爭でか英米の國廣きに及ばん。和君の政策は手段の一種歟。富國の方便の隨一とやいはむ。いまだ目的とはなす可らず。到底行末まで農業國にて。御國を維持せんこと思ひも寄らず。されば商業を張らんとするなり。僕が本願は商業の擴張なり。若夫製造は。是また一手段となすまでなり。およそ大事業をなさむと欲せば。歸着の目的を定めずては叶はず。宣給ふ所着實にて。僕も贊同せむ心なれども。こをもて目的ぞと宣給ひては。容易に肩をぬぐ譯にはまゐらず。總じて近邇なる利益を望むは。元來人間の常なれども。只管目下にのみ意を注ぎて。遠き思慮なき時には。意外の費勞をなす事あり。見たまへ。英語會と羅馬字會を。日下の景況を打見やれば。雙方相異なる所なきが如く。共に羅馬字を應用して。皇國の言の葉を綴るにあらずや。されども英語會と羅馬字會とは。其の期する所同じからず。前者は日本語を廢せむと期し。後者は日本字を廢せむと期

す。故に其手段に多少の別あり。前者は可成丈原語を用ひて。語法を改むるに汲々たり。後者は只管に文字のみを改め。文辭を平易にせん事をこそ望むめれ。優劣は果して孰れにある歟。余はもと愛國の半狂人なり。寧ろ羅馬字の味方なりと雖も。……夫は兎もあれ。こゝが我議論の分る所。今もし前說（英語會は當時興起せし會と見えたり。日本の文章に原語を可成丈用ふべしとの主意なり。其餘は羅馬字會と大同小異なり。）を是としながら。後者の方便を假用せん歟。いかさま近接なる利はありとも。到底本願の媒介とはならで。所謂贅勞とやならんずらん。譬へば漫遊の爲に漫遊すると。研究の爲に歷遊するとは。同じく遊旅にして同じ旅にあらず。漫遊の爲に旅する者は。或は要もなき未開の島にて。空しく數裙裘を易ふる事もあるべし。此徒消したる光陰は。他の研究家の眼より見れば。甚だ惜むべき者にあらずや。されども漫遊家は可惜とも思はず。なか〳〵にそれだけの利益を得たる歟。之も亦圖る可らず。蓋し其の期する所一ならねば也。目的の定めざる可らざる。まづ之をもても著きにあらずや。僕の說たるや恐らくは陳腐。前に唱へたる人もありけん。只憾らくは其人々は。所謂理論家なり空想家なり。空しく口に之を唱ふるのみにて。之を實行せん膽略に乏し。是なん蹶起して御國の爲に。僕が一身を犧牲となし。事に從はんと思へる原因なり。ねがふは僕を以て議論を好む者と見做たまふ勿れ。僕は只管に實際を主

となす。いかに高尚なる議論といへども。之を實行する氣力なくんば。夜の錦なり。幽谷の花なり。徒に似而非學者の。または世を遁れし仙人輩の。翫弄物となりて終りつべし。財力は鐵壁なり。財力は權利なり。世間何者の稚蒙兒か。この財力を蔑如するや。と「財卽是權」の短言をば。此日も例の如く提出し來て。言葉爽かに辯論するを。玄治も元來して議論を好めば。上なく而白き事に思ひて。此日を討論の始元として。毎日甲板にて。又「カビン」にて。互に共議論を上下して。食事を忘れたりし事さへありたり。

香港に停泊ること。一日あまり。船は名にしおふ印度洋に向ひぬ。順風穩に渡りて浪怒らず。杳渺萬里の大海原も。日を經て恙なく後に見やりて。亞良比亞海を過ぎ。亞デンを經つ。紅海を渡り。須エズを越え。いつしか地中海に立出つゝ。見もしらぬ峯々。珍らしき都會。右り左りに見渡してぞ往く。やがて佛蘭西に着するに及びて。果して如何樣なる物語かある。扨も兎に角に聞かまほしきは。人の身の上の行末ぞかし。

第八回

Struggle for life.（稲積一家の落魄）

前の物語はしばらく措く。大阪の米商稲積庄次郎は。元來浪華津の豪商にて。頗るゆたかなりし身の上なりしが。近來商賣の機運わろくて。五六度引續きし大外れに。流石の大屋臺も彼處此處ゆらめき。外目にあらはなる程にはあらねど。内々活眼でのぞき見れば。主人の活力が脫たが證據。「負債でゐる」といふも名詮自性歟。兎角鬱々と氣も開かず。倅の玄治郎が洋行以來は。しばらく活潑なる振舞もなく。動もすれば胸の上へ「又」の字をこしらへ、額へ「八」の字を畫くが常なり。しかるに如何にせしか思ひ返して。俄に皿のやうに眼を見張りて。又々米況に意を注ぐは。燦たろ賴母しき投機の望が。主人の心中に浮びたるにや。將又半癇癪の死物狂歟。グツト大膽に心を定めて。四方の米況を見てありしに。氣候殊の外不順なるが爲に。不作の徵候の著明なるのみか。近頃また候ふ北海事件にて。（北海道に關する事件なるべし。）强魯と容易ならぬ葛藤の萠芽。將に發起せんず風聞あり。されども近年は昔とかはりて。輸入の穀類も尠からねば。少

少不作の兆ありたればとて、急には騰貴すとも思はれねば。皆人油斷して微利を爭ひ。いまだ英斷の壯圖を運らし。大に買占めむとする者もなし。庄次郎思へらく。日魯葛藤の一大事件は。極祕の極祕なる者なるゆゑ。仲間の米商だに知らざるぞ奇貨なる。今にして買占めずば。今にして乘ぜずもあらば。竟に利をなすこと能はざるべし。一攫千金の期とは卽ち是なり。斷然志を決すべし。ト地面家庫をも抵當にして。數萬の財本を得たりしかば。近くば堂島はいふに及ばず。奥羽東京の市場をさへに。ほと〳〵動搖せん勢にて。四方に手を擴げて買ひ占めしが。十分玄妙なる手段を用ひて。最も迅速にものせしかば。一時は米商等も眩惑されて。流石に心附かぬ程にぞありける。去程に俄然として騰貴したる米の相場の著しきに。市場は沸然とさわがしうなりて。恰も蜂の巣を破りたるが如し。さもあるべけれと北叟笑して。庄次はたやすくは手を弛めず。隨つて騰貴れば隨つて制へ。負惜みなる擊劍家が。きたなき立合を試むるが如くに。尙々尙々と持こたふる程に。米價はいや增しに昂昇して。まことに恐ろしき程の價とはなりけり。それも道理。此時しも例の北海のゴツタ〳〵が。やう〳〵世の中にあらはになりて。彌急緊となりにし由。日毎の新聞にて知られしかば。斯る投機商の亞流にあらぬも。尙且其眼を皿のやうにして。日毎に早起して新聞を讀むなる。況んや其事の次第によりては。直におのが身の浮沈をも見

るべき危き商賣にかゝづらふ者をや。孰れも火のやうに熱くなりて。狂氣せぬばかりに。奔走なすめり。されども庄次郎は自若として「此事穩かに收るべしとは思はず。兎に角一旦は戰爭ともなるべし。最少し忍耐して持こたへずば。忽地數萬圓の失利を見るべし。たしかに掌に入るべきものを。女々しう危みて失はんは。今まで奮發せし甲斐なき業なり。後悔するやうでは遺憾の極也。地を擊つ槌にあらずと雖も。我が睨んだ事やは外るべき。是非とも踏ごたへて今暫し。と自信と慾情とを重量にして。ドツシリ落附たる大なる度胸も。悲しや思ひよらぬ方角よりして。猛然勁敵の押寄せたるがため。無殘の壞亂に陷しぞうたてき。之より遙か前ツ年より。支那商。米會社を神戸に開きて。盛んに印度米（南京米をも含めていふ。）の取引をなせしが。當時日本米の相場低く。頗る低廉にてありけるから。兎角に印度米の捌わるく。非常に相場下げて捌きしかど。さしても墓々しき取引もなく。次第に損耗のみ打續きつ。流石に狡猾なる支那商人も。是には豚の尾を卷きしと見え。陸續閉店する族もありたり。それも道理。印度米は。當時如何にしたる譯にやありけん。（恐らくは本地の不作などに原因なしてや。）ズツト値下なせし其相場だに。遙に日本米の最下等には優れり。庄次が買占に着手せし頃には。安南印度などの米商ひは。ほと〳〵中止したる有樣なりし。されば稻積の目の鋭きも。元來外國の事情に疎く。殊に十

年度の人物（十年度の人物とは明治十年以來二十年以前を盛んに經たる人物を稱する流行語なり。）なるゆゑ。兎角に內地のみを目當にして。取引したる癖は今尙ぬけず。獨つく〳〵と思ひけるやう。南京商の狡猾なる。米價の騰貴するを見るやいなや。直ちに舊會社を復興して大に射利せんと圖るや必せり。さりとて損をして賣るべうもあらねば。さまで狼狽すも不可なきに似たり。印度米の價貴き。我最下等の者にも越ゆ。大して憂へずとも其時は其時なり。萬一危しと見たらんには。一擧に我庫を倒にすべし。さすれば不廉なる旨味惡しき。印度安南の劣等米は。たちまち元の如く地を拂はん。然り。恐るゝに足るべうもあらず。ト例の獨斷の太早計。深くは此點に眼を注がず。只管北海の事件にのみ。始終眼を注ぎてありける程に。支那商人の眼の鋭き。夙より我國の市況を窺ひ。ならびに政治上の祕密をも探りて。斯と見定めたる所やありけん。態と貯へたる印度米をばさながら捨値にして賣捌きてありしが。米價がやう〳〵に騰貴るを見て。爰ぞ機會なりと考へしと思しく。忽地印度米の價格を二倍し。又は三倍して賣出しぬ。されども其頃は日本米がいまだ甚しく騰らぬ頃ゆゑ。誰か價貴き印度米を買ふべき。需用は日を追うて減少せしかど。價を得低がたき理由やありけん。僅に少しばかり値下せしのみ。頑然元の儘で賣らんとせしかば。又もや印度米は需用を減じて。あれどもなきが如き有樣となりぬ。されば日本米の取引する。日本の米商等は思へらく。今年は

安南も印度の地方も概して不作なるに極りたり。二三の新聞紙の報道によれば。不作の徵候のありぞとも見えねど。さるは報道の密ならざるに因る歟。さらずば支那商の貪欲なる。斯樣に米況が一變して。非常に印度米が騰貴したる。けふ此頃の市場に於て。尙且持こたへて失利をなさんや。それも今一層騰貴すべき。前途の目的でもあらば知らず。倩退いて考ふるに。米價が今一層加はればとて。到底印度米の價格の如きは。今より二倍すとは思はれざるなり。而して今日の印度米の價格は。ほと〳〵市場價の二倍なるに近し。思ふに十分に前途に於て。價格の騰貴すべき見込のあるならん。印度安南の不作よりして。米價は總體に昇るにやあらん。彼狡猾なる支那商等は。早くも其邊に注目して。十分持こたへん存念なるべし。今少々の利益に迷ひて。輕々に日本米を賣いださば。後悔臍をかむも及びがたし。如かず。今暫く踏張るべし。ト例の稻積はいふも更なり。米商大方は其心あり。然るに支那商の本心を探れば。遙に此豫想に違ひしものあり。蓋し此年は東南亞細亞は。總て稀なるべき好季候にて。穀類殊の外實入よきに。米は就中豐作の徵あり。今より程なうして印度米は。價格の三割方下落せんず見込は十分に見えたりしかば。尋常一樣の手續によらばよしや其價を半減なしても。今しも賣出すが當然なるを。支那商の忍耐强き。日本の米況を觀察して深くも思ふ所ありけるゆゑ。態と大膽にも持耐へて。只管內地にの

み眼を注ぎて。外の米況には頗る暗かる。日本の米商等を誑惑せしに。果して日本商は其陥井に陥入り。未來の大下落に思ひも及ばず。只管騰貴るべしと確信して。頻に競上に價を昇して。絶えて餘念もなき有様なれば。支那の狡商等は笑かたまけて。今こそ機會なれ時分はよきぞ。と恰も揚子江を決したらんやうに。一時に印度米を元價に復して。ドツと一齊に賣出したれば。市場は大津浪を受たるが如くに。動揺する事大方ならず。如何なる故とも解しかねて。皆人目を見張りて駭然たり。此時早く彼時遅く。印度豐作の意外の報道。四方の米市場に達せしかば。商賈の恐惶は譬ふるに物なく。スワヤと一同に狼狽へ騒ぎて。同時に賣拂さんと爭ふ程に。たちまちダラ〳〵と下向になりて。ほと〳〵三割方下落せしが。哀れや稻積の庄次郎は。元來外國の事情に疎くて。印度安南の米況なんどは。聞ても十分には會得しかねて「たとへ何程に豐作なりとも。御國の米況のたしかなる限りは。日魯の關係の定まらざる限りは。大して恐るゝに足るべきやは。如何に印度米が下落りたればとて。抑また何程の事かあらん。今少し踏堪へて鼻あかせんと。あくまで自信して恐るゝ色なく。さりとて十分には安心もならねば。貯蓄三分程は賣拂しぬ。されども此頃は下向とはいへど。以前の相場をもて標準とすれば。流石に一割方上向なりしかば。庄次は若干の利得を得つ。去程に二三日を經て俄に恐ろしき報道ぞ着しぬ。曰く。

全權大使□□伯の非常の盡力にて北海事件全く穏に談判を終りぬ。結果は滿足なる者なり。云々。

市場の恐惶は更にいはず。稻積の驚駭いかばかりなりけん。思ひやるだにも尚痛まし。數萬の資本も虚空に歸し。無量の財産も他の手に渡りぬ。きのふまでは米商の魁首と仰がれ。紀文陶朱をもて知られたりし身が。けふは家庫を賣拂ひて。番頭手代をはじめとして。夥多の家僕輩にいとまを與して。夕暮毎に踏なれたる。築山泉水はいふも更なり。夏の住居にとて建做したりし。主人が最愛の別墅をさへに。空しく恨めしき人に讓りて。妻娘并に飼殺しの老女一人。都合三人のみ引隨へて。怪しき格子戸の借屋に移りぬ。榮枯定めなき世の中ながら。脆きは投機商の身代ならずや。一時の思ひよらぬ失敗よりして。家産を倒したるも尠からねど。斯くまで急激なる身代限は。古今其例を見ざる事よ。と皆人打驚き目を側てて。憫れもしつ憫みもすめり。「かゝる絶大なる破産あるは。正しく支那商の狡猾にいづ。惡むべきは支那商なり。笑止なるは日本の米商。其迂濶なるを憫まざるを得んや。退いて考ふるに。日本は進歩しぬというたればとて。今尚（西洋の老練家。若くは支那商に比ぶるときは）眞に赤ん坊に同じき者なり。此赤ん坊をして彼剛の者に當らしむ。此失敗ある。しれたる事なり。さればこそ内地雜居は。まだ〳〵危險だと

いひけるに」とあるひは打つぶやく族もありしを「否々。それはまた非事なり。これらが經驗と申すものなり。蹉躓は覺悟の門。子供も一兩度燒疵をさせれば。世話をやかいでも火は握まず。火は熱いからというたればとて。實地の經驗なき子供にありては。百萬ダラいうても駄目な事ぞ。まだ雜居後のホヤ〳〵時代。斯いふ破產家のあるのも當然。結句是からが樂しみなり。芽出たい芽出たい。」と喜ぶもありけり。前者は Comte 派の干涉主義。後者は Spencer を氣取つた言分。いづれが正論かは暫く措く。兎に角氣の毒なは稻積の主人。自業自得とはいひながらも。スツカリ落魄したのみにはあらで。論者の材料とまで成さがりしは。ハレヤレ憫然なる事共なり。稻積の失望は啻に是のみにはあらざりけり。破產して借屋に移轉りし其當日に。佛の理溫府より郵便來りぬ。開き見て眉は八字となりぬ。それは抑何故といふに。其子玄治郎事昨年の秋。理溫の大學に入校して。頻に勉學してありけるところ。生來多病なる性質とて。いつしか肺病にて靑い貌となり。今年六月の中旬よりして。同地の Hospital（病院）に移りてありしが。病はいや增しに重るのみにて。やう〳〵危なかしく成もてきつ。醫師は親切にも心配して。兎に角本國へ歸らるゝ方。結句身の爲の最良藥なり。至急に土を換ふるが第一ならんと。實に勸められて其氣になり。已に去ぬる八月二日。當地を發したり。と不愉快なる報道。本來氣丈なる庄次郎だに。例

の失敗以來氣が挫けて。餘程苦勞症になりにたるに。況てや女氣の妻と娘「いかなる宿世の業因ぞや。賴みに思ふ玄治までが。……せめて當地まで歸つてくる迄。命を取つないで「なんのおかアさん。其御心配に及びませぬ。かならず全快なるはしれて居ますが……家の大變をおきゝなはれたら。定めて兄さんが」ト右左りで。妻と女とに泣たてられて。今まで逆八の親父の眉根も。いつしかこらへかねて「八」の字形。口が「へ」の字形となると共に。今まで透明な眼鏡が曇りて。眼の形だけは見えぬやうになりぬ。

面白からぬ事のみ斯樣に意地わるう掩ひ重りては。九年面壁の人成ぬ身は（Zeno の門弟子にも有ざる身は。）爭でか長閑やかに暮さるべき。後悔と遺憾と。苦勞と心配とが合縱して。夜毎に安からぬ眠を襲へば。身體もいつしかに衰へゆきて。主人は藥飲む身の上となりぬ。妻と女とが枕邊に侍りて。夜だにろく〳〵は睡眠まぬまでに。看護介抱に心は盡せど。家富み裕なりし往日には似ず。醫藥其外の事の上にも。思ふにまかせざる筋のみぞ多かる。本來落魂しには相違なけれど。古河に水絕ずとやらん。さすがに若干の貯金はありけり。背に腹の譬もあるをト妻が賢しうも夫を諫めて。良醫を迎へんずと說すゝむれど。主人は聽いれずて頭を打ふり「イヤ〳〵吾等事は老年の廢もの。求めて死ぬまでには及ばずとも。求めて存命へんと思ふは贅なり。よしや辛

うじて命の綱を。しばらく取とめ得る山ありとも。斯う「不祥」がつきし上からには。到底老耄たる痩腕にて。身代取返さむ見込もなし。頼むは少壯の倅なりしに。それさへ肺病の餌食となりて。死んで歸らうやら知れざる仕儀。萬一二個ともなくなりたらんには。其方達は女の事。たちまち依頼るべき柱を失ひ。路頭にさまよはん歟。苦勞の極なり。せめて此金だけ殘しおきなば。其折大なる扶助ともなるべし。よしまた左程までに到らずとも。倅が歸國したる時に及びて。藥料やら診察料やら色々物入は多かるべきに。そこらを思はざるは迂濶の至。結句後悔の種なるぞや。イヽヤ何様に口説いたればとて。「例の」は其方達に渡ませぬ。左程費ひたう思ふならば。吾等が死んだる後どうともしやれ。トやう〳〵理にちがつた主人のいひ分「餘程昨今は氣が觸れた様子。折角御用心なされませ。ト醫者にまめやかに忠告されては。妻子の心勞も一層まさりて夜毎に忍び音に打泣のみ。

時に五月の末つかた。主人は急激に病重りて。後事をいひ殘さむ遑もなく。さながら眠るやうに息絶たり。兼て期したりし禍にはあれど。愚痴なるは女の常。ワツと一頻り泣やみても。弔辭を新しう言はるゝ度に。また思ひ出して袖ぞ濕るゝ。翌日の夕暮には。湯灌も式の如く濟しにたり。義理に集ふ知己出入の者。泣に寄る親類縁者。奔走周旋して葬儀をとゝのへ。將に出棺の

用意も終りて。一同立出むとなす折しも。端なうも表の方より。近來見もなれぬ駕籠ものにて。ドヤ〳〵荷れて入る人こそあれ。こは何人ぞと猶豫へば。日頃待こがれし倅玄治が。やう〳〵一昨日神戸に着して。けふしも親の許へ歸りしなりけり。生來が柔弱かりしに。長き肺病にて身神おとろへ。殊には大洋の怒濤にゆられて。久しう苦しみてかへり來しかば。母さへこれ〳〵ぞと告られずもあらば。最初は誰なるかを見定めかねけん。尚やうやくに二十四なるに。頰骨高く色青ざめ。鬚髭ぼう〳〵と生ひのびて。三十にあまりたりと見られにたり。「能くまア存へて戻りやつた。と取つきうち歎く母親の憔悴。家の景況。家内の様子。總じて思ひがけぬ事のみなれば。只さへ弱り果てし病人玄治は。只管ほろり〳〵涙のみ流して。絶えて一言だもいひ得ざるを。さこそと傍の人も憫に思ひて。父御の果られたる事の由は。まづ〳〵押藏しておきなはれ。と母をいろ〳〵に教へ諭して。玄治をさらぬ振で別間に伴ひ。妹のおみやをば其傍に侍らしめ。早速出入の醫師呼むかへて。診察やら服藥やら。此方は新靈の出棺騒ぎ。母親はうろ〳〵して役には立ず。勝手なれぬ人々の周旋なれば。萬事萬端がトンチンカン。どう狼狽てか棺屋へ呶咐。更に棺桶を取寄つゝ。イザとて玄治郎が臥房に運べば。「忌はしい。トうち顰む妹。「何の意趣あつて。ト腹立つ母親。詫るやら打泣くやら。ヤレハヤ家内は亂脈さわぎ。寔に氣の毒とも憫然と

も。見る目打曇る事共なりし。

葬儀も式の如く終りぬ。兎角に悪紙のしめりがちなる。五月の忌の内も已に過ぎぬ。よしや病人にて歸りしとはいへ。玄治が歸り來てあらざりしならば。母は引續きて病むべかりしを。せめて此上は玄治なりとも。十分療養に手を盡して。全快させてほしいものやと思へば。さすがに崩折たる心も張りぬ。例の貯蓄の金子をも取出て。力の及ぶだけは良醫をえらびて。殘れる所もなう治療なしたる。其效能は次第に著く。およそ一月程たちける頃より。玄治は薄紙をへぎ去るやうに。いつしか快き方に向ひて。全く人らしうなりたりしかど。扨肚胸つくは行末の事なり。さらぬだに。心細かりし貯蓄が。再三引續きし失費して。今までは聞もしらぬ。高利の時借さへいで來にたり。玄治も病氣後の身體弱くて墓々しき職業に從事すべくもあらず。さりとて往年とは事かはりて世間に洋學者も多い時節。少々ペラ〳〵を口ずさめばとて。早速口を餬する方略もなし。四方の知己に手紙を送りて。何か口あらば世話してよ。ト度々依賴して遣はせども。餡餅が棚からは落ぬ世の中。必至と困却してありし程に。むかし東京にて親しうせし。學友某より手紙を送りて「生儀ちかごろは横濱に赴き。佛の領事館に勤め居れり。しかるに去りがたき理由ありて。急に辭職せんず心得なれども。彼此とじめられて困却の體なり。足下御上港下されまじくや。

さすれば如何にかして領事へ說つけ。足下と交代せん存念なり。月給は微薄なれど。將來望のなき位置にもあらず。尊意如何ぞや。といひこしたり。時正に危急の折なり。位置のよしあしを選ぶべうもあらず。深く某の厚意をよろこび。かたじけなき山を答へてやりぬ。

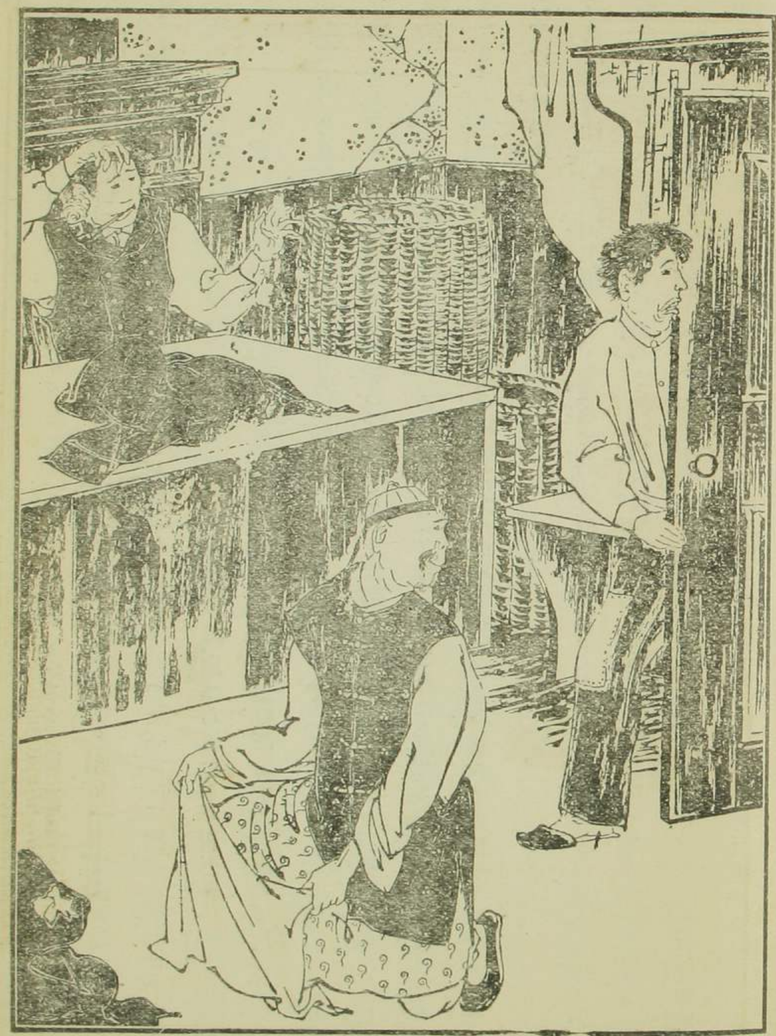
かくて煩はしき調度の類は。悉皆捨賣に賣拂ひつ。さすがは古河の餘波とて。十分路用だけは得てしかば。落魄ても尙おとづるゝ。親族知人に別を告げて。年來住なれたる浪花をたちいで。船にて横濱の港へと向ひぬ。一方ならぬ某の周旋にて。玄治は首尾めでたく領事館に入りて。通辯兼Clerk（書記）の職に就きぬ。Dol.にて二十五の薄給なれども。沙漠旅人の一椀の水。一寸息休めになるばかりかは。爲に奮興せむ志氣も生じつ。

長者町といふ所にさゝやかなる借屋を借受け。母子三個ともに腰を落つけぬ。妹おみやは此年十五歲になりにたり。「わたしも遊んで居る境涯でなし。何か相應な職業教へてトせがまるゝもまた賴母しくて。幸ひ町内に。近き頃より洋服裁縫所が出來たりしかば。一まづ其家に被雇となりて。幾何か給料を蓄ふこととなりぬ。もとこの洋服の裁縫所は。尋常一樣の仕立屋とは異なり。譬へば其むかし柳原など（東京）にありける。屠屋の大問屋に似たる者なり。店構は巍々たる煉瓦造にて。むかしの人なんどに見せたらんには。何のお役所ぞといふべき程なり。主人は英人と

聞えたれど。職工は大概支那人なり。はじめは日本人を使ひたりしが。兎角日本人は生智慧が利すぎ。總じて綿密を缺く癖多く。譬へば「茶をもつて來いと命じたる時に。生中中途にて氣をきかして。砂糖を調加して持參する事あり。是等は中々に英人の氣には入らず。「茶を持參せよと命じたるに。砂糖を加へたるは越權の處置なり。命令の儘に行へば宜きに。餘計な才覺沙汰。癪に障る。と碧い眼の玉にて睨まるゝぞ常なる。しかし公平に考ふれば。少し氣のきいた日本人には。兎角此種類の「才覺」多し。日本の主人には氣に入るとも。萬事に嚴密な西洋人には。いかさま機に入らぬも道理ぞかし。元來此店の職業といふは。古き廢れ物を買出し來りて。之を宜き程に切放ちて。鐵の櫛をもて解ほぐして。更に絲にして洋服を織るなり。故に其價も廉價なる上に。頗る見場もよき品物となるなり。但し其原が古手なるゆゑ、絲もアマク。織もアマク。忽地羊羹の色をばなすめり。されども廉い物が好るゝ世の中。此店の繁昌はステキな物にて。濱の「屑仕立」と片書だにすれば。郵便萬國より屆とは恐ろし。同じ屑屋連も（眞似ずきの國風とて。）須臾八方に出來たりしかど。到底老肆には競爭れぬ恒例。濱の內はいふも更なり。東京市區中の檻襤さへに。千手觀世音を安置したまゝ。濱まで御下向とは大したものなり。それも其筈。買子を此店から毎日々々。四方へ尠くとも百人前後は。烏の啼くと共に出すとぞ聞えぬ。

おみやは此店に雇はれてより。專ら裁縫部の機械方となり。カツチヤン／／。チツチユ／／。朝まだきより。夕暮まで。怠る色もなう勉業せる。其心ざまの素直なる。其容貌の可憐なる。「織姫見るやうな」と打戲るゝは。國語に能く慣れたる支那人の言ぐさ。○「私あなた。夫婦になる宜しい」とは氣障にもうぬぼれた赤髯の片言。いづれにして可憐の少女子。男に愛らるべき質あればこそ。國の東西を問はず髯の有無に關せず。とかくに底のある盃仲間は。つけつまはりつして斜眼に見るなれ。さりとて場所柄が場所柄なるゆゑ。どれも／／野暮天ばかり。定めしあの乙女が五月蠅がらう。とは時々演說する日本人の口吻。これまた自推から生じたいひぐさ。よく解剖して見た時には。野心もそのうちに籠りてあるべし。

同じ裁縫所の朋輩の中に。お塚と名を呼ばるゝ娘ありけり。年齡はおみやより三ツ優りにて。少し痩過た容顏なれども。背も低くなく色も白く。ズツと陳腐う譽めていへば「路考」（瀨川菊之丞）の肖貌畫に似たやうな貌附。西洋人には中の字なれども。むかしの「丹次郎」が嬉しがる向なり。剩へ性質慧敏。一寸一瞥した計にても他の肚の裏を見透すとの事なり。惟んみるに。西洋の國には。Mind-reading（讀心）といふ事ありて。他の肚を讀む女性のあるあり。お塚は其種類の女性であらう。と嘗て英人が評判してより。はじめは邪推深い娘だとて。諸人に嫌はれたる此娘



の。値價がいつの間にか大にあがり。あれは天性の利發者でござる。別段學識がある譯でもなけれど。決して平人の及ばぬ智慧あり。平凡の女どもはいふも更なり。男も一二目はおかねばならぬ。と職工仲間にての大評判。扨も英人は大したものなり。たつた一言にて輿論を動かす。彼も人我も人。しかるに日本人のいうた事は。なか〳〵此樣には用ひられねど。髯が苦い顏でいうたといへば。如何さま御尤ト雷同賛成。なんぼ「髯宗」の流布する世だとて。あんまり聞えざる世人の爲方。これも此娘の事のみならん歟。もとより彼此といふまでもなけれど。萬事が「髯宗」で恐れ入る。とは妙に卓識ぶる學者の託宣。これまた御道理と同ずる者あり。兎にも角にも此世間は。「所謂」學者連が持切ると思しく。自分でこれは斯。あれはあと。眞理を推究する輩は稀なり。Carlyle がいはゆる。Hero-Worship（英雄禮拜）の功勞經たもの歟。テモサテモ世話のやけた世の中。

されば「肩仕立」の職工場にて。（兎角に其昔の習慣がぬけずて。）晝休ずきの日本人は。ハキハキ其工事にかゝりもせず。動もすれば贅口贅論。「どうだい「一件」をつゝいて見ちやア。「ウンニヤ眞平だ。容易に口說く事もできぬ女。よし承知したとうなづけばとて。妻にした後が厄介物なり。始終おのが肚を見透さるゝ故。ウツカリ浮氣などをする事ができぬ。誰があの女を妻に

する歟。笑止千萬だ。と風評の最中。「そらこそ「肚讀」が遣て來たぞ。肚を見られるな用心しろヨ。（塚）ヲヤ皆さん。何をお話してお出なすツたの。大方私イの惡口でせう。（皆々）そりやこそ讀まれた。閉口々〳〵。決して惡くいつた譯ぢやアねえ。只御亭主が窮屈だらうト。（塚）否ですヨ。私イは亭主なんざアありやアしませんヲ。（皆々）なんぞと甘く拔るゼ。（塚）ヲヤ變においひなさるネ。アヽ何だネ。皆さんは私イが「ビゲイ」さん（佛人の名）の千本さんと怪い中だらうと。イヽエ否。きつとさう思てお出なさるヨ。（皆々）閉口々〳〵。さう見透されちやア一言なしだ。（塚）そんな疑念は眞平ですヨ。千本さんは。兄が世話になつたお仁だから。折々交際はしますけれど。（皆々）もう〳〵眞平だ。一寸今思つたばツかしだ。眞の冗談だ堪へたまへ。堪へたまへ。（口の中で）「我黨の內幕を言はれちやア大變だ。」

（塚）おみやさん。如何おしだ。今日は貌の色が大層惡いネエ。何の如何もしない事があるものか。お兄イさんの事を心配してお出でネ。（みや）エ。（塚）病氣にでもお成かエ。（みや）ハイ昨夜俄にネ。（塚）肺病かエ。（みや）アヽ俄に胸が痛いといつてネ。血をネ。血をドツサリと吐いて。（塚）そりやアマア大變だネ。お醫者は誰におかゝりだ。（みや）野毛山の盛部さんに。（塚）あんなお醫者にかゝつて居てたまるもんかネ。アノ何におしな。「ビゲイ」さんに。アレサお前は知ないでも。

私イが知ツてるから。兄さんにさういつて診て貰ツてあげるヨ。けふ此場を少し早仕舞に頼んで。(みや)眞成にさう願へれば嬉しいネエ。(塚)それぢやア其積で。○ほんとに「ビゲイ」さんは上手だヨ。お醫者も上手になると人を生すことも殺すことも。勝手放題にできるとサ。否。ほんたうだヨ。私イは現在見て來たもの。何だヨ荒療治をなさる時でも。決して「モルヒネ」やなんか飲せないで。唯ネ。「眠れツ」とおいひなさるの。さうすると不思議だヨ。ズーツと恍惚として來てネ。自分で知らないで睡眠ツてしまウヨ。マアネ兎も角も今晩往つて。お兄イさんの容體やなんか話して。それから當人を診てお貰ひ。大概の病人なれば。診ないでお藥を下さるがネ。それでも十分に效驗があるヨ。(みや)なんだか怖らしいやうですねネエ。(塚)お前は疑ぐツておいでのやうだから。是非マア今晩往つて御覽ヨ。(みや)アヽどうか。(塚)それぢやア。後程に。」トいひかけて。お塚は其場をたちあがりぬ。

○おみや母子の長物語は。いまだ央にもいたらざれども。事の次第の不思議なるに。流石の田所も驚歎して。はやく結局まで聽たく思へば。故と邪魔になる返辭を交へず。「ハヽア」と「フヽン」のみで調答して。其後々々と聽もてゆく。折から突然と。ワウ。〳〵。ワウツフー。今まで靜

なりし店の方が。俄に吠たてたる犬の聲に。急に騷がしうなりたるはいかに。おみやは我しらず立あがりて。

(みや)ヲヤ何だらう。

ツカ〳〵と臺所へかけゆき。面を店の方へさしむけつゝ。

(みや)清ちやん引……きいちやん引。

第九回

菱野詞狂ふたゝび田所に逢ふ

怪しき犬の吠聲に。何事ならんと驚く母子。鼎もさすがに眉を顰めて。今喫かけたる卷煙草を口から二寸ほど遠ざけたり。互に口先をとンがらして。件の吠聲の事につきて。何とか言んとする程しもなく。店からあわたゞしく馳來る小女

(小女)お連さまが……アノウお連さまが……

但見る。井戸へ落入らんとなしたりしを。危ふく井戸側にしがみつきて。まづ〳〵助かつたとい

ふ見得にて。全く動悸だけは收まりたれども。今尙其名殘がござりますといはぬばかりなる少女の容體。

（みや）清ちやん。騷々しい。何ですヨウ。

少女ははずみきつて言ひかけたりしに。ビシヤリと柔かに押へつけられ。どうやら勢がぬけたと見え。折角開いたりし口を塞ぎて。新に出直して口を開き。

（清）アノウ今ネ。お連さまが（田所の方へ指をさして）此方を尋ねて……頭が血だらけで。服も……服も……。血だらけで……

田所は聞とがめて。

（田）エ。血だらけで來た。誰が……もしや菱野だといやアしないか。

（清）シヽ野だといひました。○アノネ。おみやさん。Perro がネ驚いてネ……

（みや）マア早くこちらへお呼びまをして……

（田）イヤ〳〵宜しい〳〵。○如何したのか。私が店へいつて早速あはう。○それぢやア一寸。と急がはしく鼎は半靴をはきもあへず。煙草を握つたまゝ店へいづれば。

（菱）ヤア田所君。失敬々々。

（田）どうして〳〵。我輩が失敬した。よく早く解りましたネ。時に君は……

トいひかけつゝ。菱野の容體を打見やるに。こは如何に何とせしにや。額の眞中にいつの間にか先刻逢ひし時は。萠芽だもなかりし。大きな瘤一ツ出來しぬ。そればかりならば。尙しもなれど。多少血走りたる創さへにありけり。「頭も洋服も血だらけ」とは。まるきり形もなき事なれども。十分二十分の說明しは。十分値打したる。額の體裁。喧嘩をするやうなる仁でもなく。轉んで怪我をしたる譯にてもあるまじ。

（田）一體マア如何なすツた。非道い怪我をなすツたネ。

（菱）イヤ實に失敗々々〳〵。實に近來の大失策。イヤどうも面目なしです。

（田）エ。如何なすツた。

（菱）如何といつて……

パチ〳〵〳〵。（是は目ばたきの形容なり。）

（菱）先刻「ステーション」へ戻りましてネ。便をたして。再び君の後を追ツて。恰ど此店の前まで來ると○やられました。たうとうやられました。イエサ。ソラ例の支那奴にさ。ウヌツといつて追かけましたが。恰も鐵道が神田から……汽車が神田から來るところで。線路の通行が

とまつたので。彼奴。狼狽たと見えましてネ。周章て横町へ逃込んだのを。章駄天其人。イヤ其神といふ勢で。僕が疾風避三舎と追せまつて。あはやといふ場合に臨みましたが。忽ち傍の煉瓦造へ……たしかアレは仲徒士町の四丁目でせうか……身を飜へして逃込むから。こいつ。取逃してたまるもんかト。前後を考へる遑もなくツて。イヤ實に大失策。續いて門のうちへ。……それがサ。中々立派な家です。母屋はその割に廣くもないが。門の構へ方はどうして〳〵。思ふに火事避の用心か。四方に空虛な地を。ダガ。こんな飲水の惡いところへ。どうして住込んだかこれが不審で。……それから會釋もなく門の内へ。僕が會釋もなく躍り込むと。彼奴はイヤ實に大膽な奴です。平氣で玄關へかけ込むから。鹿を追ふものは山とやらで。僕も無ツ茶苦茶にかけこんだが……夢中でかけあがつた玄關先。ビシャーリッとやられたから驚いた。イヽエサ。(パチ〳〵〳〵。)「ステッキ」でさ。ト云ながら(兩手を擴げて身振をなし)ウヤツと一旦は目がくらんで漸く面をあげてキツと見ると。イヤどうも赤髯がネ。酒にくらひ醉つて居ると見えて。眞赤な面をして赤髯めが。僕の胸先を掴みましてネ。

「あなた。人の家だまつて這入る。賊ありますかア。

イヤ實に驚いたネ。いかさま Man's house is castle. 向うが咎めるのは道理ではあるが。其時

ア僕も半夢中ですから。頭をぶたれたので。ソレ。グットネ。何だ此赤髯不條理な奴だ。前の支那奴は捕へもしないで。後からかけ込んだ僕ばかりを。トネ。ソラ。ムカ〳〵と腹がたつて。

「Pardon me, Sir, I—I am a man in pursuit of a thief, who has just ……(御免なさい。實は賊を追うて……)

トいひかけるト。怒ツた猿のやうな貌をしまして。

「Oh! no. I've got no thief here. Be gone! or I'll kick you out. (イーエ。盜。そんなものこゝに居ない。出てゆくよろしい。ゆかぬと蹶とばすぞ。)

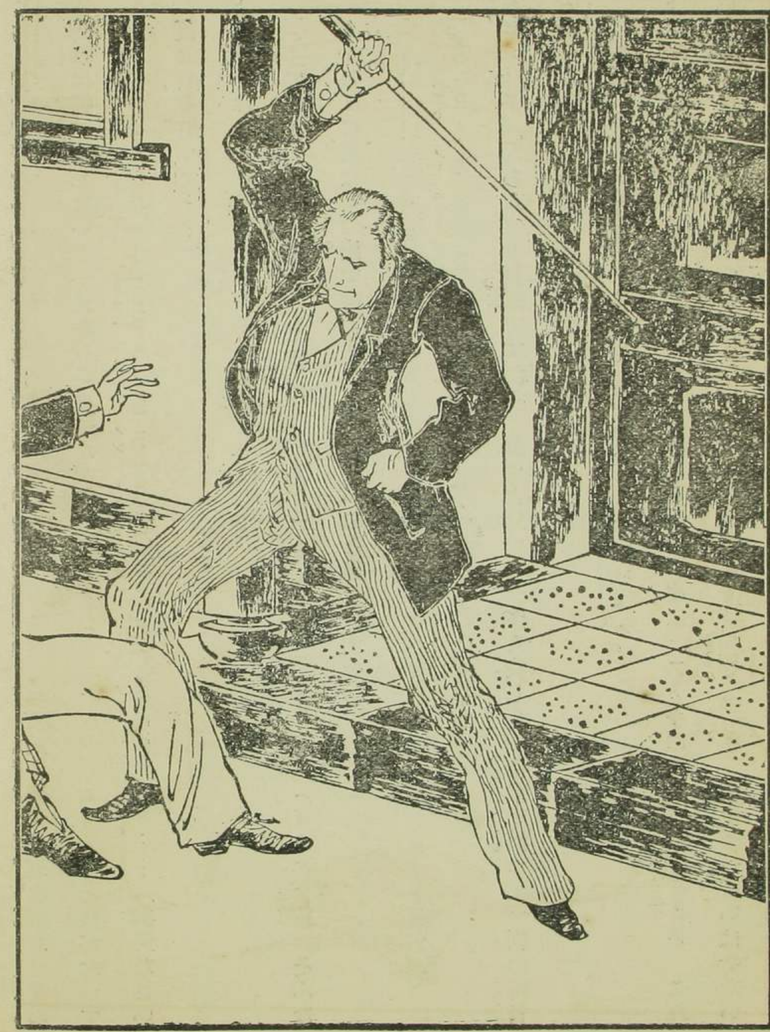
「But—……(ですが……)

「No but—no need of but. (ですが入ません。言譯きゝません。)

又ビシャリッ。あんまり無法ですから。糞ツと思つて。僕も我しらず膂力を振つて。髯の腕首を。キツと捻ようとすると。

「Jack, Jack. A thief, a thief. (ジヤツク〳〵。泥坊々々。)

ト二三度大聲で呼立るト。たちまちバラ〳〵とかけて來は。ステキに強さうなnegroさ。これはと思ふひまに後ろへ回つて。僕の襟上をひツつかんで。Why の wh の字さへもいはせない



で。煉瓦の床の上へ引倒すと。赤髯「ステツキ」をふりあげやアがつて。横なぐりにビシャーリッさ。額のまん中を（パチ〳〵〳〵。）恰ど目の上の大事の急所を。火花が飛散る程ぶたれましたから。流石の僕も。其儘ウーン。暫らくは正氣亡失。やうやく心づいて目を開くと。いつの間にか門の外です。ェ。そればかりでないのですテ。巡査が一個。警部が一人。例のnegroが證據人で。マアサ貴君。聞て下さい。（パチ〳〵〳〵。）僕をネ。僕を……僕を窃盗だと誣告するのサ。僕豈……豈怒らざるを得んやでせう。「それは甚しい事實の相違だ。實は斯様〳〵々云々だと。賊を追かけた發端からして。不法の打擲を受た事まで。僕が警官に陳辯した所が。彼奴め洋人を恐れてゐるから。兎角片言で訴を定め。はじめはどうしても聞入れません。これぢやア不可ないと思ひましてネ。僕も激烈に出掛ますると。彼奴も論理には勝れないから。やうやく得心した事と見えて。兎に角本署まで來いといふので。竟にお成道へまゐりましたが。扨それからがお話です。例の英人はnegroをもつて。飽まで僕の事を窃盗だといふ。僕はあくまでも理由を陳じて。損害要償を主張した所が。ツマリ不可。ツマリ僕が大失策さ。蓋し突然と案内もなく。他人の邸宅を侵したのだから。そこから理窟詰に來られる時には。此方一言もない譯ですから。喋々三寸を腐爛した末が。ぶたれ損で小言頂戴。イヤどうも馬鹿な目に逢

ひましたヨ。

無間斷幕無にのべたてたる。菱野が早口の物語を。鼎は火の消たる卷煙草を左手にシツカリと握りたるまゝ。例の「フ、ン。ハ、ア。」をあしらひにして。別段所作なしにて聽居たりしが。一まづこの所で段落ならんと。菱野の口元の様子を見てとり。此機失ふべからず。トたちまち椅子と共に小膝を進め。

（田）そりやア飛だ御災難でしたネ。しかし殘念でしたネ。何故思ひきつておやんなさらない。思ふに其英人は。賊の相ズリかもしれませんゼ。

（菱）ェ。（パチ〳〵〳〵。）トいふ譯は……

（田）斯は申すものの。或は邪推かも圖られないが。貴君も先刻おつしやつた通り。先へ逃こんだ支那人を咎めないで。貴君ばツかりを咎めるといふが。第一怪むべき事であるのに。且は言語が通じないといふ譯でもないのに。いくら亂醉してゐたとしても。理由も分說もきかないとは。是また英人には似合はないはなし。近頃新聞紙の報道によると。たしかに日本人の無賴漢なんぞを。潛伏させてゐる……匿藏ツてゐる外國人が。東京府内にもあるといふから。或は其種類の者ぢやアないか。○それも原因は何かといふと。兎角外國人の邸宅へは。「戸口の調査」

なども屆かんからです。思ふに其英人なんぞも。

トいひかけて暫らくかんがへ。

(田)しかし證跡のない事ですから。之を告發する譯にもいかんが。……○それにつけても。どうも赤髯は狡猾ですネエ。萬事に先を越して。出掛る所が……總て defensive (受太刀) と offensive (打太刀) とは。大して其便宜が違ウもので。議論でも戰爭でも然ですが。笠にかかッて。くッてかゝると。理非曲直衆寡强弱は暫く措いて。先手が大方は勝を得ます。先んずれば他を制す。實に旨言です。○洋人は生來慧敏ですから。終始此邊に注意をしてゐて。いつも〳〵先を越して。彼方からして逆捻にでかけ。此手で日本人を壓倒しますヨ。盜人たけたけしいとはこれらの事です。お話の英人の如きも。(賊の同類であるとないとは暫く措いて。)頗る太い奴といはざるを得ずです。思ふに一旦の怒に任して。貴君を甚しく打擲して。氣絕に至らしめた事ですから。尋常一樣の人情からいへば。これは早まつた事をしたと歟。とんだ粗暴かしい事をしたと歟。多少狼狽るが當然であるのに。少しも其等の樣子もなく。進んで警察へ訴へる抔は。イヤ實に拔目のない仕方です。貴君が草賊でないといふ事は(假令先方に野心がなくても)必ず氣がついたに相違なけれど。粗忽に打擲して怪我をさせた。其要償で

も願はれはせぬかと。そこらを豫め推測して。貴君に口數をきかせない爲に……

此時までは菱野詞狂は。口を富士形に開きたるまゝ。少しく人中を長くなして。無言で目ばたきのみ勉强してありしが。たちまち嘴をさしはさみて。大きな聲にて。

(菱)成ッ。

田所は不意をくらひ。覺えず演說を中止すれば。「得たり」といふ見えにて膝おし進め。

(菱)成ッ。それで先を越して。成ッ。如何さま。さう貴君にいはれて見れば。歷々其徵がありましたテ。ア、殘念な事をしました。しかし確乎たる證據がないから。今更どう……どうも仕方がない。

少しく鬱閉たる貌色なりしが。たちまち氣をかへて莞爾と打笑み。

(菱)イヤ。これも經驗のうちです。……材料の隨一です。ハ、ハ、。○時に先刻は失禮。定めしお待なすッたでせうネ。

(田)如何なすッた歟と心配しまして。……○お怪我はどんなです。何か藥でも……

(菱)ナンノ。思つた程でもありません。只今「神膏」を貼用いたす所です。

トいひつゝ膏藥を取出して。頻に額際へ貼附る。

(田)それならば結構ですが。先刻こゝの少女が「頭が血だらけ」だといひましたから。
詞狂は機嫌よげに打笑みながら。
(菱)ハヽヽ。さう見たも無理はありません。血だらけの「ハンカチーフ」を頭にのツけて。……
それに赤い「シヤツ」を(上被と上のシヤツが破れましたから)こんなに暴露してゐましたから……
折柄奥の間より以前のおみや。茶菓子を取そろへて持いづれば。「ペロ」(犬の名)も引續きてたちいでつゝ。菱野の椅子の傍へ歩み來れば。
(菱)Come. ハヽヽ。先刻は大層吠たナ。おれを化物と思つたと見えるナ。
トいひかけてフツとおみやを見やりて。例の如くパチ〳〵〳〵ギツクリ。鼎は此體には心も附かず。懐中時計を取出して。竊に時刻を見て獨うなづき。
(田)時に菱野君。今夜は實に多事な night(夜)で。先刻おはなしをいたしました。渥美恭輔の身の上が。不圖思ひよらぬ hand(傳手)からして……
(菱)エ。行方が……フン。わかつたのですか。(パチ〳〵〳〵。)渥美氏の後段が……
詞狂は我しらず。目を見張て。いかにも熱心氣に問ひかくるは。渥美に友情の厚き故歟。但しは

材料を得たいが誠歟。いづれにしても小説家は。概して人情の深い者なり。我しらず膝を進むるとて。傍に打臥したる「ペロ」の前足。椅子の後足にて覺えずガツクリ。
(ペロ)キヤワン〳〵〳〵。
(菱)ホイ。Pardon(ごめん). Pardon.
されども此言葉は犬には通ぜず。「ペロ」は恨めしげに菱野を見やりて。「扨は先刻の返報に……おれが吠たてたを遺恨に思つて。不意に非道い目にあはしやアがるナ。こゝに因縁のあるお客でなくば。一寸嚇かして呉るのだが。主人に免じて。こらへてやるわい。などと腹のうちで思ひしや否や。やがて立あがりて隅の方へ立退き。こなたを打守りて横になりて居り。
鼎は此時しも煙草の火を得て。盛んに卷煙草をふかしながら。これを武器にしての演説ぶり。先刻よりの一伍一什を。倍根はだしといふ簡略文にて。巧に要を摘んで物語りつ。やがて鼻よりして煙草の煙を。一時に澤山にふきいだしたり。これは物語の絶えたしるし。「ノロシ」と同樣な者ならん。と煙草を嗜まざる詞狂は思ひぬ。かくて田所は言語をあらため。
(田)いま申したのは事實ですが。其怪むべき手紙に關して。竊に我等の思ふ所は……
斯樣々々云々なり。渥美が身の上の凶事にてはなき歟。萬一凶事なりと定まらんには。朋友の情

誼として。安閑傍觀してあるべきにあらず。早速横濱へまかり越て。多少其要愼なすべきやう。渥美に告ずしては叶ひがたし。いまだ來歷を聽果ざるゆゑ。何共善惡を定め得ざれど。思ふに面白き事にてはあらじ。足下も奥の間へ來りたまへ。尙十時には程あるべければ。委しく來歷を聽果たる上。何とか御相談をいたしたし。ト顚末つまびらかに物語れば。菱野は「奇」とたゝへ「非常」と歎じて。終始感歎の聲を得たゝず。少女は先刻より傍に侍りて。菱野の面をのみ打守りてありしが。「定めし「まぶた」がくたびれるであらう。あんなにいそがしう目ばたきしては。」トひそかに腹のうちで思案するも。自分が段々に眠氣ざして。瞼が重くるしうなりたるに因るなり。

(菱)實に思ひよらん。奇遇で……所謂奇遇とは實にこれです。僕が貴君に邂逅した工合から。「コヒイ」店の再會……僕の失策……貴君の adventure (出會ツた事)……渥美の身の上……稻積の榮枯……イヤどうも。實にどうも……

ト頻に嬉しげに歎稱してありしが。やがて心附きて言葉をあらため。

(菱)それでは。其話の後を……早速奥へいつて聽ませう。○必ず凶事に相違ない。渥美を其弓原といふ番頭が……エ。弓原は番頭でない。成程。「ビゲイ」の内弟子。成程。兎に角番頭の

千本といふが。妹のお塚と同腹中で。……同胞で渥美を惡んで……エ。お塚は弓原の妹。ハハア。ですか。成。成。それではお塚と千本が。成程。いかさま。こりやアさうかもしれません。いかさま。必ず然に相違ない。それでは渥美の身はいよ〳〵危い。早速其後を……ト せきこむ詞狂。鼎も「然るべし」と贊成して。ともに臺所へたちもどれば。おみやは急がしく出迎へて。

(みや)どうぞ此方へ。甚だ失禮でございますが。母は……

鼎は逸早くそれと推して。

(田)定めし。先刻の長ばなしで。疲なすツたらう。早くさういはうと思ひながら。ツイ話に氣をとられて。

(みや)寔に濟ませんが臥りましたから。

(田)勿論〳〵。ところで先刻の話のあとを。ズツと手短に話して下さい。委細は又參ツて聞ませうから。……○どうも夜が短いには困る。

(みや)それから何でございますヨ。お塚さんの勸で「ビゲー」さんに懸まして……

段々御療治をうけましたので。少は快方に赴きました樣子。これでは安心ぞと思ふと同時に。寔

に可厭事が起りました。此「ビゲー」さんといふお醫者は。並の西洋のお醫者と違ひ。むかしの「キリシタン」の魔術のやうな。怪しい。氣味のわるい術が上手で。折々藥取に參りし折。いやだと申すのを聽入れないで。おまへを眠らして見せるから。ト何だか氣味の惡い手附をして。額で私の貌を睨むと。一體どうしたのか存じませんが。俄に堪られなく眠くなつて。卽座に眠りこけて仕舞まして。後には眠つたまゝ。我をしらずに。家へ歸ツて來た事もあります。氣味が惡くツてたまりませんから。例のお塚さんに賴みましてネ。薩張謝絕らうといたしますと。サア色々と六かしい事をいひだし。今まで藥料も診察料も。すこしも取らないで置いた事故スツカリ今日中に勘定し〻。若其勘定が出來ない事なら。おみやを奉公に出せ。妾にかゝへたい。と申すンですヨ。兄は片意地な人間ですから。それは〳〵大變に憤りましてネ。太い奴だ。「ユスリ」同然な事をいふ。屯へ訴へて出るがいゝ。ト頻に八釜しくいひましたけれども。正可に其樣な事もできず。どうしようかと思ひまして。スツタモンダしてゐますうちに。兄は俄に。……俄に病氣が重りまして。ツイ死亡ツて仕舞ひました。○葬式の眞最中に。弓原めがまゐりまして。「おれの妹も（お塚をいふ）先日佛人の妾になつたが。大層旦那の氣に入ツて。ちかいうちに高崎とやらへ。大きな妾宅をたてて貰ひ。立派に引越をするとの事だ。どうだ野暮堅い事をやめて。……

綿羊といはれた昔とは違ふ。今ぢやア洋人に添ふのは名譽だ。……ウンと承知して奉公をしな。「ビゲー」さんは獨者だから。おまへの腕次第で細君にもなれるぜ。どうだ。手取早に返辭をしナ。ト貴君。葬送の間際に來て。母とわたくしに勸めるんですヨ。不開化かは存じませんが。母も憤りますし私も……まことに〳〵悔しくツて。どうしようかと思つて居ますと。恰ど其翌日渥美さんがお出なすツて……何處で如何尋ねてお出なすツたか。「稻積玄治さんは此方ですか。わたしは渥美誰々だ。」と立派な粧服をしてお出なすツた。兼て兄からして承知ツて居ましたお仁。「マア〳〵こちらへトお請まをすと。「玄治さんは。「實は斯樣々々で亡なりました。「それはマア殘念至極。定めし御愁傷の事であらう。トそれは〳〵御親切に。いろ〳〵おつしやつて下さいまして。「實はお聞及あらう通り。わたしは兄さんの玄治さんには。色々莫大な御厄介になり。お庇で佛國までまゐりまして。はじめは理溫府にて「ボーイ」となり。方々艱難して渡りあるく內。圖らず親切なる米人に使はれ。だん〳〵其人に信任されて。手代同樣になりました處。元來此人は旅商人にて。僅に四ケ月間滯留して。直に本國へ歸り支度。「其方も米國へゆく氣があるなら。一所に參らうが。」トいはれたれど。歐洲滯在が志願の事ゆゑ。やう〳〵惡からず斷りたる處。「それは殘念なる事なれども。其方の志望も奪ひがたし。しからば今までの馴染甲斐に。何處か

よい所へ世話をしてやらう。「ボルドウ」の釀造家に。私の懇親の者があるから。其處へ口入してやりませう。と竟に其主人の紹介にて。酒肆の「クラルク」（手代）になりましたが。恰ど此時に玄治さんは。歸國をなされたる事なるゆゑ。心計なる餞別も得せず。謝恩の萬分一も表する能はず。まことに濟ぬことを致しました。其後主人方の惣領息子が……Jaque Surat と申すのが……理溫で製造所を始めるについて。（生絲の製造所を創立るについて。）わたしが其手代に選ばれまして。理溫へ歸ることになりましてネ。其時玄治さんの歸國の事も。はじめて承知したやうな仕儀で。處が今年に相成ッて。主人（「シュラー」をいふ。）は漸々に悟つたと見えて。わたしの原案を採用して。日本へ移住すると決心いたして。機械其外を取纒めて。先月當港まで着しました。四年振で歸國いたしたが。何分主人方の用事が繁くて。故郷へ音信さへ出し得ぬ位。毎日奔走して居ますうち。はからず先達て。さる人より。此方のお話を漏聞たるゆゑ。扨はと驚いて早速其日に……直にも參らうと思ひながら。餘儀なき用向にて一日後れ。恩人玄治さんに面會せぬのは。寔に遺憾至極。殘念だ。ト聲を曇らして渥美さんのお話。「これからは萬事引受た。決して心配には及ばない。ト御辭退申してもお聽なされず。お金を澤山に下さいまして。母子は佛さまに逢つた思ひ。「ビゲー」さんの事も話しましたれば。「そんな不條理があるもの歟。藥料其

外は宜しい樣に。わたしが談判して渡さうから。少しも心配には及ばないが。外に氣にかゝる事があるから。濱に住居するは宜しくない。殊に來月は主人事も。上州高崎へ肆を出すから。わたしも其方へゆかねばならず。其是こゝに居るは雙方の不便宜。宜しい。斯うなさい。東京へまゐつて。何か小商をするが宜しい。わたしが工夫をしてあげようから。ト何から何までもおつしやつて下され。恰ど今年の一月の末に。こちらへ此肆をだしましたが。花の頃は申すに及ばず。不斷も存外に繁昌しまして。（それに渥美さんが毎月々々お小使を下さいますので。）親子が樂樂と暮しまするが。滿れば虧るとやらで。母は三月のはじめからして。だん〳〵老病が募りまして。いまだに臥つてゐるやうな事で。……

（菱）どうも奇だ。實に奇だ。

（田）渥美は其後どういふ譯で。又々外國へまゐッた事だか……

（みや）恰ど今年の三月の中旬。御主人の「代理」で……商賞用で……

折柄「ペロ」がかけ來りて「流シ」の瓶の傍をかぎまはりて居り。

（田）ハヽア。それぢやア此犬は渥美の犬だネ。

（みや）ハイ。其節「ペロ」をあづかりました。

「ペロ」はおのが名を呼ばれたるを。結句名譽なりと思惟したるが如く。忽地彼方より走り來りて。今少し我事を題目にして。話をしたまはずや。如何ですな。と人ならいひさうなる貌附にて。前足眞直におッたてつゝ。鼎の膝近う見あげて居り。されども田所の冷淡なる。件の「居候君」に「世辭る」體なく。

(田)そして渥美は。お塚の來歴をしつてゐるかネ。

(みや)ハイ其事はくはしく知つて……お塚さんが「シュラー」さんの。妾だとうけたまはりました時分に。母から色々とお話し申して……ですから。何がなんでもお塚さんと……

(田)フム。それで大概は解ッたやうだが。

と暫く思案して。

(田)渥美が外國から歸ッたといふ事は。何か報知でもありましたかェ。

(みや)イヽエ。まだ何にも私どもへは。……もつとも今月ごろ歸るとおつしやいましたが。

(田)渥美は「濱」では何處へ着くネ。やはり旅籠かネ。

(みや)イヽエ。花咲町に洋酒店がありますが。あれが「シュラー」さんの本宅ですから。必ずあそこへ……

(田)フヽム。それも宜しい。……○それで漸く解つた。先刻高崎の製造所は。お塚の名前だと聞いた時には。どういふ譯で然うかと思つたが。いかさま雜居地の外であるから。……外國人の名では不動產が買へない。○なるほど。大方は筋がわかつた。

菱野は先刻より一言も發せず。只管熱心氣に息をのみて。折々「パチ〳〵」をも愛敬に加へて。二人の應答をば聽居たりしが。流石に手持なき感覺もあるにや。いつしか先刻まで敵同士なりける。例の四足の「居候君」を。招くともなく呼寄るともなく。おのが膝の傍へ親しませて。頤を撫で頭を擦り。無二の友の如く睦みあひて居り。「ペロ」にして心理學者なりせば。同情相感の結果なりとや思はん。思ふに菱野といふ風流男子は。頗る粗忽なるに似たりと雖も。其實よのつねの粗忽者とは異なり。非常に感覺が鋭敏なるゆゑ。おのれが面白しと思ふ事あれば。一圖に其事に意を傾け。餘念を放下し去る癖はあれども。さりとて。思慮のなき人物にはあらず。されば長々しき問答の間も。敢て横合から贅口をきかず。只管沈默して聽居たるのみ。蓋し面白き人物といふべし。

田所は再びおみやに向ひ。

(田)大方事由が解つたから。明朝にも濱へいつて。渥美に逢つた上で。相談するから。決して

心配をなさるには及ばん。就ては先刻のお塚の手紙も。わたしに暫時かして下さい。

（みや）どうか。何分にも宜しく。

トいひつゝ先刻の手紙を渡す。田所は手紙を請取り。同時に懐中の時計をのぞきて。

（田）ヲヤ〳〵大失策。けふは色々と事にまぎれて。ツイ卷忘れて……

菱野は「ペロ」の貌を撫てありしが。たちまち此方へ向ひて。

（菱）とまりましたか。○僕のは……

トいひかけて。胸を打見やりて。口をつぐみ。獨莞爾と打笑みたるのみ。

（みや）清ちやん引清ちやん引。○ヲヤまた居眠をしたかしら。○清ちやん引。何時ですヨ。

折柄店の方でボーン。上野の鐘の音もゴーン。

（みや）ヲヤもう……

（みや。田所。菱野。三人一緒に）一時ですヨ。だ。だネ。

第十回

政治家の小集會

革弊會の演説　兼て風説ありし革弊會の演説は。昨日雉子町の公演樓にて午後七時に開會せり。傍聽無慮七百餘人にて。頗る盛んなる演説會なりし。元來通俗が主髓との事にて孰れも平凡論旨なりしが。辯士の論法の巧妙なると比喩例證の適切なるが爲に。不學の聽衆も退屈を覺えず。深く感銘して謹聽せしに似たり。第壹席は瓜飼氏なり。「商家の通弊を除かむことを望む」といふ演題にて。通弊若干を摘發して其の革むべからざるを辯じたるが。其重要なる者は。〔第一〕價を二三にする弊習の未だ全滅に至らざる事。〔第二〕品物に見本を備へずして。客が註文を要する都度。重き巨大たる品物を持運びて。時間と勞力を徒消する事。〔第三〕時間の約束を綿密にせざるよりして。往々得意向の不便宜を釀し。爲に其愛顧を失ふ事。（此段にては過般濱町の某商店が芝の外商と約束せし賣買契約の期日を誤り。爲に契約も破談となりしが。僅に一日の遲延なりしが。之を法廷に訴ふるに由なく。二千有餘圓を損耗して。空く泣寢入と

なりたる事など。主として引證して痛論せり。）〔第四〕地方の豪商等は。舊習を守りて今尚財産を陰蔽するの癖あり。爲に信用を薄うする事。（此段にては財産を陰蔽するは封建制度の遺弊なり。上に法律の保護ありて。財産安全となりたる上は。最早之を蔽ふ必要はなきなり。寧ろ財産の現額を公示し。廣く商賈界の信用を博し。活潑豪放に取引をなすべし。さらずば徒らに現金に依頼し。區々たる取引をなさざるを得ず云々。）等なりし。第貳席は法木氏にて「身代限の規則を論ず」といふ演題なりし。其大意は身代限の規則が疎放なるが爲に。大に外商の不信用を釀し。隨つて資本の移入を妨げ。兼ては商業の不振を來す。と一々近接なる適例を列擧し。丁寧反復して辯說せり。最後の演說者は。手塚氏なりし。「勞力者流に白す」といふ演題にて起頭に記事體の演說法を用ひ。巧に詼諧の言語をまじへ。目下の力役者の通弊を訐きて。宛然睹るが如く叙述し終り。扨本論に入るに及びて。暗に前の記事を引證して。何故目今の職人仲間は。所謂「チヤン〳〵」に壓せられて。頻々飢餓に泣くに至りたる歟。ト一々其因由を探りて曰く。〔第一〕忍耐に乏しくして。些少の凌辱を忍び得ざるが故なり。〔第二〕日本人民たるの資格と。雇人たるの資格とを辨別する能はず。生中に見識ぶりて。往々外人を賤蔑するが故なり。〔第三〕生意氣と小才覺に失して。雇主の命令を嚴守せざるが故なり。〔第四〕時間の約束を始

めとして。萬事に綿密を缺くが故なり。〔第五〕利を得るに綿密ならざる故なり。譬へば一錢。二錢を爭ふべき境遇にありて。尚且五厘を輕蔑なし。二錢賜はらば應命せん。一錢五厘ならば辭絕せんなどと。つまらぬ場合に士族肌を現はし。竟にアブも蜂も失ふが故なり。〔第六〕遠慮先見に乏しくして。手より直ちに口に運び。毫も貯蓄といふ事をなさざるが故なり。〔第七〕箇箇介立して微利是爭ひ。一致團結して支那人と競はざるが故なり云々。と斷論せり。之を要するに同會の演說は。時弊に適切なる者なるが故に。他の空漠たる學術演說者くは政談の演說に優りて。江湖に益すること多かるべし。同日は午後十一時頃に解散せしが。續いて來週の土曜日を以て。同刻同所にて開會すといへり。○大層長々しく書たてたネエ。

「ヲイ〳〵。一寸我輩に見せたまへ。如何だ今日の傍聽筆記は。何か面白い議論があるか。

「いかん〳〵。ちつとも今年のは面白くない。それに喋舌る奴が極ツて居る。三十六番と二百五十番が。一番卓說を吐くやうだが。概して木偶人が多いやうだなア。

「面白かつたのは。一昨年の條例改正の議論だつたなア。まるで討論會の激烈なんだ。滿院總起立といふのだからなア。ああいかなくツちやア。面白くはない。保守黨の敗北した鹽梅なんさア。實に愉快極ツたぜ。

「しかし贅だ。上院で否決したから。何だなア日本の上院は恰も……

折柄呼鈴の音。ガラン。ガラ〳〵〳〵。

「ヲヤア取次だぞ。

「僕が往う。

傍の煙草の箱を。足の爪先にて蹴飛しながら。急ぎ玄關へと立てゆくは。年齢十八九の山出し書生。跡に殘りたるも同じ年齢。これまた近縣より參りたりと見えたり。こゝはそも何人の住居ぞ。橋場の渡場を斜に見て。墨田の川水に打向ひたる。構は際立て廣やかなれども。流石に質素なる建築振。驕奢を誇示せんとの別莊にはあらじ。遠く紅塵に隔たりたるは。浮世を厭ひての業なるにや。見れば門内には彼處此處に。腕車數あまた引入れたるに。騎馬にて訪來るものありぞと覺しく。馬の嘶く聲常磐木の彼方に聞えぬ。玄關の建方は。和洋折衷と思はれて。靴は靴ヌギに取殘されつ。伍々參々相並びたる。いづれも其主人を待兼貌にて。中にも半靴の仰様に落かゝりたるは。欠伸をするにやと可笑う見えたり。此日は晝過より雨ふりそゝぎて。今尚全くは晴やらぬに。長靴さてはまた雨傘のたぐひが。絶えて其形を見せぬを思へば。件の幾個の來賓達は。眞晝の頃よりして。訪來りしにやあらん。知らず何事の集會にや。邸の建ざま。内外の模様。韻事

風流の寄合とも覺えず。いづれ公事に因故ありと見えたり。

時しも午後六時。二輛の新しき腕車に駕りて。門の此方にて楫をおろさせ。軈て玄關へと進み向ふは。粧服もいやしからぬ兩紳士なり。一個は年のころ三十六七。逞し氣に膏滿ちて。髮薄く面まるし。口を開きて物語らふ毎に。如何にも愉快氣に打笑むなる。鬚も惡からず生延びて。左右へ「八」の字に廣がりたり。耳房の瓢に似たる。丈の割合に低う見えたる。共に福々しき人質なれば。あはれ今少しく色黑ませて。帽子を取かへて見ましかば。ト竊に後言いふもあるべし。今一個は二十六七。多少日にやけぬと見えながらに。前の紳士風に比ぶる時は。流石に「白」の字を用ひたくぞ思はる。額高く髮厚く。中肉にして丈高し。眼光の鋭利なる。口元の嚴格なる。所謂愛嬌には乏しけれども。威貌はなか〳〵に備はりて見えたり。眼が今少しく大なりせば。一層其威嚴を增しつべきに。小に失したるは惜しからずや。にこやかなる紳士に案内されて。後より徐々に進むを見れば。はじめて訪來ぬとは衆目の鑑定。しかるに一通り見回したるのみ。極めて見所ある邸の模様に。さまで注眼せる氣色もなし。蓋し此人の本性たる。決して外物に冷淡なるにあらねど。神經他に優りて銳敏なるから。一寸一瞥見せしのみにて。十分其模様を會得する故。久しく同物には注目せぬなり。されども此因果を悟らぬ輩は。怪しう哲學家を氣取ッた奴かな。「アムストル

ダム」に逍遙せし。Decartes 其人に似而非なる奴ぞと。目ひき袖ひきして嘲りしなんめり。莞爾たる紳士は玄關にて。呼鈴兩三度引鳴せば。最前讀人に知られにたる。書生取次にと立出たり。紳士は高帽を脱しながら。

（紳士）清見が先達てお話し申した。田所鼎氏を同伴しましたが。只今御面會が願はれようか。

……聽いて下さい。

（書）ハツ。畏諾りました。〇どうか暫らく。

やがて荒ツぽく立上りて。黑く汚穢らしき足の裏を左右かはる〳〵此方へ見せて。急ぎ奥の方へ走り入りぬ。程なく彼方より歸來りて。（此度は幾分か外部の刺戟を何處かで頂戴して來た事と見えて。頗る鄭重に足を運びて。自得の禮式にて兩手をつき。）

（書）どうか此方へ。

（紳士）ヲイ〳〵田所さん。〇サアお上ンなさい。

紳士は田所をさし招きて。共に玄關より進み昇れば。書生は案内をして次の間に立出。やがて長廊下を通り過ぎて。とある廣やかなる座敷に來りぬ。「こゝにて暫時の間待給ひてヨ。」といふ。こゝは應接の間に建做たるにや。將また閑談の座敷なるにや。眞中には圓卓子あり。安樂椅子

五ツ六ツ七ツ置添たり。清見は何事を思ひ出せしにや。硯と料紙とを借受つゝ。一寸田所に會釋なして。急用の書簡にやあらん。しきりに走りがきに認めてをり。鼎は手持なきまゝに。しばし廊下を通り過ぎて。とある廣やかなる座敷に來りぬ。「こゝにて暫時の間待給ひてヨ。」といふ。こゝは應接の間に建做たるにや。將また閑談の座敷なるにや。眞中には圓卓子あり。安樂椅子ば四下を打見やるに。和洋折衷の建風とて。向ひは形の如く二間の床にて。軸は狩野家の山水と見えたり。東は墨田川を見晴したるに。軸まで山水とはうるさきに似たり。人工いかほどに妙なりとも。自然の妙工に及ぶべきやは。重複脈ふべしと打顰みて。仰げば舶來の子持「ラムプ」さながら白蓮華の開きたらんやうに。四方にはびこりて。彩色燦爛。日暮れて之に火を點じたらんには。定めし敷物の花紋に映じて。ます〳〵けざやかなる事なるべし。一隅に安置せるは書架のたぐひ歟。黑檀の木地いとうるはし。何にやあらん卷物やうの書。わづかに二卷ほど据置にたり。そが上にあるは自鳴鐘にやあらん。獨逸歟さてはまた佛蘭西製造歟。機關の人形の右手の撥にて。鐘をならすやうに製りなしたる。細工もなみならず巧緻なるに似たり。さまで其形は大きくはあらねど。正しく銀臺の金鍍金にあらずや。「アルミ」の光澤とは異なれるに似たり。かう思ひつつ彼方を見やれば。盆栽三品四品緣端に据たり。左手なるは萬年青にやあらん。定めし價貴き品ならめど。重に「實學」のみ是れ修めて。生來本草科に昏かる身には。尾張の七寶ぞと見られにたる。鉢のみなか〳〵に目にぞとまる。他の兩三種は何といふ植物ぞや。總じて此般の植物類は。

畢竟雑談の材料となるもの。而して雑談は政治家の方便。これらも學び得ておかずては叶はじ。人の嗜好を見て說く可しといふ Oratory（縱横の術）も。韓非が說難に論ずるところも。結局材料なしにて。能くす可きにあらず。西の政治家の博識なるは。自然の必要よりいでたるにあらずや。具氏（グラッドストーン）といひ。微侯（デスレイリ）といひ。啻に世の務に老練なるのみか。別に風流の才思を備へて。時に閑天地に逍遙したるは。件の必要のありけるに因る歟。將また博學にして洽聞なるもの。綽々として餘地ある者。特り政治界に志を得るにや。何れにもあれ博識にして多聞ならんこそ。最も世に處するに便宜ならめ。さるにても此家の主人は。夙に政治界に其名を知られて。德望淺からずと聞えたりしが。果して其人質如何なるらん。他の急激黨改進黨。さては保守黨にいはしむれば。彼は單に似而非民權家なり。所謂 Demagogue（私利黨）の亞流なるのみ。されども公明を缺く事の甚しき。黨派の偏說に過るものなし。輕々信ずべきの限にはあらねど。さりとて倩〻と考ふれば。流石に我も又疑念なき能はず。元來彼の人は改進を主義とし。保守急激の黨議を不可とし。國會創設の其頃よりして。黨派を組織したる人にあらずや。實にや其際は議論繽紛。輿論の方針は何處に向きけん。ほと〳〵確認する能はざりしといへば。彼人其間に卓立して。斯樣に獨立して黨議を綜しも。寔に至理なる事にしあれど。今

しもやう〳〵に黨議定まり。輿論はさながらに三分して。急激。改進。保守。斯樣に鼎足を爲たる時勢に。不知何等の理由あつて乎。彼人改進派に同ぜざるぞ。而して其主義を問へば。彼此共に改進なり。其手段を問へば小異大同。兎に角重要なる大事に關して。さしたる異同あるを見出さざれども。わづかに其故國を問ふに及びて。はじめて相異なる所を見るなり。嗚呼政黨は鄕黨にあらず。鄕黨は猶族黨のごとし。族黨をして政權を爭はしめん乎。其弊や實にいふ可らず。よしや劍戟に訴へざるも。其弊害の多大なること。源平兩黨の鬪戰にひとしく。佛の婆侯黨烏侯黨の往古の軋轢にも焉ぞ讓らん。彼人の卓識なる。爭でか前轍を知らざるべき。已に知れり。知りて尙之を忍ぶは其意疑ふべき限にあらずや。嗚呼立憲の制行はれてより。閱年よしや尙淺ければとて。かまでに小黨派の樹立するは。國家の奉爲に歎かざるを得んや。猛獸相鬪へば獵夫ほしいまゝに利をなすとぞ云なる。議院の權力が微弱にして振はず。特り少數の「なにがし」をして。久しく其威力を保たしむるは。そも〳〵また故あるかな。遮莫かやうにいはむは。變遷化醇の理に昏きものに似たり。若夫大御國の人情風俗ならびに近代の改革經歷。否太古の經歷さへに。英吉利其國に似たらんよりは。寧ろ佛蘭西に似たるものの如し。掛まくも惶けれど。さすがは大御國の國體の美なる。所謂君子國の綽名に背かで。君は仁愛をもて民に臨ませたまひ。民は忠誠

をもて皇室を戴きまゐらせ。連綿二千六百年。只管德義といふ無形の物もて。御國を經營して來りたればこそ。曾て Bourbon の虐政を見ず。嘗て大の Louis の專斷を知らず。上下協和して相假借し。殆ど面をだも赤めあはずして。融々洋々たる宴樂のうちに。めでたく美しき立憲制度を。かやうに享有する事とはなりけれ。さりとて其進化の順序を思へば。流石に佛蘭西に似たる者あり。よし今日までの經歷は。遙に彼國に立優りて。若實穩當にてありければとて。行末如何樣に成行くやらん。憂へてもまた憂へざる可けんや。警めてもまた警むべきなり。されば小黨派の樹立するも。輿論の浮佻にして賴みがたきも。蓋し進化の理のしからしむる所。側目怪訝すべき事にはあらねど。學者博識もて自任せざる身は。これをおもひ。かれを思ひて。扨も感慨のみ生ずる事よと。鼎は肚の裏に默想して。主人の出來るを俟ける程に。やうやく襖戸を引すべらして。咳を只一ツ案内にたてて。今しも入來るは主人なるべし。但見る。年のころは四十あまり。肌の色淺黑く。丈は並人より高かるべし。髮の毛齡には似ず薄き方にて。前はやう〳〵に禿たるやうに見ゆめり。腦蓋高やかに持あがりたれば。頭が割合に大に過ぎて見ゆれど。そはたゞ座に着きてありけん折のみ。起ちてはなか〳〵に其特質が威儀を添ふるやうに見られにたり。眉は髮の如く薄き方なれど。さすがに優良雄の眉とこそ見ゆれ。眼は幾前歟凹みたるやうにて。常は鋭しとも

見受られねど。キと打目護るときは不可言の意味あり。緊結たる口と高き鼻には。さしたる魔力ありと見受られねど。此怪しげなる眼光にこそ。人望收攬の力はありけめ。額際の小々波立たると。兩頰のやゝ嶮岨なるとは。多年憂國の結果とや見るべき。將た競爭場の艱難をや寫せる。越後縮の夏襦袢に。白麻の襟かけさせて。細かき鼠地の單衣を被たる。離れて瞥一瞥れば縮地に似たれど。まことはお召といふ織物にぞありける。わざと羽織さへに着せずして。左手の掌底に二寸程の「パイプ」(西洋の卷煙草の煙管)を藏して。儀式めきし容體もなう。ツと此席に入來れば。清見は急がはしく書かけたる。手紙と硯箱を彼方へ押遣り。椅子をも搔退けて一二歩退き。脚を眞直に突立たるまゝ。恰も「正角」に體を曲めて。「日本定式」の會釋をなしたり。主人も「定式」の禮を返して。やがて田所の方を見やれば。清見は莞爾に打笑みつゝ。

(清)兼てお話しを申しおきました。田所鼎さんで。

田所は之と同時に。頗るうや〳〵しく頭を下げ。

(田)はじめまして。私は田所鼎。

(主人)兼てお名前は……よくこそ。

鼎は肚の裏に「定めし氣味のわるきあの眼をもて。キと我面を打まもるべし。」ト斯う思ひつゝ

頭をあぐれば。主人は融々たる顏色にて。絶えて其樣なる氣色もなく。直に傍の椅子に懸りて。おのが懷より煙草袋をいだして。しづかに「シガレツト」を製しながら。

（主人）田所さんは。たしか英國へお出なされたとか聞ましたが……

トこれを物語の序開きにして。最初は地理上の話を主として。龍勳の繁昌。「ヲツクスフホウド」の大學。其他風俗と人情とに關して三四度應答を終りし後。たちまち地理話の因によりて。磯部の溫泉の話に轉じつ。いづれも簡單なる問の形にて。清見と兩三回應答せし頃。恰も襖戸を引走らして。以前の少年が入來りぬ。やがて膝まづきて兩手をつき。

（書生）宜しうございます。

主人は顧みて頷きたるのみ。書生はまた彼方へ退りいでぬ。主人は改めて此方に向ひ。「恰も其知交某等が今しも來會してある事なれば萬一同席を厭はれずば。ト一應兩人に問ひたる上。

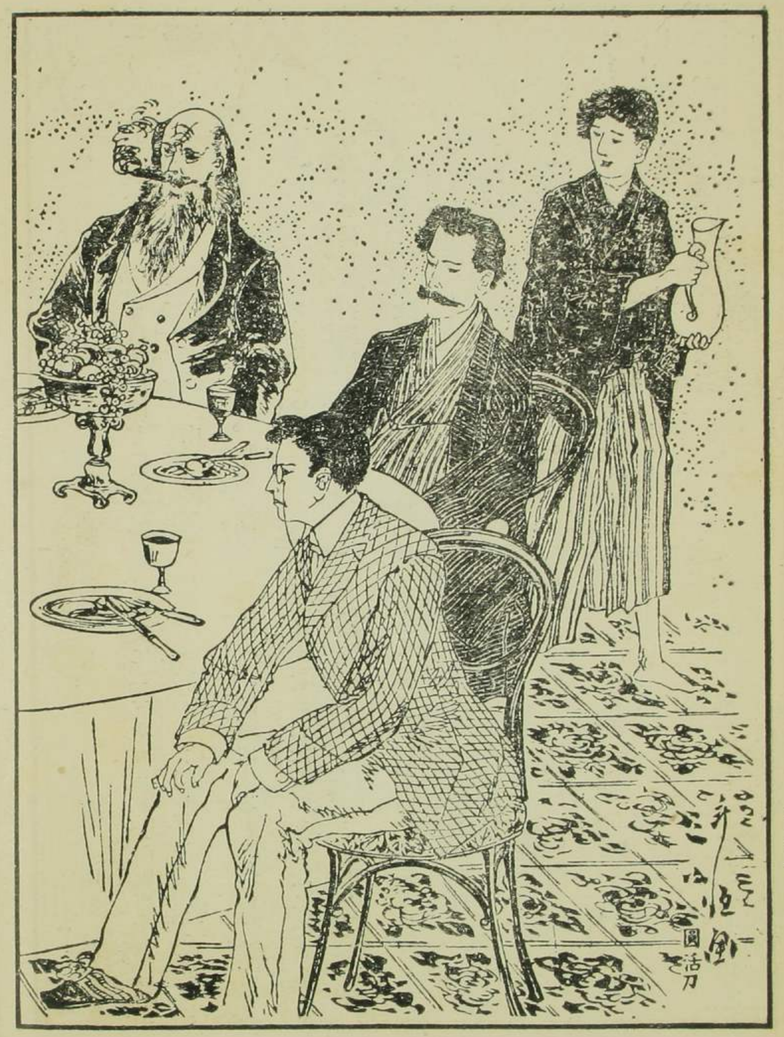
（主人）それでは。どうかあちらへ。

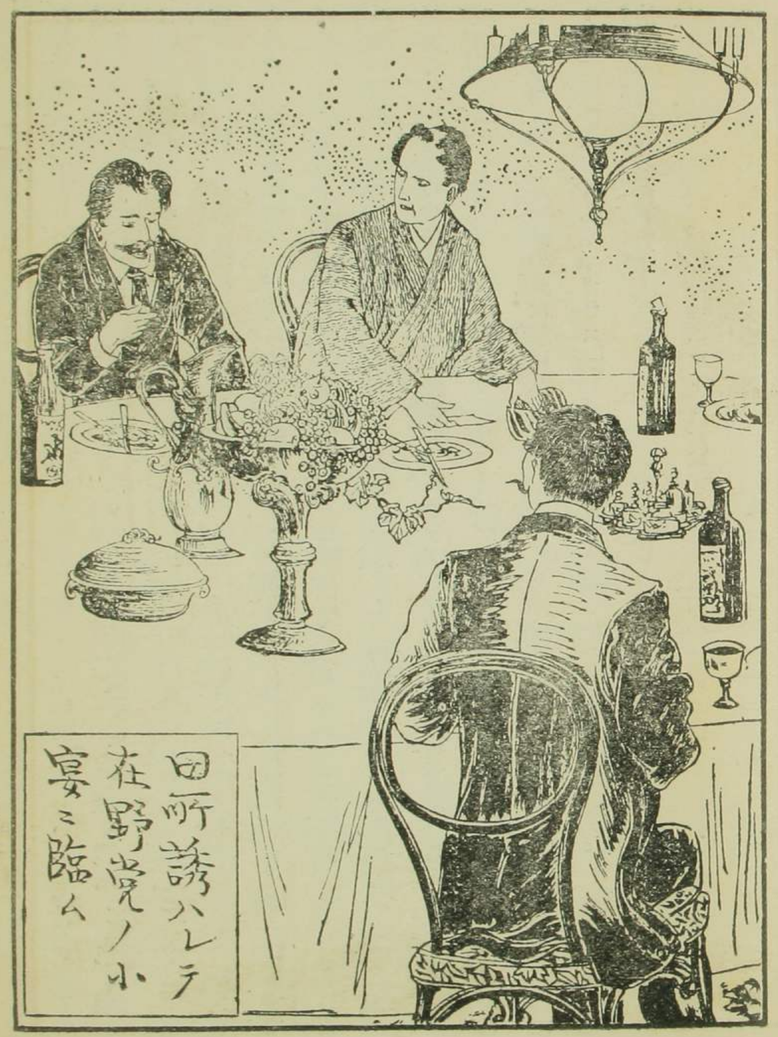
清見は田所を一寸見返り。共に無言にて頭をさげたり。主人が先にたちて立出れば。清見は田所に一寸會釋し。いざとて諸共に隨ひてぞゆく。

金龍山の鐘の聲。橋場の水に音信れて。又ひとしきり降る雨に。四下やう〳〵に昏うなりゆく。

聞もしらぬ陶器の燭臺にともし連ぬる西洋蠟は。燦然滿堂に光を放ちて。夜會の興情を幇け貌なり。こゝは醵遊の間にとてや建たる。同じく折衷の建築ながらに。床には御國風の疊を用ひず。總てうるはしき敷物をば見る目眩むほどに敷詰たり。中央に「マホガニイ」の食卓を設けて主客團欒して會食すなる。內外の美酒。山海の珍羞。ところせきまでに持出て。書生二人三人。かはる〴〵賓主の間にたちて周旋すめり。田所は清見と共に已に團欒に入るものから。流石に初對面の身にしあれば。わづかに列席の諸賓に對して定規の挨拶をなしたるのみ。はじめは語らふべき機會もなければ。清見と打對ひて着席せしまゝ。他人の談話をのみ打聞てをり。列席の客人たちは。都合我を籠めて五人なり。いづれも老成の紳士なりと見ゆれど。いまだ知交したる事なき人のみ。されども其中の年やゝ若きは。兼て一兩度見受たる事あり。大杜勉とやらん呼ばるゝ者なり。他の二人は何人にてあらん。いづれ此黨の黨員ぞと思へど。面を曾て前にみたる事のなければ。始めは其姓氏をわきまへかねしが。談話がやう〳〵に熟するに及びて。互に其名前を呼びかはすを聞て。一個は有名なる新聞記者。御酒本なにがしといふ者にて。一個は同黨の老雄と聞えし。佐伯なにがしといふ者ぞと知りぬ。

酒已に兩三行。談話やう〳〵に佳境に入りぬ。人々おのがじし興に乘じて千變萬化して相語らふ





田所誘ハレテ在野党ノ小宴ニ臨ム

なる。鼎は先刻より心を注ぎて。諸賓の相語らふ所を聽くに。話柄は俗にいふ「ゴツシツプ」に類していづれも益もなき贅口に似たれど。たゞ面白きは件の談話に。自然と人々の氣性も現はれ。日頃の振舞も知らるゝ事なり。殊に目ざましきは主人の上なり。客人五人の敵手となりて。右に當り。左に當り。或は嚴格に。或は氣輕に。或は風流に。或は武骨に。一上一下虛々實々。さしもつとめたる樣子も見せずて。巧に物語の調子を整へ。鼎其人のしまりよき口をも。時々開かずて叶はぬやうにす。さりとて意を迎ふる氣色をだも見せねば。主人はあくまで威嚴づきて。まことに政黨の領袖となりて。議論を左右すべき人柄とぞ思はる。斯樣に打とけたる長話の間に。毫も其氣質の如何を知らせず。いとよく韜晦して喜憂を示さず。さながら世を避たる人の如くに。全く政治界の風波を忘れて。變幻窮りなうもてなしたる。現にや此人の黨長たるは。蓋し偶然にあらざるならん。と鼎は肚の裏に歎稱して。漸く飲干したる玻璃の酒盃を。依然口の端に押あてたるまゝ。窃に見ぬ振して「ガラス」を透して。暫らく他の面を打まもりてをり。

清見は前面なる洋酒の罎を。みづから引寄せて栓をとりて。ちよと鼻先もて內部を親ひ。やがて元の如く栓をなして。件の「ボツトル」は元の所へ復しつ。更に彼方にある罎を引寄せ。再び前の如く吟味せしが。此度は其心に適ひたりと覺しく「コツプ」へなみ〳〵と注たゝへて。やがて

心地よげに飲さしつゝ。

（清見）時に佐伯さん。今度の千歲座はどうですネ。

佐伯は半白の髯をなでて。

（佐）ハア。能うごすな。殊に何がよいテ。ソレ直彌が營中で議論をする所が。何にしろ作者が作者ぢやから。議論が堂々と出來ちよるから。我輩などが見ても面白いぢや。たゞ氣に入らんはあの「チヨボ」ぢやテ。肚で思案をする所なぞは。悉皆淨瑠理でいはしてしまウが。アリヤアどうも謊らしうていかん。折角夢幻境に入つた所を。あれが加はるので面白みを破るテ。

御酒本はしやもの脚を。頻に「ナイフ」にて解剖してありしが。「ナイフ」が鈍きにや手が鈍きにや。兎角に肉と骨と密着して離れず。容易に舌頭に上るべうもあらねば。寧ろ割愛して之を打棄て。豕の鹽肉を食ふべきか。されども豕はもと攝生に害あり。否。豕の肉に毒あるにあらねど。兎角に豕の肉は腐敗し易し。故に豕の肉は害ありとぞいふなる。然らば豕の肉が有害なるにあらで。豕の「ある」種類。卽ち腐肉が有害なるなり。而して此肉は新しき肉なり。故に此肉は無害なる者なり。故に食へばとて攝生に害なし。故に食ふべしと。肉叉を用ひて。鹽豕一片を口に投じて。恰も細嚼の最中なりしが。今しも演劇の談話を聽きつゝ。忽地嘴をさしはさみて。

(御酒本)デスが佐伯さん。あなたの御高説のやうにしちやア。何だか解らなくなりませうぜ。西洋の演劇だつて。エーと矢張 aside (傍言) といふ者があつて。傍には聞えない積で俳優が高聲に肚の裏を現在人の前で申しますぜ。

(佐)サ、あれが。矢張あれが不可。西洋の演劇が矢張不可ぢや。どうも何ぢや。まだ〳〵演劇は進歩せぬナ。我輩の考では最少文運が盛んになりよつたら。劇も今一段改良して。あないな現實に違うた事は。段々消滅する譯ぢやらうが。

(御酒本)イエナニ。進歩せぬ故ではなくツて。進歩せるが故に aside ができたのですテ。現に「ギリシヤ」の昔の時代に。日本の「チヨボ」に似た者があつて。……

(大杜)成程さうですネ。chorus (齊唱) といふ者は。マア〳〵我國の「チヨボ」でせうな。

(御酒本)マアさうですネ。處が中世後にあれが廢んで。多くは aside を用ひますが。蓋し何でせう。兎ても「思ひ入れ」計りぢやア。十分肚の中を見せられませんから。……

(清見)いかさま「チヨボ」だけは爲方がありますまい。ガ何ですネ。あの花道で。あそこで跳るのは廢たいもんですネ。どうも頭の上で。……鼻ツ先で跳られるのは。實に辟易の次第ですテ。我輩なんぞは。西の桟敷で見ましたがネ。イヤどうも花道傍の見物が氣の毒で。……

(御酒本)そりやア。あなたが西の桟敷に居たからです。東で御覽なさりやア。そんな感覺は起りませんぜ。花道傍の見物にいはせりやア。貴君を氣の毒だといつたでせう。ハ、ハ。〇エ。背部ばかり御覽なさるからさ。

(清見)ハ、ハ、。イヤ然でないテ。現に鼻ツ先で跳られるは。誰でも厭ふといふ其證據は。舞臺に接近した「桝」へは。第一第二などの桝へは。現に這入事を嫌ふ者が多い。

(御酒本)サア。ありやア仰むいて見ねばならないので。十分見られないのみでなく。首が痛くなるを厭ふからです。鼻ツ先で跳られるのを嫌ふのではなくて。十分見られないを厭ふ故です。

(大杜)又一ツは所謂「アラ」が見えるのを厭ふのでせうテ。

(御酒本) Tragedy (かなしい演劇) を見て。泣くのも厭はんといふ位ですから。興味を損害せぬ限の事は。飽くまで苦痛をも忍ぶんですが。只十分に見られないといふ事と。空しく俳優の「アラ」が見えて。興味が so much (それだけ) 減るといふ事と。此二ツの理由があつて。其故接近して見るのを厭ふので。……

(清見)さういやア角觝なんざア。別に「アラ」の見える譯でもないから。ズツと土俵際へ……ハ、、然しこりやア違ウな。こりやア美術でないから。砂塵頂戴では恐れ入る歟。ハ、ハ、。

（佐伯）清見さん「自家撲滅」ぢやな。ハヽハヽ。

主人は先刻より演劇の話を例の卷煙草を製しながら。頻に打笑みて聞てありしが。

（主人）清見さんは肥滿の方だから。定めし相撲は強からうネ。

（清見）イヤ。五六年以前までは。隨分腕力がありましたが。モウ薩張いけません。

（主人）ヲヽ。近頃幕の内へあがつた。轟とかいふ力士は。たしか……○田所さん。貴君の國の者で。……

田所は頭をもて。一寸會釋めきし儀式を行ひ。

（田）ハイ。幼年から大阪へ參りまして。其後洋行を致しましたから。極めて角觝などは昏うございますが。たしか其樣に。……

田所の愛想なき返辭に主人の愛想も無になりしかど。さすがに平氣なる顏色にて。

（主人）ハヽア。あれは中々よい力士だテ。

（大杜）わたくしは最も角觝を好みますが。角觝を好むと申すよりは。寧ろ力士を好むといふ變り物ですが。なんですネ。響山は。近頃段々によくなりましたネ。

（佐伯）だがあれは卑怯で不可テ。兎角陰險な手を用ひてな。まるで支那人の啓法のやうでな。

先達ての本場所なだもさうぢや。敵を正面から襲はんで。裏から攻るやうな事をしよつて。

……

（御酒本）ヲヽ支那人と申せば。綜理はお聞になりましたか。阿片一件を。……

（主人）あれはどうも事實のやうだネ。新聞にはまだ書んネ。

（御酒本）少々劍呑ですから。ハヽハ。

（佐伯）實に困るテ。支那人の弊習は……。第一德義上に影響するから。○職工社會なぞは此六七年以來。ズツト moral standard（德義の標準）が下ツたやうぢや。

（御酒本）イヤ實に甚しい事です。早晩放逐論を……米國の二の舞を。是非やらなけりやア不可すまいヨ。內、德義を殘ひ。外、經濟を害しますから。

（佐伯）イヤどうも支那人は五月蠅奴ぢや。まるで夏の衣の「のみ」と蚊ぢや。內と外から攻めよつて。ぼんやりと眠むツちよる日本の膏血を喰ひをるから。ハツハ。

（皆々）ハヽハヽハヽ。

第十一回

狡兒の佞辯淫美をおとしいれんとす

浮世の人柄を大別せば。多忙き人と怠惰たる人と。この二種に別ち得べし。とは例の洒落なる翁の名言「アヂソン」。げにやいろ〳〵に職業は異はれど。人の性質はさま〴〵なれども。孰れか此範圍の外に出づべき。上は王侯の尊きより下は農樵の賤しきまで。件の大別には洩れじとぞ思ふ。さすがは雜誌氏の通り拔た言葉。輕ういうただけに面白うこそ覺ゆれ。但し何者が世の中にて最も多忙しき人物なるかは。翁もいはずして殘されしが。思ふに今の世を目安にしていはば少々手前味噌のやうにはあれど。世間に小說家といふ者ほど。多忙で氣の揉める者はあらじ。夫小說家の本分といつば。天下の眞象と眞理を探りてこれを活たやうに描くにあるゆゑ。チョツと散策と出かけたる折だに。なか〳〵油斷をして居るべうもあらず。目にぶらさがる物。耳につツかゝる物。乃至は鼻の先にぶツつかる物は。悉皆「素通りはなりません」ト矢場女もどきに押へとむるか。若くは春藤の玄蕃を氣取て。仔細に點檢して材料にせでは叶はず。芝居を見ればとても花を觀れ

ばとても。憫然や小說家と生れたる者は。ろく〳〵樂に耽ることも出來ねば。夢中になるなんどは毛もない事。終始自鳴鐘の釣玉のやうに瞳を働かして居ねばならず。嬉しや辛こさ原稿ができた。ト捻髮微笑して唾壺ポーン。火鉢のかたはらへ結跏趺坐し。「何や例の通り賴み升とは。三馬。一九派の贅澤ならむか。其さへ細君は苦い貌にて。恰ど仕立物に掛ツたとこだに。ヱヽモウ時ならぬお酬三昧。もすこし後にして。ト云たからうが。其處は男尊の難有き國風。「ハイーと氣の拔た返辭をして。ノロ〳〵立上る細君の姿。あの面。あの口附。あの物ごし。共に材料に至妙なるかな。種の質乏のときは是非に及ばぬ。友喰ひ結構とみづから許して。果は自身をさへ喰物にすなる。されども聖賢の樂みにはあらねど。樂おのづから其中にありて。喜怒哀樂愛惡を選ばず。いつでも結局は樂とはなるなり。蓋し萬般の事々物々を。おのれが材料と思ひて見るゆゑ。苦楚沈痛なる出來事に出あふも。慷慨悲憤すべき境界に沈むも。尋常一般の人々の如く。さまでに取亂して歎くことはなし。關雎の懿德あるにしもあらねど。之も經驗ぞと思ふ心が。內々肚の裏に潛みてあるゆゑ。自然と哀みても傷ることなく。又は樂んでは婬せざるなるべし。皇國の小說家は僞物が多くて。所謂道樂家の化物なるゆゑ。件の論理の實例にもならねど。西の稗史家には其例夥多なり。「スコツト」翁の老實は我々稗史家の本尊とや稱へん。未來に小說家とならむ

ずる人は。宜しく景崇して學ぶ可なり。されば艶話を綴る小説家を見て必ず好男子である可と思ふは。最も誤謬の甚しきもの也。おのれ其人が溺るゝやうでは。爭か他人の溺れたるを寫さん。虚心平氣にして摸寫してこそ。天下の眞理をしも描くべけれど。迷うた心をもて觀察三昧。到底覺束なき限になん。されば小説家とならむとするには。元來人情が厚からねば叶はず。さりとて情の爲に溺れても叶はず。將又達摩大師其人の如くに。あんまり悟り過ぎて冷淡でもいかねば。譬へば中世の洒落物と聞えし。例の紫野の一休を氣取て。紅塵滿眼の眞中にたちて。澄さず溺れずしてかゆきかゝゆき。隨分勉强して觀察を旨とし。暗に哲學者の片腕となりて。眞理を拾ひだすが本分ぞかし。稗官は感覺の力をもて。妙に「トルース」(眞理)を發見すとは。魯の美學家の名言なり。小説にして大に進まむ歟。彼の智力をもて眞理を究むる。哲學其物の材料をさへに。大いに增す所あるべしと思はる。沙翁のものしたりし傳奇中の人物が。今しも心理學の材料となりて。屢論評の種ともなり。性理研究の便宜ともなる。是豈此道理の適例にはあらずや。これらの理由を辨ふれば。さらでも多忙しき小説作者は。尙更其負擔が重やかになりて。五官の安息する閑暇なきをなげかん。斯までに面倒なる五月蠅き事業は。誰しも厭ふべしと思ふに似ず。小説稗官といふ者をば。痛う容易なりと思ひ做してや。將た面白しと勘たがへて歟。たえて望の

なき腕前にて。フラ〳〵稗史壇に登るも間々あり。藝娼妓を羨む素人の乙女。幇間を眞似たがる野良息子と共に。これらは一束にして燃してしまひたし。小説の汚れむ歟と恐るゝが爲なり。年少を誤るを患ふるが爲なり。

○忽焉として降出たる夕立は。倏忽ふりやみて道芝もかわき。雨滴やう〳〵にたツとさうになりて。今は一滴づゝ梢より落來る。新橋をさして走りゆく蒸氣車は。已に程遥になりにたるが。煙は風の爲に吹斷たれて。逆に此方へと走り戻るやうなり。時しも雷神は巽にありて「ゴロ〳〵ゴロ〳〵〳〵。ザツと一雨は落してやつたが今日はこの位で廢止にしておかうか。ゴロ〳〵。まてヨ西の方が乾いでゐるやうぢや。序ぢや辛度ながら廻ツて來ようか。ゴロ〳〵ゴーロ〳〵。雲どもはゐるか。はや參れ。トさながら人ならばいひさうなる鳴かた。西へとだん〳〵に廻ツてゆく。同時に今がたまで東の方に。ぼんやり居殘ツた斷雲が。たちまち活たやうに動きだして。蒸氣の黑煙と走り競して。急いで雷公のあとをば追ふ。又もや一しきり降りはせぬか。寧此間にと停車場をかけいで。家路へ走りゆく市人もあれば。今こそ此湯卷の品のよいのが。なんと皆人にしれるであらう。ト流石に自慢さうに裳裙をかゝげて。處々の水溜を縫ふやうに飛び越え。急いで海岸の方へ向ふは綿羊兼帶の絃妓とぞ見えたる。今を名殘貌になきたつる蜩。いざや退らむとて

友呼かはす烏。いづれいそがしさにおろかはあらねど。わけていそがしきは氣を紅葉坂を。今しものぼりゆく男にぞありける。其人の打扮は寫しいだすまでもなし。眼にパチ〳〵の癖ありといはば。讀者はたちまちに悟り知りて。さあらば打扮は斯樣〻〳〵。斯して斯〻〳〵した風體ならむと。みづから肚の中に描きたまふべし。但し何故に忙がしげなるやは。作者も只今までしらぬ位なれば。讀者は尙もつてしりたまふまじ。試に孫悟空の奇術にならひて。彼が腦のなかへソツとたちいり。一〻〳〵其仔細を探りきはめて。これをあからさまに聞えまつらん。

我主人公の隨一たる件の面白き奇人は。心にいろ〳〵の想像浮びて。此を思ふかと思へば彼を思ひ。愁ふるかと思へばたちまち喜び。氣遣ふかと思へばたちまち忘れ。恰も噴水器の水のやうに。百感かはる〴〵噴出すれども。たえてそれが爲に屈託して。眞に焦心する有樣は見えず。思ふに尋常の喜怒哀樂は。曾て此人の感情をして。結束せしむるに足らざるならん。されども斯のごとく變化するがなかに。常より一度宛打笑むを見れば。概して愉快なる人と見えたり。其何故に愉快なるやは。下條を讀てゆかばおのづからしらるべし。序に忘れずしていひ置くべき事あり。他なし。此人の感情は。さやうに窮りなう變化すれども。前の莞爾と相伴ひて。毎に離れざる一箇の物あり。申すはなか〳〵に野暮かもしれねど。例の……ソラ「パチ〳〵」なり。

(菱野)定めし田所が。イヤ田所よりか。定めしあの母子が待てゐるであらう。きのふ花咲町を尋ねた處が。「大方明日は着港するであらう。過日の「マルセイユ」からの電報によれば。是非とも今日が着なれども。」ト斯樣にいつたから逗留をして。渥美にあつた上で歸る積だ。ト端書をチヨツと書いて出せば宜かツた。○あゝあの母子も可憐的なもんだ。當人がしらないでゐるのに。斯だとしらせるのも氣の毒だ。ト昨日田所が歎息していつたが。如何さまあのおみやは「ビゲー」とやらの爲に……「メスメリズム」(魔醉術)で……いかさま然かもしれない。ウム。さうに……相違ない。惡むべきは其佛人だ。かやうな刑法の罪人を……我人民を凌辱した奴を。……默して打擲ツておく譯がない。いつそ此事を母子に話して……將來の爲だ。日本國の國權にかゝはる事だ。……おれが尻押をして訴へ……て……イヤ證據が……ない。實に口惜……殘念な……譯……だ……が……譬へば歴とした證據があつても。兎角に外人が對敵であツては。例の……治外法權といふ奴が……アゝ今にして除かないでは……田所の說ぢやアないが。如何さま外人の邸宅へは。自然に取調が行屆かないから。博徒や破落戸や盜賊の類が。或は潛伏して居るかもしれんテ。先日の支那人〳〵の撲賊の如きは……アゝあの時器は惜しい事をした。あれは「ニウヨウク」の製造で。五十五圓。イヤ五十圓にまけさせて買ッたンだが

……機械もよし金の質もよし。ア、惜しい事をした。ツィ番號を忘れたから。シカシ蓋の裏に特別の摺疵があるから……或は回復の望が……イヤ〳〵覺束ない話だ。ア、惜しい事を爲……ガ。何だ。世間はこれだから面白いテ。いろ〳〵に變化るから面白いテ。あの時器を盜んだ奴が……調がきびしいから容易には賣らん。定めし今頃は持あまして。居……ソコダテ其肚の中が……其肚が見物だ。……コウト時器を「ツブシ」にして賣拂ッちやア價が三分一も減ッてしまウ譯だ。マヽヨ發露れたら其時として。一歟撥歟七ッ屋へやらうか。イヽヤ不正品買へ叩き賣らうか。しかし此節ア其筋が嚴しくッて。犬が鷹の眼でかぎまはッてゐるから……犬……犬といやア渥美の犬は……「ペロ」……ありやアなか〳〵材料になる犬だ。なか〳〵彼犬は in elligent（怜悧）だ。日本の小說家は人計を寫して。劣等動物を寫さんが……馬琴の八房……ありやア變生畜類といふべきものだ。所謂怨念の人となりたる物……あれぢやア物をいはぬ人間で面白くない。佛の Duma のかいた Mohicans の犬も奇に過るが。マア〳〵あれならば犬のやうだ。……コウツト犬の性質は……全體犬猫は感覺ばかり歟。別に智力めく者を持つてゐるかナ。Dog never thinks.（犬は曾ッて考へず。）まさか思考力は持ッてゐないやうだが。所謂 intuition（直覺の力）があるかナ。經驗が積んで智の如き者を……竟にこしら

へだす道理があるかナ。例の手紙なんさ……どうしてあの犬めがくはへて來たか。それも一方なら何の氣なしに。くはへて來るといふ事もあらうが。別途にさしだすべき二種の手紙を。一所にひッくはへて……渥美に關係の厚い家へ……宛然災厄を報知貌に。……ああして持ッて來た所を見ると……犬にも。フーム了見がある譯かナ。ズット慧敏な犬になると。恩義の何たるを解すると同時に。人語も人情も……アヽ人情は不思議イヤ不思議でない。實に原因と結果の理は。イヤ實に爭はれないもんだ。あのおみやが……たしかに渥美に……それも道理至極だ。危急の難澁を助けられたのみか。何も好男といふでもないが。渥美も苦味のある薩張とした……こゝがソレ人情だテ。人にやアこの祕密が見えなからうが。そこは人情に通じてゐる。ヘヽン。おれにやア一目して明瞭に見えるテ。渥美の爲人を贊稱てやるトすぐに何處となく眼の中の色が。たちまち變るから不思議なもんだ。あの眼の色の變る臨梅を。ハテナ。名狀して何といはうか。實にあの娘の價は……實に眼が千兩だテ。それに性質が溫厚で……頗る「レディ」の風采があるが……どうも何だな。例の赤髮の一件があつちやア。まさかに……渥美も大方は悟ッてゐようから。兎でも細君にやアする氣はなからう。實に可憫的なもんだ。あゝ氣の毒な事た。あれが人情の自然ではあらうと。渥美の身の上の一大事だと聞いて。口には云々と打出

してはいはんが。非常に心勞して心配する樣子が……あゝ兎角世の中は tragical（慘楚勝）なものだ……ガ。これで面白いテ。こゝがサ我筆に寫すべきとこだテ。……あゝ陰氣な鐘の音だなア。「祇園精舍の鐘の音は諸行無常を」シカシ習慣といふは。イヤ連感（association）といふものは面白い譯のもんだ。ボーンで何となく變な氣に……。○ヤイ如何しやがるンだ。糞ッ。非道い事をしやアがる。人を突倒して行やアが……。○アゝ危險だッた。まだしも突飛して呉たのが難有いか……あの馬車でやられてたまるもんか。晏子の御……。はゝゝ。あの威張るさまが……コウト第五回の官員の容體を……スツカリあの容子で寫してやらう歟。あの容子といやア。今の馬車の中の紳士は頗る田所に髣髴……アゝ田所も才子ではあるが。不可。一體が學者風だから。兎ても政治家にやア不向な方だ。あんまり理論ばかり講じ過るから。實地の進退が緩漫で不可。口でいふ所を聞てゐるトいかさま經國の傑士のやうだが。モチット思ひきつて行る氣がなくッちやア。到底顧問官相當だな。どうも advicer（助言者）の資格だ。淮陰侯も不向だし。高祖にはいよ〳〵不適。蕭何の役廻りはどうであらうか。イヤちつと才が利すぎてゐるのに。兎角高慢氣が鼻の先にぶらついて。それも肚からの高慢でなくて所謂 physical disadvantage（容貌上の損な性質）で……あれぢやア德望が得られないから。到底大臣にやア……シカシ物事と品に因ッちやア。おれより觀察が……眼が鋭いから驚くテ。あの sense（活眼）だけは貰ひたいものだ。蓋し神經の過敏な方だ。神經の過敏な者に限ッて兎角大事業は……渥美が一寸見はぼんやりとしてるが。却ッてああいふのが大功を成すテ。小事に心目を注がぬが故に。萬事思ひ切ッて豪放に出掛る。豪放にやるから一六勝負で大に奏功する事も有のだ。所謂膽汁質の人間が。第一忍耐の力が強い。其も其筈か。些少の疼痛には氣をとめないで平生遠大の快樂を……。○何處だ。さう〳〵しい「ビヤノ」の音がする。あれも快樂の一種だ……。近頃は西洋主義が盛つてきたから。全然三絃が衰廢ッたやうだが。蓋し歎息に堪ない譯だ。西洋の樂器なぞに比べると。三絃の方がグット洒落てる。第一 mechanical aid（機制的の助力）が尠い……。重に指先の働に因りて。巧に音を出すのは嬉しい譯だ。美術の本願に適ッてゐる。駁雜込入ッた機械のお庇で。それで色々の音を出すのなら。おれも Mozart もおなじこッた。三絃を鄭聲だといふなア。習慣と連感をしらぬ奴のいふ事。連感の種さへ除却して仕舞へば。けつして不都合はない譯だ。あゝ兎に角に世間の奴等は美術の神髓を了解しないで。而して干渉を試みるから……美術が。東洋の美術が……あゝ衰……歎かはしい事た……何故。三絃は鄭聲だ。馬鹿な話だ。三絃を野鄙な聲だといふなア。白衣を見て忌はしいと

いふやうなもんだ。○ヲヤ〳〵大層來過ぎたやうだ。たしか此邊であつたと思ふが。

菱野はたちどまりて彼方此方見回し。およそ半町ほどあゆみ戻りて。トある煉瓦石の商館の前にて。覺えず五ツ六ツ目ばたきなし。

（菱）こゝだ。

「こゝだ」と小説家が認めたる商家は。近頃建做したる物ぞと覺しく。間口奥行とも合壁より廣く。近所に稀なるべき三階煉瓦なり。專ら西洋酒を販ふと思しく。肆の入口より奥の方まで。悉皆洋罎にて埋もれたり。やう〳〵に四下昏うなれば。「ランプ」に點火せんず準備と見えて。黑人日本人うちまじりて。今しも釣「ランプ」を取下すさまなり。總じて「ガラス」物の多き所は。自然に反射力に富たる故。燦然爛然と相映じて。突然外よりして入りたる折には。急に物象をみとむるに難く。「コウ店番何處にゐやる。」と一寸尋ねたき程にてあるを。今しも黄昏の時刻となりて。外面はやう〳〵に黑うなりしに。パツト家のうちは明るうなりて。菱野の並はづれし大きな眼を射りぬ。菱野は覺えずも後退りして。ギツクリパチ〳〵を例の如くキメて。團州氣取にて肆の中を見込めば。いづれも釣「ランプ」の一件にて。正に立上りてゐたりしかば。面は大方は隱れて見えず。黑人の墨の如き足。ニヨツキリ鼻の先に突立たり。細袴は節限にて短ければ脚だけ

いちじるしく見え渡るを。「ハテナ面白き形の瓶かな。これも材料だ。」トハ熱心の失策。まことに熱心はたふとけれど。あまりに熱心に過るときには。圖らぬ笑柄を釀すこともあり。件の面白き形の瓶が突然動きだして踏臺より飛下り「Com-in sir.（被爲入）」をいうた時の菱野の驚愕。思ひやるさへに腹筋ぞかし。

以上は劇場道の言葉にていはば。すべて「花道」より「格子」までの現象。二重と別家臺のありさまの如きは。絶て說田さで殘しにたり。讀者は今よりして眼を轉じて件の商館の階段を登りて。二階の奥の間を見やりたまふべし。

但見る玻璃窓殘りなう開きて。浮織の源暖廉翩翻夕風に飜りて。秋ならぬ秋をしらせ貌なり。

奚は此家の主人の居間にや。書架あり文机あり。白き麻布もて打掩ひたる。臥床を片隅に邪魔物にして。主人は腕掛の椅子に掛り。年比三十程と思はれたる一箇の日本人と物語らひて居り。主人は窓の方を背にしたれば。如何なる容貌にて若きか老たるか。之を今たゞちに說のぶるに由なし。たゞし其聲音と身の動作は。若くも三十以上二三にやならん。時々喫かけたる刻煙草を。前なる圓卓子の上にのせて。只と日本人の方を見やりて。さながらおのが髯を引拔さうに。指に力入れて幾度も捻りぬ。此人を誰とかなす渥美の主人たる「ジヤツク、シユラー」なり。

日本人の面は恰もきらびやかに作做したる「ラムプ」の光線の彼方にあれば。眉の端にある痘痕だに。いとけちえんに見られにたり。色は淺黑きやうには見ゆれど多分日にやけたる結果なりと思はれ。時々手眞似をして物語る時に。チラ〳〵白き肌を見する事あり。髮の毛眉と共に濃くしてうるはし。但し折々に皺めぬる眉根に。人を慄とさする力あるのみか眼は鋭くして鳶の者の如く。一癖あるべうぞ見らるれども。さりとて愛敬のなきにしもあらず。物をいひかけて打笑みたる折には。さすがに眼のうちが溫柔にぞ見らるゝ。鼻は天井を詠め貌なれど。全く鼻筋の通らぬにてはなし。丈はたかく肥肉なれば。洋服思ひの外身に適ひて目安し。髯をそり拂はで。殘したらんには。大に過る口元の藏れつべきに。態と靑々と痕を見せたる。これらは當人に聞たゞして見なば。あるひは腹筋なる理由もあるべし。右手に携へたる錦繪の團扇を。やう〳〵肌涼しうなるにつれて。いつしか指先の翫弄物にして。喋々喃々と說いづるを聞けば。

(日本人)トいふやうな。譯ですから。いつそ穩に兩人とも。お暇を今直におやンなさるが……それもあの女が並の者なら。何も心配にも及びませんが。何分御存知の怜悧ですから。

(シュラー)いかさま。貴樣のいふ所も至理だが。ヨモヤあの渥美に限つて……

(日本人)サアさうお思ひなさるが御汕斷の本です。どうして〳〵。あいつア喰られた奴ぢやア

ありませんぜ。昨日お目にかけた。例の密書で。大概彼奴の腹はわかつてゐますが。お店をあの儘に横領して。自己が物にして踏張らうといふ了見。實に太いぢやアございませんか。勿論お店さへ旦那のお名前になつてゐりやア。何もイザゴザはありませんが。ああいふ太いやつの事ですから。萬一露れた其時になりやア。例の制限の一件で……ネ。あなた。こりやア妾の所有物です。トサ恩も義理も忘れてしまつて。或は申さんともいはれませんぜ。

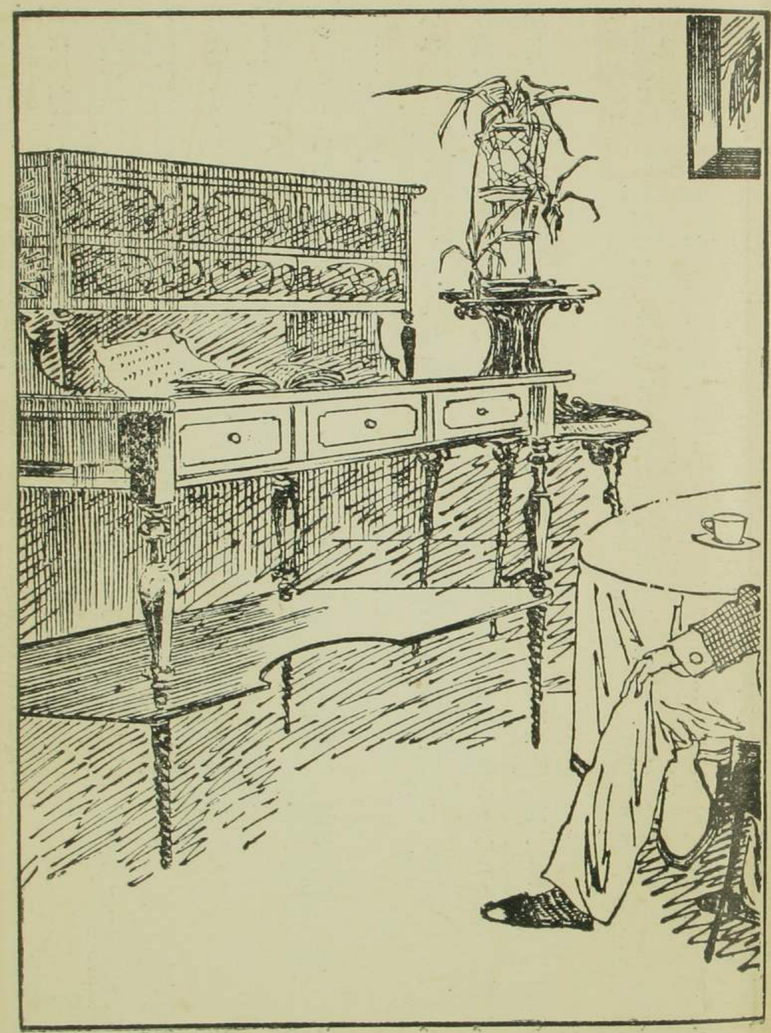
主人は此言葉を聞くとひとしく。忽地いちじるしく感動せしにや。頭を覺えずも振動かして。キツと日本人を打まもりたり。面色例には似ず變りしならめど。前より見るならねば。記載するに由なし。

(シュラー)エ。千本何といふ。例の制限の一件とは。雜居地外云々〳〵の一條をいふのか。

(千本)デス。雜居地外に不動產を所有するの權なき者とす。まさかと私も思ひますが。ああいふ義理をしらん奴輩ですから。

「シュラー」は太き息をつきて。

(シュラー)成程日本人に慣れんからして。おいらア何樣な事があつても。正可に其樣な奸譎な奴は……よもや日本にはと思つてゐたが……



千本は急がはしく押なだめて。

(千本)旦那勿論です。勿論日本に。二個とそんな奴アありませんがネ。旦那の……年來御高恩を受た旦那の……殊に慈悲深い旦那を蔑如し。不義を働かうといふ奴ですから。隨分身が危急となつてくりやア。勿論必ずとはいへませんが。或はやりかねやアしませんと申すので。

主人は無言にて「ラムプ」を睨むやうに詠めてありしが。

(シュラー)いかさま。それこれを考へると。こゝで荒立るは不得策だ。塚には穩に暇を呉れて……渥美も若次第にシカシあの店の名前人が……

トいひかけて暫く言葉もなく。思案に困じたる樣子なるを。千本は見ぬ振しく打見やりながら。内々腹のうちに打笑まるゝをば。毫末も其氣色にはあらはすことなく態ともろともに屈託貌に。しばしは團扇の繪と睨競して。小首をふりかたげて默々でをりしが。軈てたちまちに小聲になりて。

(千本)旦那よい事がございます。これなら大丈夫と申すのがあります。兼々私が懇意にしまする。大家の若旦那がございますが……日本橋の呉服商で……近頃分家をする相談の最中ですが。あれなら善良な大家ですから。たとへば其名前をお借なさッたッて。イヽエどうして決し

て御心配はございません。アヽしかし困ッた事には。只今直といふ譯にも……

態と又ざふらふ屈託して。話を中止して氣を窺ふ。主人は文明の國人なれば。元來慧利なるはいふまでもなけれど。性質溫厚にて善良なるのみか。やう〳〵近き頃我國に渡りて。日本の人情に明るからねば。さすがに狡獪なる千本の言葉を眞實と信用してフハとのせられ。

(シュラー)處が貴樣のいふやうで見れば。早速この事の形をつければ。後で悔むことが出來ようもしれず。渥美は遲くともけふは着かうし……着した上では事がまづし。ハテ如何したものか。

千本は思ふ壺と膝を進めて。

(千本)そこを私も存じますゆゑ。いろ〳〵心痛をいたしまするが。コウト。斯樣に致しませう。支那の格言に申します通り。事は拙速を貴ぶですから。兎に角お塚さん……お塚は今日にも御離緣なされて。同時に高崎のお店の名前は。一時私の名前に致して。早速明日にも。日本橋へ參りて。萬端呉服商へ掛合ひまして……

(洋人)如何さまさうすればそれでよい譯だ。それでは甚だ性急のやうだが。事が事だから猶豫がならん。今から店名前の書替の事を……

（千本）承知いたしました。
折から急がはしく走來る小使。隔の開戸を押開きながら。
（小使）電報がまゐりました。
（千本）ナニ電報だ。どこからだ。
この中立あがりて小使の手より。電報うけとりて主人に渡せば。主人は押ひらきて面色かへ。
（シュラー）ナニ。破船した。印度洋で……

第十二回

どう〳〵と鳴る浪の音には。千尋の底に雷霆轟き。濆淪たる洪濤たちまち合ひたちまち開き。相觸ては駭くごとく。相搏ては怒るがごとく。萬河ひとところに渦卷き跳り。雪山横さまに碎けて飛ぶ。見渡せば蒼々茫々。渺瀰として際涯なく。水は空を溺すがごとく。空は水を洗ふかと疑ふ。只一面の海原に突兀として黑き物は。離れ小島かと思ふに似ず。聳然として潮を吹くは。鯨の孤り出て遊ぶにぞありける。髪の毛かと見る細き筋が。北の地平線に見えつ藏れつ。かすかに波の

間に現るゝは。唯我獨尊のたふとき聖人が。下界に化現ありし本土なりといふなり。遠近を問はず西も東も。陸と名のつく可き處としいへば。件の「セイロン」の島嶼のみ。其餘は遙にして眼も及ばず。彼の杳漠たる大陸は。彼の崖嵬たる山嶽は。彼の蓊鬱たる森林は。彼の莊嚴なる大都會は果して今何處にかある。何處か生る物の住ふ所ぞ。旦には太陽も此波に貌を洗ひ。夕には嫦娥も浴して昇る。乾を包み坤を括る。トむかしの唐人が言ひしも宜なり。嗚呼廓なるかな印度の渡津美。百鬼も其形を藏むといふ。いと長閑なる眞晝の詠も。斯までに恐ろしう物すごきに。況てや夕日影西に沈みて。四面やう〳〵に小昏うなりゆき。此世も盡なんずるやうに覺えて。只さへ心細う思はるゝころ。怪しう黑みたる一團雲が。巽の地平線にのぞきいでたるころ。一葦の蒸氣船に身を託して。萬里の鵬程を渡らんには。其おそろしさ如何ばかりぞや。ましてや初旬の月いつしか傾き。空は黯澹と黑やかになりゆき。星さへ稀々になりたるころ。獨甲板にそゞろあるきし。欄に身を寄せて見渡したらんには。其物すごさ如何ばかりならん。海原こそ宏壯なる物の限なれ。と某が筆にいはせたるもことわり。話に聞てだにおそろしう思ふに。かゝるおそろしき渡津海の中にて。はからずおそろしき暴風にであはば。其おそろしさ何物にか喩へん。扨もおそろしさも物すごさも。上にも上のある世の中なりや。名にしおふ赤道に程近ければ。印度の海原の旅と

しいへば。冬のはじめでさへ堪がたきに。時しも八月の下澣なれば。其あつきことといはむやうもなし。赫々たる日の光は斜に見やりても眠くるめくばかり。たま〳〵そよ〳〵と寄來る風も。うたてや炎だつ竈よりや吹く。なか〳〵に人を蒸殺すやうにて。眞晝は甲板に居るべうもあらで。「甑の中に」といふ譬喩は物かは。氷もたちどころに湯とやならん。ト人々かましう打うめきて。晝は身一ツを置まどひしも。さすがに夕暮となりもてくれば。眼に日の光を見ざるばかりも。誠に莫大なる惠なりとて。やう〳〵甲板に立集ひて。互ひに物語をするなるべし。苦熱に忘れたりし故園の情も。かはらぬ夕月の影を見ては。又もやあやにくに胸に浮びて。空しく磁石盤を取いだして。杳たる海原をそこはかと見やれど。波のみおそろしう高う見えて。我思ふ方を望まむに由なく。密かに打ひそむも多かるべし。「世の中に心のたゆまるゝ者長き航海にまされるはなし。」ト西の博識〔マコーレイ〕のいはれたりしも。其身其ところに臨みてこそしられ。見る物としいへば波なり。聞く物としいへば波の音なり。いかに想像に富たればとて。多くは外よりの刺戟を受て。扨過去未來を想像するに。五官に觸る物が同一にして常に變る事なからんには。詩想に富める人も得堪ふまじう思ふを。ましてや現に見る世界をのみ。唯一の世界なりと思ふ輩が斯樣に同じ物に責られつゝ。いかでか退屈を感ぜざるべき。せめて珍らしき人と語りて。耳だ

に珍らしき事を聞かば。多少慰む由あるべしと思ひて。互ひに求めずして相近づき。又求めずして相語らふも。まことに自然なりといふべきのみ。今しも印度洋を航する船は正しく佛蘭西の汽船にして。乘組の客人も尠からず。日本の長崎へとさして行くなり。各國の人の入雜りたる中には。若きあり。年老たるあり。みめよき貴婦人も乘込たりと見ゆるに。しらず我主公と見做すべきは孰れぞ。嬋妍たる妻つれたるは。よしや落魄たる男爵の人ならぬも。有爲の大丈夫と受見らるゝもあるに。未來の印度知事と見るべきは無きや。岡燒とやらんいふ。卑しき心などは露ばかりもなけれど。兎角につれ〴〵の穿鑿三昧。長き航海の途の程には。扨も色々に用事をこしらへ。自ら氣をいらつが常なるかな。

本文へスチングス氏の古事を引く。未來の印度知事とはヘスチングス氏の事なり。

時しも初旬の月ほのかになりて。いつしか西の波に傾きたり。地平線を離るゝこと。わづかに一段ばかりになんなりにたるが。流石に落んとして落もやらず。ゆりあげゆりおろす高き波は。さながら其面を洗ふやうにて。乙女が夕暮に行水して。貌をほの〴〵と赤うするまゝに。塗たる白粉の脫ゆくが如く。銀のやうなるさやけき光は。一波々々に漲赤うなりゆく。今宵は夕暮より村雲浮びて。常より空の景色曇り勝なれば。星さへ今はしも打そばみて。われらの君としも崇めま

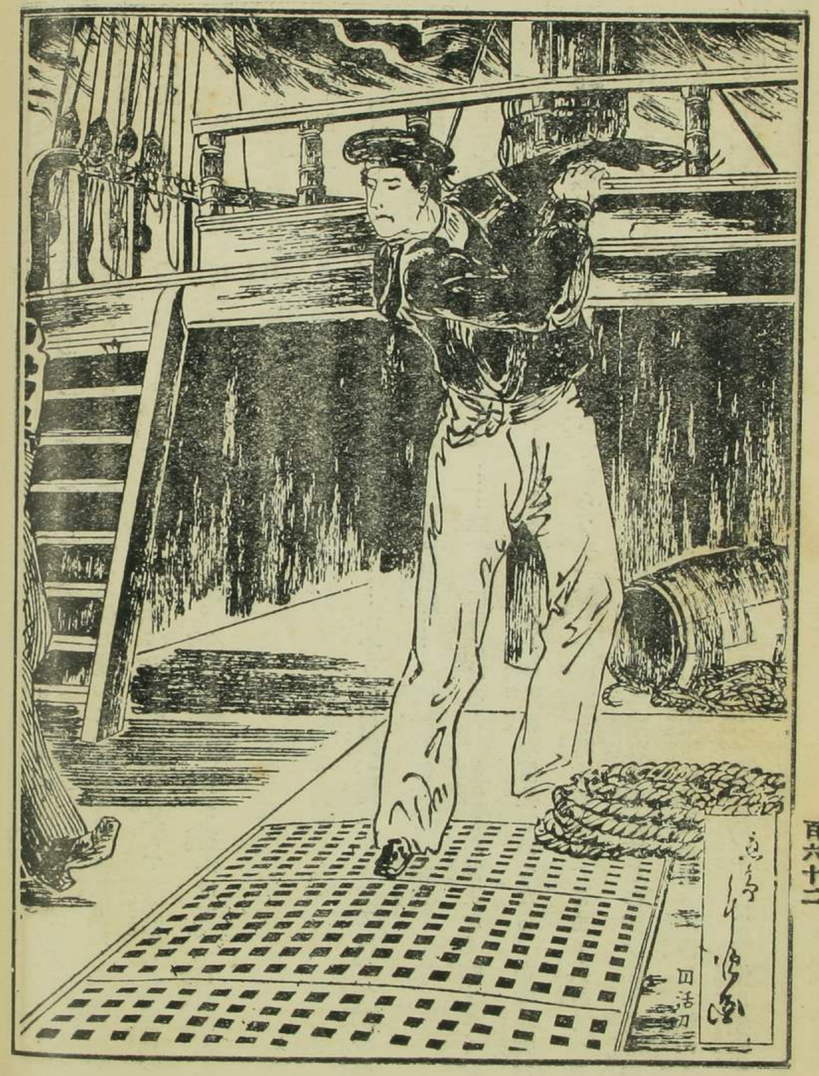
つる嫦娥も已にはやおほとのごもりたまひぬ。我等が居殘りて燦爛きたらばとて。此廣き海の飾としもならじ。宵より光りたれば疲れたるぞや。少しく休むべし。トいひあはせたらんやうに。彼此村雲にむぐりこむぞ多かる。されば殘月のたゞよふ方のみわづかに白やかに明るう見ゆれど。其餘はいづかたも昏みわたりて。只管ドウ〳〵たる濤の音の。一層すさまじう聞ゆるのみ。さすがに風なぎたる深夜のこととて。人も大方は眠に就けん。たそがれの比の閙しかりしには似ず。今は甲板も物さびしうなりて。折々水夫がいそがしげに船尾にたち出て思案顏なるのみ。甲板にたち休らひ又はそゞろあるきする人々は。やう〳〵絶果ぬと思ふに違ひて。左の欄干に身を寄かけて。今尙物語らふ男女こそありけれ。淡月はすでに已に波に涵りぬ。檣下の硝燈は波濤にゆられて。兎角に其光の定らねば。四下は何となう朦朧たり。されば憾らくは男女の面を。仔細に見定むべき便宜なけれど。男は西の國の人としも見えず。今しも欄干より立離れて雙手を背後にて組あはせて。左手へ三足ばかり歩み退くを見るに。身丈低しといふ際にはあらねど。西の人としては中背なるべし。立ふるまひといひ聲音といひ。正しく日本人と思はれたるが。しばらく話の種が盡たるにやあらん。北を打見やりて默然たり。女は其姿のたをやかなると其言語の若げなるに因れば。齡十八九の上にはいでじ。「ロンドン」

の淑女なるか。「パリ」の貴孃子なる歟。之を親ふべき山なけれど。衣透る白妙の雪の肌は。夜目にもしかすがに著けき心地す。長う匂やかに縮れたる髮の雙のこめかみより振掛りたる。袴のいと優に廣ごりたる。面の美醜はまだ見ずもあれ。いと雅びやかに可愛う見えて。所がら寵の宮の奇しき乙女が。ひそかに波を分きて現じたるかと疑ふ。今しも欄頭に身を寄かけて。「只有明の」ト打誦し貌に。殘んの月の影をうちまもりて居り。

男はやゝありて歩み戻りて。突然北の方を指示して。

(男)「ホウトン」孃。あれを見たまへ。彼處を……かやうに村雲が掩ひかゝツては。先刻お話した佛陀の故鄕も。全然跡形なく藏れて。茫々黯澹……嗚呼實にすごい景色。

(ホウトン)成程丸ツきり昏くなツて。……此やうに昏くなると。如何やら何となく物すごく。又心細くなツて。一層信心を增すやうであるに。これが佛陀教の信徒であつたら。あの朦朧たる島の方を望んで如何に有難がる事であらう乎。總じて靈跡を拜するには。あまり其近くへまゐらうより。遠くで。殊に此やうな物すごい晩に。暗にたち離れて遙拜するのが。結句信心の增る譯で……ガ。先刻のお話では。佛陀は……彼の脫凡の皇太子は。あんまり刻薄な非情の人間。情を脫し道を悟るは元來大德の自然ではあれど。妻子を木石か何ぞのやうに。無情に振棄て



隱遁するとは。所謂外形に泥んだ沙汰。難行苦行せでは悟られない。妻子が傍に居ては解脫ができぬ。それゆゑ罪もない妻子を棄て。山に逃れたといふ譯ならば。佛陀も脫凡の人ではない。卑欲劣情の範圍を離れて。久しく深山籠してゐたゆゑ。ヤット習慣の力によつて。卑欲劣情を忘たれまでで。まことに悟ツたとはいはれますまい。紅塵滿眼の中に在て尙且情欲に溺れないのなれば……

(男)善し。いひ得て善し。まことに聖敎を奉じたまふ。貴孃子其人に適した議論。僕も理論上の沙汰としては。貴孃に幾分賛同意なれど。なれども僕はもと實際主義。專ら事實を是重んずるゆゑ。到底望みがたき空理の議論は。たとへ如何に高尙であるとも。これを奉戴する譯にはまゐらぬ。僕が退いて考へて見るに。兎に角大事業を奏功せんとすれば第一愛欲の情を棄ねば。……區々たる情欲に拘束さるれば。自然と其鋭き執意も鈍ツて。萬事に豪放なる進退もできねば。磊落活潑なる振舞もできず。もつともかく申さば或は駁して。情欲あればこそ哀樂あり。哀樂あればこそ願望あるなり。願望は執意の作用。情は執意を生む母ではなき乎。若夫情欲を脫し盡さば。昔の仙人其人の如く。浮世を厭ふやうになるであらう。是豈人たるの本分ならん。ト斯樣に駁擊をなさらうかもしれぬが。僕はあながちに情欲を排して。一生仙人になれ

よとはいはぬ。大事と愛欲とは竝立しがたし。事業をなさむとする其際に臨んで。最も嫌ふべきは愛欲なり。これを忌むべしと申すまでである。思ふに愛欲はなほ慈母の如し。あるひは其子たる執意を皷舞して。これを誘奬する事もあらんが。それらは時あつて然るのみにて。多くは度を越えて甘くもてなし。其子の志を挫くことが多い。苟にも大成を希望する者は。常に道理といふ嚴父を奉じて。鋭意奮進して事をせねば。到底大功は奏しがたい譯。偉業と愛欲とは兩立しがたしといふ事は。これを理論上に質すまでもなく。古今の實例が證するところ。學理の壇上にある者でも。情波の侵入を避得たる人のみ。現に偉大なる發明をなし。美名を後世に傳へたではないか。ましてや實際の活戰場に。輸贏を相爭ふ實業家にあつては……

(ホウトン)ア、渥美君。君は外國の人とはいへ。今は基督の敎を奉じて。博愛の主義を戴く身で。さやうな刻薄な……敎旨に違背した殘忍な事を……

(男)殘忍……殘忍では決してない。僕の博愛は眞の博愛。天下一般の衆生を愛し。所謂公福を重んずるゆゑ。それゆゑ一個人の愛情を厭離し……

(女)サア其一個人の愛情を。それは厭離せねばならぬといふ。何も必要があるではなし。男女相愛し相伴ふは。元來天帝の定めたまひし定道。人の守るべき本道であるのに。それを故さら

に厭離するとは。所謂東洋の Asceticism（枯禪主義）といふもの。此天の道を破らざる限は。事業をなし難しといふやうな者は。蓋し弱點の甚しい者です。人たる本分を盡し得ずして。而して人たらむと欲する者で。妾等耶蘇教徒の目より見れば。天に違背したる罪人です。現に新教の開祖と仰がれ。歐洲大陸の風潮を轉回し。羅馬舊教の積弊を矯めて。妾等新教徒は申すに及ばず。見知らぬ外の國の人々にまで。希世の改革家よ偉業家よと。異韻同齊にほめられたまふ。アノ「ルウサア」の大德でさへ。尼院の尼御前を娶りたまひし事は。誰しも存じてゐる事であります。偉業家に夫婦の情なし。否愛情があつてはならぬ。ト何故。何が故に必要が……

渥美は先刻よりうなづきながら。わざとさしひかへて傍聞してありしが。此時いそがはしく言葉を發して。

（渥）いかさま面白い議論だが。それがサ今日から御覽なさるからだ。何サ當代の境遇から見れば。何故「ルウサア」が凡人らしう妻を娶ッたかは分る事です。蓋し「ルウサア」の尼御前を娶ッたのは。決して眞正の愛情から……所謂眞愛にて娶ッたのではなく。全く政略から。イヽエサ。政略に相違ないトいふは。當時羅馬教の習俗として。否羅馬教の教則として僧徒の妻帶を禁じたるゆゑ。「ルウサア」此邪教を拂はんとて。第一其いちじるしき物よりして。みづから魁け

て破るべしと思念し。さてこそ尼御前を娶られたる事で。これらは元來が政略であるゆゑ。決して事を成すの邪魔どころか。却ッて媒助にもなりましたらうが。僕の申すのは……

（ホウトン）政略だ……ヲヽ可怖。上帝上におはします。Honesty is the best policy.（方正廉直是上乘政略）政略だト……「ルウサア」上人が政略を用ひて……まさか……君は耶蘇教徒に似合はぬ事を……よしんば上人は萬々一。さやうな政略からなされたとしても。古來の理學者なり事業家なりが。情事を放棄して顧みざりしは。自然の。偶然の結果といふもの。求めて情を棄た譯ではない。只管一方に熱心したあまりに。情事を思ふ暇を得なかッた譯。それを結果から推論して。事業をなさん者は情を棄よ。ト妄に概括て斷定するのは。あんまり臆斷が甚しい。

（渥）サア其くらゐに偏せざれば。偏して一事業に熱心せざれば……

トいはんとする。折しも颯とばかり風吹いでて。たちまちパラ〳〵と音するとひとしく。俄に雨氣づきて降いでたり。爲に此議論も中止となりて急ぎ兩人は立あがりて。階子をかけくだりて船へと入る。トタンに馳あがる一個の水夫が。遙に空模樣をうちあふぎ見て。急ぎ船尾の方にたゝずみ居たりし。以前の水夫を呼ばふなるべし。時に雨の脚はしげくなりて。波もいやましに高うな

りしが。旅客は眞晝よりの炎熱につかれて。何れも寢入ばなの事にしあれば。恍然のどかなる黑甜鄉に遊びて。之を氣にせざるが大方なりし。

渥美恭輔は「カビン」に入りても。兎角に雨の音と波の音に。眠氣を追やらるゝ心地するに。百感かはる〳〵腦裡に浮びて。轉た耿々と神すみ氣さえ。「ソフハ」に上りしまゝ眠りも得やらず。獨り肚のうちに獨語くなるべし。

（渥美）アヽ人生は定めがたいものだ。色々に方向は變るものだ。架空一般の少時の望も。やうやう階梯をこゝまでは得たが。扨これからが最も難い。兎に角東京へ着した上で。首尾よく現主人に暇をもらッて。兼て腹案して置いた通り。たゞちに北海へ移住をして。二三の有力家を說得して。盛ンに北海の水產會社を……已に傳聞する所によれば。三四の英商と魯國の富豪が。該地へ手を出さうとしてゐるとの事だ。殊に來年は條約が更まッて。全國雜居ともなるべき模樣。日本の將來の利害よりいへば。左樣になッた方が大利益であらうが。シカシ其當座は日本の商賈は……商機に迂濶なる我資本家は……鴻利を髯商等に縱橫にされ。中にも豐富なる北海の富源を。彼等に占めらるゝは目前の事。全國總雜居となッた曉にソラト騷いだとて。敵は强し。財力よりいふも機智よりいふも。到底一歩でも先ンぜられては。壓倒されることは勿論

の事。どうでも東京へ歸り次第に。早速其運びに手を着ずば……ガ我國の財本家は。まだ〳〵姑息肌の餘臭があッて。容易に說いたとても……アヽ我說にはしたがウまいし。萬一賛同する者がなくば。たとへ一個にても……嗚呼資力に乏しいのが遺憾なれど。年來忍苦したる結果が公債五百圓。あれは財本の足しにもならねど。何かの媒助にはなる事もあらう。我身に萬一の事があらば。親子が憫然なりト思ッた故。「母子」に其證書はあづけて來たが。これも時宜により て……それは兎も角も。此船の中へ今度のせて來た奢侈品だけは。洋裝流行の嗜好に投ずる最も廉にして美な品であれば……たちまち捌るのは無論の事。たしかに四割方の利益はあらう。壹貳千圓の餘財はでよう。まづ〳〵これを以て資本にして。とても彼事業は覺束ないが。せめて其資本の基礎を得るため。例の金魚でも試みて見ようか。おれがやれば。かならず大儲を……今まで悉く失敗したのは。蓋し方法が宜くない故だ。おれがやれば……アヽシカシ之を思へば。なか〳〵兼々の大目的たる。金巾製造には遙な事だ。シカシこの點まで漕つけたからには。更に一奮闘した事なれば。志望を達し得ざる譯もない……ガ……思へば憾らくは我國の資本家は。何故興奮の氣力が無き乎。いふも憚ある事ではあれど。現に父上の如きも……アヽ此比は如何なされた事だか。先年横濱へ着した折。早速前年の放縱を謝して。日下の境遇を報知し

たれど。何の……單に一片の端書さへも……絶えて。御音信のないのは不審。たとへ御立腹が薄らがぬにせよ。何とか御返辭はありさうなものだに……ア、何事か變動があつたのではあるまいか。二度までさしだしたあの郵便が戻つて來なかつた所を見れば。たしかに屆いたには相違ないが……商務に暇を得ず。行くには行かれず空しく其儘にて打過たが……ア、何となく氣にかゝ……今度は是非ともに國に歸つて……今も今とて「ホウトン」嬢と論じて。愛情の事業と併立せざる事をいつたが。實に人情の束縛ほど。前途の邪魔になる物はあるまい。大事をなす者の身にとりては之を最大の荆棘ともいふべく又……況んや人情を拋棄せんとすれば。彼の淺薄なる皮相の輿論が。しば〳〵其間に嘴を挿みて。之を非難なし攻擊するゆゑ……ア、凡庸の人にしては。事を誤るも當然な事だ。……それにつけても憫むべきは。おみや母子。今度歸京したら兎も角もして。何處かへ片附てやらねばなるまい。おみやは其性より質よりいへば。實に善良とも淡泊とも賞贊するに堪へた人間ではあれど……其情を思へば憫然ではあるが……彼にして善良ならずば。今少し世話をなすも妨げなけれど。如何にも惡みがたき淡泊な性ゆゑ。却つて長く置くは我爲でない。如何なる一旦の夢心に。情波に溺る〳〵事なしともいへず……ア早く拂ふべしだ。これに比ぶれば「ホウトン」嬢は……シカシ彼もまた女子なるのみ。おな

じく感情の人となつたまでだ。泰西の婦人は丈夫魂ありなどとは。所謂洋癖からでる言葉だ。我黨事業家の眼より見れば。婦女子は痲醉劑だ。惡魔だ。總じて女子といふ片輪物は。只管有形の苦樂あるを知つて。わづかに現身の榮枯を重んじ。未來の無形の不朽の鴻福を……共に談ずるに足る者でない。……ガ……感服なのは「ホウトン」嬢の精神。萬里の風濤を恐るゝ樣なく。遙に米國より佛蘭西におもむき。去年其父に引別れて。恰も一年が其間。佛の親族の客となつて。今度我國まで只ひとりで。當時東京に宣教をしてゐる。父の「ホウトン」を尋ねてゆくとは……流石は歐米の婦人だけあつて。其豪邁なるは感服の至りだ。ダガ其の說く所を聞いてゐるト。時々笑ふべき妄想が多いテ。「未開の土に附て宣教するには。第一女子の口を藉るを良とす。他なし其の優にして柔和なる性質が。いとよく頑陋の心を和げ。彼を感化するに便なればなり。妾は從前より日本に住へる。他の宣教師に力を協せて日本の蒙民を誘掖して。たふとき教門に入らしめんとす。」トはアンマリ我國をしらざる言分。日本を印度などと同視したる言分。事情に昏いのは笑ふに堪へた事だ。只其熱心と氣概が……ヲヤ大層雨が烈しくなつた。……ア、おそろしく浪が……今までに三度も乘つたが。こんな浪風の烈しい事は……まだ……一度も……それはさうと。北海の事業は。是非とも敏捷に着手をして。一番髯奴輩の……膽……を

……ア、眠くなつた……ハヽヽ。シカシ事情に昏いのは笑ふに堪へ……た……話……一度もこんな浪に……乘つた……こ……とが……北海は……是非とも……こんな風に……乘つた……こと……事情に昏い……話……こんな風……北海……「ホウトン」嬢は……北海……風……浪……「ホウトン」……風……風

あとはモヤ〳〵と夢になりて。渥美はウト〳〵と熟睡しぬ。

去程に渥美恭輔をのせたる汽船は。追手によき風をうけたる庇にや。荒き高浪をも物ともせず。印度の大洋をも渡り越えて。たちまち香港の港へぞ着ける。渥美恭輔はこゝに至りてさすがに故里に近づきたりと思へば。例の北海の大事業にいよ〳〵着手すべき時機も近し。出世の道筋こそ開けたれ。トひそかに腹の裏に喜び勇みて。一旦此港へ上陸して此地の商況をも窺ふべしと思へば。船の碇泊してありける間に。あまたの乘合の旅人と共に。港の市街へと立出つゝ。あたりをさまざまに見廻るうちに。但見る一軒の「コヒイ」店あり。曩に「マルセイユ」を發航して以來。絶えて彼の物を味はざるゆゑ。極めて嗜める身は堪へがたう覺えて。兼て香港に着したらんには。急ぎ「コヒイ」店に立寄るべしト内々腹の裏に思ひながらも。嘗て香港に碇泊せし時。圖らず不潔なる「コヒイ」店を叩きて大きに苦みたる經驗あるゆゑ。再び其樣なる災難なきやう。今度は

精選して休ふべしと。色々心算して居たりし事ゆゑ。今しも「コヒイ」店を見當りしにつけても。第一其内部に眼を注ぎて。よく〳〵其模樣を點檢するに。怪しや此店の建方といひ。其内外の有樣といひ。いとよく東京なる上野にありける。おみやの「コヒイ」店に髣髴たり。所謂偶然の吻合にはあらねど。扨も奇緣なりとみづから戲れ。渥美はツカ〳〵と内にいりて。「コヒイ」一碗を命ずるなるべし。やがて傍をふりかへり見れば。「ルシイ、ホウトン」はいつの間に來りけん。おのれが右手にたちて打笑みて居り。

(渥)「ホウトン」嬢にはこゝにて上陸をしたまふにや。

(ホウトン)ハイ少々都合があつて。こゝで上陸を致しますが。あなたに折入つてお願ひがあるゆゑ。わざ〳〵跡をおうて。

(渥)それはまた何故。

(ホウトン)外の事ではなけれど。ドウカ御邪魔ではあらうなれど。妾を日本の北海道へ。御一緒に北海道へ。妾をつれていつて下さるやうに……

(渥)エヽ。不思議な事を。貴嬢は父上にお逢ひなさらうとて。わざ〳〵東京へおいでなさるのぢやアないか。然るに北海へ……それは又どうした譯。

（ホウトン）さうおいひなさるは貴君には似合ない。妾が父親を慕つてまゐるも。寔に基督の教旨を奉じて。教を擴張めたい心願でする事。單に東洋の婦女子の如く。父が戀ひしいといふばかりではなし。然れば妾の本願は。耶蘇教擴張といふ事であるゆゑ。萬一貴君さへ御承諾なれば。日本第一の未開地と聞たる。「アイノ」の住むあたりへ出掛てゆき。妾の力にて及ぶ限は。布教をして見ようと思ひますゆゑ……是非とも……

（渥）さすがは上國の貴嬢子とて感服の至りであります。區々たる人情に維がるゝ事なく。只管宣教に忠實なるは。まことに敬服といはざるを得ずです。さういふ御氣性と見たる上は。あくまで御助力も致しませうし。身不肖ながら此より後は。貴嬢を妹とも親友とも思ツて……

（ホウトン）妹とも親友とも……さやうな冷淡なるお言葉ならば。今更聞たくもありません。妾は……

（渥）しからば何といはば……

トいひかけつゝ。何心なく打見やれば。「ルシイ」はしかすがに羞らひてや。面をサと計り紅うなして。更には答へ兼てさしうつむく。玲瓏たる玉の肌。匂やかなる花の顏。珊瑚色なす脣は。いと小さくして愛敬づき。星かとぞ見る雙ツの眼は。碧深うして。いとうるはし。先ごろ「パ

リ」の美技館にて。眼に印したりし美人の畫が今このところへ活現せしか。「グリース」國の彫像師が。意匠を藏めたる女神の像が。にはかに靈づきて物いふにあらずや。常にも彌增りて婀娜なるはいかに。こはそも夢にてはあらざるかと。心何となう恍惚として。さすがに冷薄なる渥美ながら。しばしは其姿を打まもりて。又いひいださん言葉もなし。稍ありて言葉をあらため。

（渥）さまでに不肖なる恭輔の事を……

トいはむとしたる其機會に。たちまちガラ〳〵とすさまじき音して。家など倒轉へりしものの如く。ドウと倒れかゝる物こそあれ。アナヤと身をこなたに避くると同時に。近頃辛くして建築せるおのれが商店に出火せりと覺しく。火の粉すさまじう飛びひろがり。北海水産社と筆太に記せる大なる看板は見るが内に。焰につゝまれて燃あがれば。スワこそ大事なりとたゝんとすれば。たちまちガラ〳〵と再び音して。我身は「ソフハ」より轉げ落ちつ。奇異なる夢心地は醒たりけり。扨は夢なるかと思ふ間もなき。驀地動天の汽船の騷動。之を何故とも知る由なけれど。船は恐ろしう横さまに傾き。燈火は「ペンヂユラム」を掛たらんやうに。彼方に又此方に打靡き。振動き。人の叫ぶ聲。高濤の音。ガラ〳〵ドウ〳〵と鳴響きて。さながら雷の如く轟き渡る。扨こそ難船ぞと起あがれば。たちまちヨロ〳〵と脚元ゆらめき。覺えず後ざまに轉仆びぬ。此時やう〳〵に

我にかへりて。キツト氣を定めてヨロメキながらも。早速に「カビン」の戸を押開きて。急に身づくろひをなさむとすれば。窓よりドウと計り打込む大濤。渥美は頭よりザムブと被ぶりて。又もや後ざまに仆んとせしが。辛く踏こたへて馳いづれば。こは如何に。こはそも如何に。已に甲板には水や滿ちけん。「カビン」のあたりまでも海水侵して。多少は渡らずては立出がたし。泣叫ぶ女の聲。罵わめく男の聲。霹靂たる雷鼓は。怒浪の船體を擊聲なり。ヒウ〳〵と鳴る風の力は已に檣をも碎きたるにやあらん。ガンラガラ〳〵とすさまじき音して。大なる長きものがおのれが頭に今にも落かゝらむ音するなり。其餘は何事を罵るにや。何の響なるか。聲も響も。之を聞分るに由なきまで。たゞ〳〵ドウ〳〵と鳴響く浪と。獅子の吼るごとく怒り號ぶ。はげしき風のみぞ高かりける。

因云。「金魚」輸出の商策は夙に國人の着目するところにして之を試みしも多かるべし。されども其功を奏したるは無し。知人橋本重兵衛氏は曩に歐米に漫遊して諸國の商況を歴覽し頗る商法に熟したるが。このごろ談話の末金魚輸出の事を論じて曰く。米の「サンフランシスコ」にては金魚一尾我中等品にて二十五弗位なり。今にして輸出を圖らば利の大なる覩るが如し。歐洲を歴遊するに金魚なる者は絶えて見ず。英の京城の近傍の溫泉場に於て始めて金魚

二尾を見たり。此溫泉場は洽く水族をあつめたる處にて彼の鯨といふ動物さへあり。しかるも只二尾の金魚を貯ふ。金魚の歐洲に乏しき事明なり。平生金魚と譯す「ゴールド、フヒツシュ」は我金鮒の事なり。需要供給の道理よりして歐土に彼魚の高價なるはさもありつべき事共とやいはん。先大に「サンフランシスコ」に輸出し更に米よりして歐に送らば其利莫大たる疑ひなし。美麗の硝器抔に金魚を泛べて四方の貴女兒童を誘はんには其の賣るゝ事請合なり。若夫之を送る方法は別段困難なる事にはあらじ。航海中は之を器に入れて釣て置く可し。度々清淨なる水を與へて空氣を新鮮になすを要す。但し餌を與ふ可らず。今迄人々が失敗したるは金魚に餌を與へて「モタレ」さしたるに因るなり。腹さへ減て居れば死ぬものにあらず云々〳〵。」頗る面白き話ならずや。本篇中に恭輔が金魚云々といふは果して此邊を思ふにあらずや。作者も其仔細を知らずと雖も因あるまゝに斯くはしるしつ。

第十三回

印度洋の難船

霹靂たる電雷が圖らず瀑布と共に眉上より。おどろ〳〵しう墮下るとも……雪の積りたる山嶽が。俄に内よりして破れ裂けて。小山をあざむくべき雪なだれが。猛然頂より碎け落ちて麓へ一齊に崩れかゝるとも……それらはおそろしさの數には入らじ。形は幾尋とも圖りしらぬ偉大の怪物があぎとを開きて。泡を吐き。牙を露はし。船を一呑に呑まむと企て。ザックと嚙つくかと思ふばかりに……。駭くが如く。怒るが如き。二丈あまりの巨浪が。右り左りより打あげられて。又たちどころに崩れ下りて。船の側腹へと打寄せ〳〵船を立地に碎かんとす。時しも空は文日もわかず。宵には見えたりし星の影も。今は一ツだにキラめかずて。墨を斑なく流したらむやうに。黑雲一面に掩ひ重なり。狂浪怒風只ドウ〳〵と鳴響きて。宣しめす水夫の掛聲。號叫ぶ旅人の聲々。共に此響に消おされつゝ。いづれをいづれとも辨くよしなき。いとすさまじき暗夜の災厄。船は元より老船にて。流石に旅路にはなれたりしに。そも如何にして過誤ちけん。不意の暴風雨に行

手をあやまり。あるまじき方に追ひやられつ。「セイロン」島の此方なる。世に恐ろしき暗礁の眞ツ中心にぞ乘あげたる。折しも雨は降り歇みたれど。あかしま風はま〳〵荒れて。檣柱を折り綱具を吹切り。死力を揮ひて避むとする。船をゆりあげゆりおろして。いと物すごく屹立せる。牙かとぞ見る巨巖へ。幾たびとなく打あぐれば。堅牢硬固の船ながらも。またいかにして堪へ得べき。アワヤといふ間にこゝかしこに數ケ所の痛手を受たりけん。海水たちまちにうづまき入りて。「カビン」も腰深の水となれば。誰かは「デン」人の大王（「デン」人の大王とは「カニウト」の古事）を氣取らん。いづれも打わめき號叫びて。先刻甲板へと逃出しが。こゝも眉上より掩ひかゝる。數囘の高浪を受けたるゆゑ。さながら洲の如くになりにたれば。横さまに拂ふ風强くて。足をすくはるゝも尠からず。コハ如何にせんと狼狽騷ぎて。親は子を求め子は母を呼ばひ。折れたる檣によづるもあれば。壯きは老いたるを搔わけ突のけ。斜に傾きたる大檣柱へ。人をつき仆し引おろして。先を爭うてぞ競ひ昇る。斯て誤ツて引下され。たちまち高浪に足をとられて。一丈二丈も宙を飛んで。無殘や底しらぬ海の中へ。ザンブと落入るも數をしらず。アナヤと叫ぶ聲も其友には聞えず。もだえて差延す雙手を名殘に。龍の宮居へと急ぎ行くらん。あさましとも無殘とも。いふばかりなき阿鼻叫喚。地獄のありさまもこれには優らじ。あな恐ろしやと目眩き

て。女性は「ヒステリヤ」を發すもあれば。精神惑亂してヨロメキ〳〵。そゞろに浪の陰へ狂ひいづるを。アナヤと後ざまに抱きとめて。共に高浪をあびるもあれば。爲に包まれて拋いだされ。おなじく水底の藻屑となり。大魚の餌となるも多かるべし。

死を極めたる働きにて。辛くも「バッテイラ」を下したれど。(風はいやましに荒いでたれば。水夫と船長が死力をいだして。都合三艘の「バッテイラ」を。綱にて檣柱の根本に繫ぎて。船の左側に泛べにけれども。)ゆりあげゆりおろす浪の爲に。端舟はさながらに木の葉の如く。パターリ。パターリッと。ゆらめきひらめき。今は目の下にあるかと思へば。乍地五丈も六丈も彼方へ。波の勢にて衝やられつ。我こそ眞ッ先にと檣柱より。半眼を閉ぎて跳り下りて。端舟へ飛乘らんと試むれば。悲しや其船は間遙なり。今度の波にこそと片唾を呑み。波の打寄るを俟兼つゝ。南無と默禱して甲板より飛ぶ。空中にある事一瞬間。やがて辛くして船の中へ。ドウと物音して落入りつゝ。脊骨をはなはだしう打つくるは。最も幸福なる仕合せ者。多くは舷にふれたるのみにて。無殘や悶むべし思ひがけぬ旅路へ。アとも得もいはでたちいづるぞ。兎角する程より三艘の小舟は。已にこぼるゝ程人をのせて。怒濤の眞中へと乘いでたる。此方で見てさへに目は眩むなる。みづから乘組たる人の目には。水を潛る如き思ひあるべし。舷にしが

みつきて横さまに搜れば。人をあまり多く載たるゆゑ。船體大方は水に浸りて。わづかに一寸程水をいでたり。少しく孰れへか傾きなば。たちまち此端舟は顚覆て。二十三十の乘組人は。むなしく蒼溟の鬼とやならん。風はすさまじう。濤は高く。四面眞ッ黑にて陸遙かなり。如何なる沈勇の男と雖も。などでおそろしと思はざるを得べき。轟々たる風濤の音しなくば。人の胸にてうつ動悸の音を。眞に聞得べうぞ思はれたる。

さる程に渥美恭輔は。眞晝の氣の疲れや甚しかりけん。圖らず怪しげなる夢に襲はれ。常よりは異なりて熟睡したれば。此時餘の人には後れて目醒めぬ。コハ鈍ましき事してけり。國の爲には更にもいはず。我爲にも惜しき命ぞ。逃れ得べくんばト心を定めて。早速に要ある品取まとめて。腰にシツカリと結びつけつ。やがて甲板へと馳のぼれど。はげしき暴風に吹拂はれ。怒濤狂浪に打掩はれて。容易く船頭の方へ進むべうもあらず。されども恭輔はをさなきより。尾州の內海のほとりに生たち。殊にをさなきより游泳を好みて。頗る熟練してありけるが上に。嘗て思ひよらぬ暴風に出會ひて。遠く沖の方へ押流され。ほと〳〵溺死せんとなしたりしを。辛く荒濤を潛りぬけて。濱まで泳ぎつきし經驗さへにあり。をさ〳〵水の事は心得たれば。斯るおそろしき場合に臨めど。さすがに尋常の旅人のやうには。狼狽へ騷ぎたる氣色もなく。やう〳〵船頭へと

立出れど。あわてて「バッティラ」に移らむともせず。しばらく其模様を打見やりてありしが。此時三艘の端舟だけは。已に充満に人を乗せて。綱を切放ちて。漕ゆくめり。水夫は今更に死力を盡して。新たに「バッティラ」を打おろせば。此時本船はいよ〳〵危く。「カビン」は悉く浪となりて。船尾は已に業に水に浸りぬ。其危きこと累卵の如く。尋常一般の人ならんには。面に生色なうなるべきなれども。渥美は此時まで騒げる色なく。他の乗後れし旅人と共に。彼の眩めく端舟に向ひて將に飛入らむとなしける程に。たちまち彼方なる欄干の陰に。圖らず眼にとまる物こそあれ。わづかに船長が掲げ置きし。光ほのぐらき殘燈にて。何の心もなく打見やれば。正しく氣絶したる人の如し。高浪の絶間にすかし見れば。正しく溺れたりし婦人の如し。長き黒髪はかき亂れて。寄る浪の爲に弄ばれ。今にも一浪の高く寄せなば。全身たちまちに押流されて。彼方へ放られんと思ふに似氣なく。衣服が大錨の齒にからみて。主は息たえぬと見えながらに。さすがに此時まで流れもやらずて。危く舷より一反ばかり離れて。錨の陰にありてゆらめきたり。さはあれ今一浪寄せたらんには。錨も諸共に轉落ん。あはやト目につきては義俠の本性。渥美は覺えずも走り寄りて。錨に雙の手はかけたれども。名にしおふ大錨の事にしあれば。渥美の膂力にては得も動かず。さりとて助力を呼ぶ境遇ならねば。渥美は畢生の死力を出して。辛く

も押しのけんと試むる程に。恰にザッと寄る山なす高浪。渥美の頭上より掩ひ掛れば。たちまちヨロ〳〵とたじろぎつゝ。覺えず仰様に臥しまろべば。無殘や退く浪に足をすくはれ。あはや舷より左手の方へ。將に落入らんとなしたりしを。渥美は逸早くも踏こたへて。辛くも錨綱を掴みたるが。力しかすがに强かりけん。錨はユラ〳〵と仰向きたる。機會に又ざふらふ寄せたる狂浪。錨の陰にありし婦人の死骸は。たちまちドッとばかり押流されて。渥美の起んとする胸の上へ非常の重力に速力を加へて。さながら大砲の巨丸の如く。不意に浪と共に衝當れば。錨の鐵の齒の角に懸りて。潮に浸りたりし錨綱は此時如何にしけんフッと斷離て。錨は前の方へガタ〳〵ガタ。渥美は死骸の重量に打れて。一搖後の方へ轉ぶとひとしく。敢なく退く浪に身を包まれ。無殘や……海の中へザンブと落つ。落さま恭輔は身を翻へして。死骸の腰のあたりシッカと掴みて。間なく手と足を働かして。山なす狂浪を搔わけ蹶開き水を右左に吹あげつゝ。頭を振起してキッと見れば。いつしか船頭の方へ押流されて。船には五段ばかり隔たりたり。助を呼ぶべき歟誰かは應ぜん。兎に角本船の右手へ廻らば。今尚「バッティラ」が浮べてあるべし。件の死骸は如何にすべき。全く死したりとは思はれざるに。棄るも我本意に違ふに似たりと。思ふ間さへに浪間の災厄。さすがの恭輔も心亂れて。抱きし死骸はシッカト抱きて。ゆりあげられ押流され。死力

をあらはし。ぬき手を切ツて。更に右手の方へ泳ぎ寄れば生憎高浪にドウと撃れて。又もや二段ばかりゆり戻され。又近づけば又隔たり。又隔たれば又近づき。斯すること十分あまり。辛くも右手の方へ廻り出れば。端舟は充滿に人を乘せて。今しも三段程漕出たり。「其船俟て。其船」ト叫ばむとして叫ぶあたはず。こゝを先途と搔わけ蹶開き。文目もわかぬ暗の夜も。音を目あての必死の盡力。やうやく端舟に近づきつゝ。死骸を小脇に抱きしまゝ。舳に間近き舷へ。左手をチョウと打かけて跳り入らんとする程に。さらでも危き「バッテイラ」は。乍地此方へヒッかたぎて。無殘や乘込三四人は。アッとも得いはず眞ッさかさま。モンドリ撃ッてぞ落入たる。意外の災厄。意外の騷動。あなやといふ間に件の端舟は。ふたゝび殆んど飜へりて。乘合したる數十人は。皆水の中にたゞよひたり。されども元來かゝる事に。出會なれたる老水夫は。絶えて騷げる樣子もなく。二人三人力をあはして。已に危かりし件の端舟を。元の如くに泛ばせたる。其熟練はさる事なれども。かゝる暴風怒濤の中にて。げに目ざましき希有なる働き。神の助に因る事歟と。後には語りたるもありけんかし。渥美恭輔は此時まで。例の死骸を抱きしまゝ。浮きつ沈みつして泳ぎてありしが。今しも水夫輩の働にて。船を元の如くなしたりしを。暗に推測して知りたるにや。將た夢心地に近寄りしか。再び舷まで泳ぎ寄せて。又もや飛のらんとなしける程に。先刻此船より轉び落て。今なほ此あたりにたゞよひたる。あまたの乘込の其一人歟。たちまち恭輔の足に纏ひて。頻りに浮ばむとぞ試みたる。恭輔水練には長じたれど。已に一人を搔抱きぬ。已に身も心も疲れ果てぬ。爭でか又一個を救ふを得んや。ましてや狂浪の中心にて。手足に斯の如く纏ひつかれて。何とて泳ぎ出る事を得べき。我身も危しと思ふものから。以前の死骸は尙離たず。辛くも「バッテイラ」に近寄りつゝ。親衡「ヘルキュリス」の偉力をふるッて。抱きし死骸を高くさしあげ。端舟の眞中へと抛こみたる。折しも我足に纏ひし男は。ます〳〵死に瀕して苦しきにや。更に恭輔の腰のあたりへ。さながら死果たる人の如く。一生懸命にからみつけば。アナヤと恭輔は身を飜へして。之を離さばやともだゆる折しも。又もやドウと寄る狂濤怒浪。さすがの恭輔も度をうしなひ。空しく片足と雙手をもて。只管後の方へ泳ぎまはれど。次第に端舟へは遠ざかりて。アレヨ〳〵と思ふ間に。端舟はいづかたへ漕ゆきけん。烏玉の暗たちこめて。只ドウ〳〵と鳴る浪のみ我を弔ふ如くなり。流石のますらをも勇氣挫け。身體綿のごとく弱りはてて。水搔きやらん氣力さへ。今はなか〳〵なまよみの。甲斐なや竟に押流されて。何處の浦何處の沖。いかなる方に流れいでて。いかなる魚に食はれけん。墨を流せし黑雲も此時やう〳〵薄うなりて。雲間に見ゆる星影は。只二ツ三ツ燦然たり。

第十四回

市中の騒擾

時しも九月の初旬なり。夕陽忍ばずの池波に映じて。上野の山半面あかし。後れ開の蓮の花も今はやう〳〵に謝し盡しつ。笠めいたる蓮葉も。いつしかこゝかしこ風に破れて岸の柳葉とうなづきあひ。共に秋來ぬとかこちがほなり。廣やかなる競馬道は。夏中紳士に見棄られて。草さへ茫々と生茂りてありしが。次第に凉風の時節としなれば。鬚ある方々も浮たちたまひて。日ならで競馬のおん催し有べし。我らも「少メカシ」ておかばやとてや。夕暮の風にしば寄る波に。鬚なす草の根を洗はせたる。傍へに草刈が置忘れし。一箇の利鎌あるも折にあひてをかしう。耳近う鎬々と響く鐘の音は。夕日を西の方へ叩きこむやうにて。見る〳〵遠きあたり昏うなりゆく。口ぎたなき烏どもは。大方山の方へ群り去りて。行かふ人さへに稀々なり。「風流たる向が喜ぶべき。めでたき夕景色となりにけり。」ト池の中島を遙に見やりて。獨彳むは菱野詞狂なり。けふしも早天に濱より歸京て。おのが假住居に戻しかど。おみや母子への土産にとて。濱にて整へたる

「形なき貨物」は。おのれが聞てさへに胸潰る〳〵。甚だ妙ならざる品物にしあるを。之をあからさまに母子に告なば。如何に膽潰して駭き歎かん。渥美は印度洋の洋の中にて。圖らず沈沒の厄にであひて。其生死も定かならず。否疑ひなく藻屑となりし。と斯樣に打つけに語りたらんには。田所鼎とても足摺して歎かん。扨も厄介なる土産ものを得たりし。皇天は果して偉男兒を嫉むや。其情なさの甚しき。何ぞ一にこゝに至るや。殊に稗史家たる我をさへに。件の慘話中の人物にして。一部の役廻りをさせようとは。まことに迷惑なる造化の配劑。とはいへこれもまた浮世の眞象。世を知り人を知る便宜と思へば。さまでに苦勞らしうかこつは俗歟。畢竟先入が主となりて。我も東洋氣が失せねばこそ。兎角に稗史種を空理に求めて。「おのが脚下の百花を打棄て。星のみ美はしと仰ぎて見るなれ。」Bentham が聞かば我をも笑はん。眞理は人間に存したるを。我身の進退にも見えけるものを。外に求むるとは誤謬の限なれ。人の爲に喜ぶも。人の爲に悲しむも。所詮は我眞理の材料にしあるを。何の故ありてか五月蠅とかこたん。詩人小說家といはる身は。殊に世の善惡に立まじりて。眞理を發揮せでは叶はざるに。今尙いにしへの文人を學びて。書齋に籠居の閑靜三昧。禪家の坊さまを氣取り。隱者の振舞に倣ふ。籠居は悟道の「フホーム」（外形）のみ。隱遁は閑適の俗手段。かやうの俗手段を用ひずては。閑雅を樂しむこと能

はざる歟。扨は俗人の振舞なり。まことの風雅たる人にあらず。否々靈活なる眼を開きて。眞の妙想を愛せんには。熱鬧の市にも幽雅の相あり。紅塵の中にも禪味はありけれ。何を苦んでか他に求めん。扨も迷へるかな。惑へりといふべし。さもあらばあれ今の時勢は。政事といひ宗教といひ。公わたくしの交際まで。をさ〳〵外形が盛ゆる世の中。あまり飜し過ぎて寢語にでもいひなば。思はぬ災難にならうもしれず。こゝらでやめるかたが中庸なるべし。それは兎も角も渥美の災厄。到底諾らずして止むべきならねば。「最初に田所へ。」ト斯う思ひて其日の二時過より家をいでて鼎の寓居を訪ひたりしに。折しもさる所へ行きたる留守なり。「暫し俟たまはば幾程もなく。」ト書生の愛想にたよりを得て。およそ二時間程待ほうけてありしが。鼎はかくても尙歸り來らず。詞狂はやう〳〵に俟くたびれて。「左あらば又更にまゐるべう思へば。願ふは筆硯を貸したまへ。」トやがて瀆にての一伍一什。電報の文面。おのれの臆測。聞くまゝ思ふまゝをサラ〳〵と認め。これを假封して書生に渡して。「今にも先生が歸られなば。これを。」トいひおきて立出つつ。たゞちに通街より萬世橋にいで。わざとブラ〳〵と廣小路にいでしが。さすがに打つけには母子を得訪はず。但しは其外に思ふ所ありてや。我身もろく〳〵には理由をしらねど。覺えずフラフラと三橋を打過ぎ。上野の公園へと踏こみたり。斯く往くともなく歩むともなく。そゞろにこ

かしこ廻りあるきて。例の權現の御社の前より。杖と目ばたきにて拍子をとり。しづかに階石を拾ふやうに降りて。競馬の道のはたへいでたりしは。已に誰彼の時刻にてありし。

あまりに面白き池の詠に。菱野は氣を奪られて用事を忘れつ。こゝの妙想は那邊にあるか。扨も優雅なり閑靜なり。トどうやら先刻の議論から見れば。互ひに撞着りさうな感想を抱きて。默然目ばたきのみ盛んにすなる。折柄怪むべしこはそも奈何に。たちまち山下の方にあたりて。ドヾドツとあげたる鯨波。砂塵を蹶あぐる夥多の足音。騷然としてをめき叫ぶ。詞狂喫驚眼を見張りて。火事かと見やれば煙も見えず。又半鐘の響もなし。抑何事ぞとたゆたふ折しも。彼方よりもバラ〳〵〳〵。此方よりもバラ〳〵〳〵。先を爭ひかけいだすは。孰れも血氣の若者にて。

「ナアに向からしかけたンだ。實に極まツた奴……失敬極まツた奴だ。ヲイ〳〵長井。早く來い。早く來い。

「ヲイ高尾。まツちよれ〳〵。何處ぢや〳〵。何處ではじめた。

「そこだ〳〵。ツイ山下だ。ヲイ〳〵危險だぞ。ウツカリあの邊へとんで出ると。やられるぞ側杖で。

「巡査は來たか。巡査は。

「どうだか。ヤア〳〵愉快々々。激しくなツたぞ。正しくさる私塾の書生と思しく。多くは屁子帶に白地の單衣。握太の自然杖を。正宗村正とも氣取ツた持やう。碎れたれども此駒下駄。しなびたれども此痩腕。せめては一臂の應援して。敵の奴輩あわふかせん。いざふれ諸君。と鳥羽繪めく常世。茶番にでかけさうな源左衛門。思ひ〳〵にどよめき叫びて。彼方をさしてぞ馳ゆくめる。これらは所謂野次馬にて。喧嘩の敵手にあらざるべし。其原由は如何なる事ぞ。要こそあらめと詞狂も共々。三橋の方へとかけてぞゆく。

天地を動かす喧嘩騒擾。互ひに蹴あぐる砂塵煙。群る人は黑山の如く。をめき叫びて鬪うたる。其事の原を探り見るに。此日の午前の事なりしが。英人四五人にて汽車より降り。上野の「ステーション」に休らひ居たるを。傍に客待せる人力車夫が。好客見つけたりとうなづきあひて。頻に乘車せよと勸むる程に。英人も竟に其氣になりて。府下のさる所へ幾何にてゆくや。急がば若干を與ふべしといふ。車夫は飽くまでも貪らむと期してや。遙かに不當なる賃銀を求めて。容易に承諾せる氣色もなし。英人は終に打腹立て。無言で「ステーション」を立出れば。車夫は急がはしく追かけ來りて。されば若干を增したまふべし。更に若干を賜はれかし。ト五月蠅く附纏ひて强請するを。傍に見居たりし支那人の車夫が。俄に後邊より走り來りて。吾等は其價にて應命

すべし。直ちに乘たまへ。ト叫びもあへず。車を二三輛ひき來りて。件の英人をのせむとすれば。日本の車夫どもは大に怒りて。我等の口掛たる旦那に向ツて。横から掛合沙汰不埒至極。人の營業の邪魔するな。ト口を尖らして二言三言。互ひに角芽だちて言爭ひ。果は鐵拳を掴り固めて。打つ擊れつして相戰ふ。客なる英人は驚き惘れて。いつしか足早に走り去りしが。喧嘩はいや增しに激しうなりて。雙方たちまちに味方を增して。やう〳〵大喧嘩にならむとするを。巡査は逸早く遙に見とめて。五人六人ほど馳つけつゝ。靜まれ〳〵と叫びもあへず。喧嘩の眞中に跳り入りて。劍を鞘の儘に振ひらめかして。必死に盡力して制すれども。雙方火の如くに奮激したれば。巡査の制するをば耳にもかけず。おのれ邪魔するなト互ひに叫びて。或は新ザツボウ。天秤棒。思ひ〳〵の武器を弄して。巡査をメチヤ〳〵に擲りつければ。巡査は是非もなく白刃を引拔き。威嚇て制御せんと試みしが。頑然抗敵してひるめる色なし。餘儀なく先に進む一個の支那人丼に日本人を斬仆せば。ソリヤこそ斬ツたぞトわめきたてて。雙方諸共に巡査に向ひて。更に擊かゝらん勢なりしが。此時數十人の新手の巡査が。右より左より馳つけつゝ。白刃を拔かざして應援せしかば。車夫等もやう〳〵に心附きて。斯くては敵しがたし敵手が違ツた。巡査に敵たウのは本意でないぞ逃よ逃れよ。トわめき叫びて。ドツト崩れたつて逃いづれば。彼方の支那人も狼

狽へ騒ぎて。共に總崩れに逃出せり。巡査は此體に威勢を得て。逃るを追縋りて取ておさへ。竟に三四人をからめとりぬ。其中一人は支那人なり。別に創を受けて仆れたりし。支那人一名を介抱して。これをも警察署へ連行きつゝ。斯て此騒ぎはをさまりしが。爲に警視廳は大騒ぎにて。吏員はあちこちに奔走して。廳中殊の外の雜沓を極め。いまだ落着にもならざる處に。突然夕暮の時刻に至りて。又もや支那人が黨を結びて。不意に日本人の車夫を襲ひて。非常の騒動を起すことなりぬ。是併しながら故ある事なり。單に此午前の遺恨のみにはあらず。元來支那人の勞力者流は最も狡猾にて貪慾なるゆゑ。常に目前の薄利を厭はず數でこなす事に心を凝して。日雇といひ。手間仕事といひ。呼商といひ人力車といひ。總ての力役に爭うて從事し。只管其利得を專占せんと試み。日本の勞力者を壓倒せんとするにぞ。已に一二年以前の比より。日本の力役者は支那人を敵視し。之を惡むこと甚しけれど。さりとて奮勵して弊習を刪除し。みづから改良して市場にたちいで。自然の勝敗を決せむとは思はず。動もすれば腕力に訴へ。之を凌辱して怨を遺らむ。と最も淺墓なる思想を抱きて。常に其機會を俟居たるに。支那人もまた彼等を憎みて。倭奴不敬なり。トいふ氣込にて。おなじく輕蔑する心あるゆゑ。屢豚の尾と讒謗され。若くはチャン〳〵と罵らるゝを聞て。之を憤ること大方ならず。是又折あらばと俟居たるに。此日ゆく

りなき客爭ひよりして。午前の騒動を釀したりしのみか。爲に其國人二個までも。警吏に捕はるゝ至りしかば。件の爭鬪には關係せざりし。あまたの支那人さへ一味に加はり。不意に色々の武器を揮ツて。上野の「ステーション」の此方にありける。日本の人力車の溜所に向ツて。ドツと鯨波をあぐるやいな。只無二無三に擊入たる。意外の亂暴に誰かは敵せん。わづかに敵たひたる人力車夫は。たゞちに二三人枕をならべて。數ヶ所の疵を負うて打仆され。殘るは辛うじて逃のびつゝ。斯くと警察署(お成街道)に註進すれば。スワコソまた大事が起りしぞ。ト警吏は一同に身づくろひして。やがて馳出んと思ふ間もなく。支那人無慮百人あまり。思ひ〳〵の武器を揮ツて已に此處に押寄つゝ。午前に捕はれたる國人をかへせ。直ちに引渡せと罵りわめきて。いとかしましく罵たつるを。警吏はおだやかに之を制して。彼等は取調ぶる筋あるゆゑ。こゝにて渡すべき限にあらず。一旦退けよ。ト命ずれども。いよ〳〵ガヤ〳〵とわめきたてて。急には退くべき樣子もなく。果は亂入せん有樣なるゆゑ。警吏ももてあまして見えたる處に。たちまち日本人の勞力者流が。いつしか百餘人黨をなして。鳶口竹槍など打振〳〵。ドツと横合より鯨波をつくりて。支那の暴徒等に擊つてかゝれば。扨こそ敵ぞや。ト俄に狼狽。市街に跳りいでて激鬪なす。同日再度の大喧嘩に。警吏もほと〳〵度を失ひ。如何はせむとたゆたふ折しも。支那の暴徒

等は大に破れて。たちまちバラ〳〵と崩れたちつ。上野の廣小路の方へと逃いで。竟に山下まで退く程に。こゝにも一團の車夫隊ありて。石を飛し棒を振ひ。ドッとをめきたてて打掛れば。支那人いよ〳〵色めきたち。勢衰へむとなしたる所に。突然百餘人の支那人あり。いづれもすさまじき利器をたづさへ。猛然徒士町よりうづまきいでて。以前の支那人に應援なし。日本の車夫隊を襲ひしかば。喧嘩はこゝに於て激戰となり。雙方の死傷數をしらず。未曾有の大珍事となりたりけり。憲兵巡査は力を協して。之を制止せんと力むれども。元來少數にて敵すべくもあらねば。俄に非常鐘を打鳴らして。四方の警察署に珍事をしらしめ。たゞちに八方より其場にかけつけ。今は敵味方を問ふに及ばず。抗ふ奴輩を擊仆して只管鎭制に力を盡せど。雙方數百の大勢なれば。容易に鎭まるべき樣子も見えず。殊には日もいつしか沈み果て。四下は薄昏うなるにつけて。暴徒は尙更に力を得て。互ひに死を忘れて戰うたる。折しも不思議の過誤にや。または故意に出し暴行にや。たちまち徒士町の裏手の方より。黑煙猛然とあがるとひとしく。火花サとばかり散亂して。火を失したりし再度の騷動。件の大喧嘩に仰天して。あわてて戸を閉ぢたるあまたの商家は。スワコソ火事なるぞと叫ぶとひとしく。又もや一齊に戸を開きて。上を下へと騷ぎたちて。馳出るあれば叫ぶあり。ジヤン〳〵と鳴る急半鐘。囂々と響く無數の人聲。ましてや近くして

は白刃ひらめき。うめくあり叫ぶあり。武器々々が相觸れては。戞々と鳴り鏘鏗と響く。修羅闘諍をまのあたりに。見るかとぞ思ふ珍事珍變。むかしの上野の戰爭もこれには過じと思はれたり。さる程に菱野詞狂は。此日は午前より寓居にありて。曾て外の事には心も注がず。鼎の寓居を訪ひたりし折にも。絕えて彼の喧嘩のありし事を。ホンの風說にだも聞かざりしゆゑ。圖らず此場合に行あはして。理由の何たるを解する由なく。只管惘れ果て又惘れつ。得意の目ばたきまで中止の體にて。さすがに廣小路にいでも得やらず。茫然仲町より遙に見やりて。暫しは立ずくみになりてありしが。今しも徒士町より火を失して。黑煙中ぞらにうづまき上り。やう〳〵火の手高うあがるを見て。「扨は「コヒイ」店。」ト心附けば。さながら「エレキ」の氣を感じたらんやうに。俠氣ムラ〳〵と胸に逼りて。詞狂は我しらず走りいだして。今尙すさまじき喧嘩の最中を。さながら宙を飛んで馳ぬけてト自分の想像にはできたれども。實地其樣に甘くはゆかず。向うに數十人の巡査ありて。通過を禁制する有樣ゆゑ。餘儀なく三橋より東の方へ走りて。更に右へ折れ左に曲りて。たゞちに徒士町へと走り入れば。此時火は已に鎭定して。暴徒も大方は敗走せしにや。騷ぎはやう〳〵に靜まりたり。

内地雜居未來の夢 終

春のやおぼろ戯著

諷誡京わらんべ

諷誠 京わらんべ解題

坪内逍遙補
神代種亮稿

「諷誠京わらんべ」は、春のやおぼろの雅號を以て逍遙坪内雄藏の著作せる小説にして、全六回を以て完結す。（第五回が重複せるは恐らくは活字の誤ならむ。）

起稿は作者の日記及び序文の附言に據れば明治十八年十一月なり。同日記明治十九年八月（日不明）の條下に『京童の製本を受取る。』とあり。

初版本　洋裝四六版。本綴ぢ。背黑クロース。表紙はマアブルの厚表紙。扉は墨刷、花形にて四周を圍み、竪に三欄に分ち、右欄に「春の屋おぼろ先生著」、中欄に「諷誠京わらんべ全」、左欄に「大坂日野書館藏版」とあり。卷首に天台道士（杉浦重剛）の序文（漢文）あり。本文

は清朝四號旁訓附にして、大體「當世書生氣質」と同式の組方なり。本文總紙數百一頁。挿繪は歌川國松の描く所にして、二頁大折込にして、四葉あり。奥附に「明治十九年三月十八日版權免許、同年六月日出版發行」「定價金四十錢」「出版人日野九郎兵衛（大阪府東區淡路町二丁目十三番地）」「發賣元日野商店」とあり。

文苑閣本　日野書館より版權を讓受けて再刷したるものにして、挿繪の一圖（第四回）を口繪とし、他の三枚を板木を兩斷して本文中に刷込み、丁附を改めたるものなり。總紙數本文百七頁。表紙は石版刷にして、中央に櫻花に圍まれたる洋裝せる少女の像あり。下端に「文苑閣發兌」とあり。奥附に、「明治十九年三月十八日版權免許、同五月二日再版御屆」とありて、初版本が六月發行なるに、再版本が五月發行となり居れるは、奇異なれども、何かの事情に由れるものならむ。同奥附に「出版人鈴木喜右衛門（東京府日本橋區横山町二丁目十四番地）」とあり。定價金四十錢。扉の著者名及び書名は日野本と同一文字なれども、左欄は「東京鈴木書屋藏版」とあり。

文事堂本　表紙は文苑閣本に全く同じけれども、本文は明朝五號活字にて組替へたるものにして、總紙數本文九十七頁なり。元の挿繪の一葉を口繪に出し、他を本文中に刷込みたること文苑閣本に同じ。扉に「東京文事堂發兌」とありて、表紙の「文苑閣發兌」と一致せざるは、是れ亦何等かの事情に由るものなるべし。奥附に「明治十九年三月十八日版權免許、同年五月二日再版御屆、同廿一年二月廿四日版權購求、同年四月九日印刷」「出版兼發行者市川路周（日本橋區横山町二丁目十四番地）」「定價金四十錢」とあり。

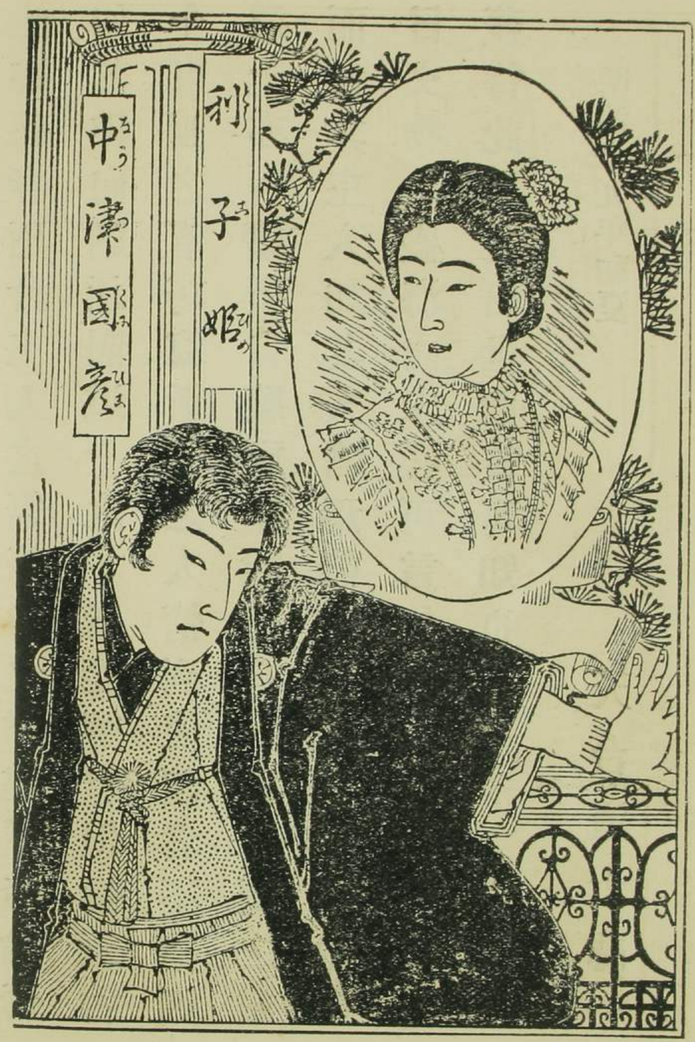
覆刻に方りては、初版本によりて校訂したり。又、第四回の挿繪は文苑閣本に倣ひて卷首に出だせり。

大正十五年六月

此書係春廼舍主人之筆筆力之雄健固無論焉如其趣向則迂濶道士之非所能解也但折衷古今東西之萃巧寫新陳之人情到使讀者不倦則道士亦一讀所自驗顧小說亦自一種專門之業而自非主人如其人者焉能得下之批評乎然今日文物之盛海內未必可言無主人之知己也是蓋待此書之出世而後可知也

明治十九年初夏　　天台道士誌

萩野隼人


利子姫
中津国彦

京わらんべはしがき

曩につれ〴〵の筆のすさみに當世書生形氣といふ墓なき小冊子をものしたりしを端なく書肆の爲に奪ひさられて世に公になしてこのかた襃貶の沙汰耳のはたにてかしましく隱居もしかすがに隱居でございと澄して居られませぬ身の上となりぬ。此頃また日野なにがしに責られてそぞろに京わらんべ一篇をものするものから元來咄嗟のいたづらがき多少の寓意などもなきにはあらねど是又琢磨したるものにてはなし之を冬庭體の文章とやいはん蓋し花もなく實もなければなり誤つて具眼者の眼玉にかゝらば願くは平賀鳩溪の似而非物ぞと思してお手やはらかに見のがしたまへ。

明治十八年十二月

本篇は客年十一月の末つかた稿を起し十二月初旬稿を脱す今にして之を見れば十日の菊の歎なきをたもたずさりとて已に檢閲をも經たりとぞいふ今更奈何ともなさんやうなし粹な諸君子あんまり叱りたまふな。

明治十九年三月

春の屋隱居述

春のや主人おぼろ再識

目次

第一回　發端
第二回　割烹店の密談
第三回　根岸の失敗
第四回　深閨の物思ひ
第五回　溫泉場の大虚喝
第六回　大團圓　麻布の狼狽

諷誡京童

第一回

發端

春の屋おぼろ戯作

いつの頃にやありけん。鳥が鳴く吾妻の都の山の手なる。故郷こいし川の大和町に。豐原正夫となん呼ばれたまふ。やんごとなきおん方ぞおはしましける。昔時はときめいたる御身の上にておはせしかば。流石に其名殘の今尚しるけく。家令とやらん家鮒とやらん。魚類に似たる名前のものども。幾人となう召仕ひたまひて。いと〳〵やたかげに暮したまひぬ。住はせたまふ御屋敷も。往る年建かへたまひて。今は流行の洋風擬ひ。Hに似たるペンキ塗の西洋門は。聳然兩側の長屋を凌ぎて。容易に四駟の馬車をも容るべく。Y字のやうなる一株の笠形松は蓊鬱女闕の前に茂りて奏皇の雨やどりを待兼顔なり。主人の殿正夫ぬしは。當年やう〳〵十九年になりたまへど。

頗る怜悧けてましますのみか。滅法開化好でおはするから。年來英學に凝りたまひつ。that のit の何たるをさへに。十分學び得ておはせしかば。時の華族方のおん仲間では。所謂鐵中の錚々ぞと。人にも崇られておはせしとぞ。斯やうに才も學も秀で給へど。さすがは上流のおん育ちとて。財の尊きをば。知召さねば。理財といふ事をば力めたまはず。且は御本性が負る嫌ひで。一轍御短慮なるおうまれだちゆゑ。何事によらず。蟹事に限らず。他人に後れじとあせりたまひ。人より上をこそともがきたまひて。由なき張合にて尊き財を。徒に棄たまひし例も多かり。たとへば御同族の風流士なる花下長雄どのと聞えしお方が。兼々御愛顧の金春猫。何屋なにがしを根引したまひ。此度お庭うちへ上野の鐘。ゴーン細君となしたまへば。正夫ぬしも不負たましひ。何を侯爵なる長雄の振舞。余豈花下めに讓らんやと。たゞちに御意に入りの柳橋藝妓。何屋の何吉を脫籍せたまひつ。是で心も隅田川。我花まされりなどほこりたまひぬ。勢かくの如く豪勢なるゆゑ。おん家富まざるにはあらずと雖も大黑の神にあらざる限は。打出の小槌などのあるべきやうなく。いつしか御貯金うすうすなりゆき。七福神かといはれたまひし無雙の花長者のおん身ながらに。今は重代の寶をもちだし。家令家扶などには内密にて。質置く人とまでなりさがりたまひぬ。しかのみならず時々には。全然質種をもたらせずして。金を貸すべしなど。命じたまひぬ。最

初はお出入の質屋仲間も。たしかなお屋敷ぞと信ぜしから。二重三重に抵當無にて。金子を求めたまふ事ありても。異議なう御用立まゐらせしが。日を經て其金子を返したまはず。さりとて質種をもたまはらねば。次第にあやぶみもし疑ひもして。いまだ公然にはいひいでざれども。蔭にて打つぶやく輩もいできて。豐原正夫ぬしの世間の信用。やう〳〵退潮のありさまとはなりける。されば御屋敷におはす時にも。御家族一同に絹布ぐるみ。物見遊山などに立出たまへば。今尚二疋だちの勅任馬車。うはべはあくまでも優長らしう。いと樂しげに見えたまへど。内輪は存外なる財政困難。家令も藥罐なす頭を惱して。これでは到底たちゆきがたしと。ひそかにうちなげくも道理ぞかし。

爰に正夫ぬしの御妹に利子と呼ばれたまふ姫君ぞおはしける。天の成せるおん麗質も。まだやうやうに三五ばかり。蕾の花の櫻の枝にビードロ釣つるしたおん肌つき。凝れる脂團ねし雪。彼の師直を迷はしたる。美にしてえん谷の奥方といへども。此色艶にはいかでか及ばん。下から段々にほめてゆけば。長く引ずりたる裳裾の下より時々チヨロ〳〵と見らるゝ御足はいと白やかに可愛らしくて。彼の大黑のおほん神がめでさせたもふてふ白き獸が。チヨロ〳〵出入する姿にも似たらん。おん腰つきのたをやかなる。そゞろに看る人の心を動かし。おん首筋の生際よきたちま

ちしがみつかんず野心を促がす。顔は團形出にして助高屋の舞臺顔も宜しく。眼は二重瞼にして小駒の愛嬌にもまされり。言語のやさげなる。西京の舞子衆も舌を巻き。動止のしとやかなる。浪花の藝子はんも三舎を避くべし。嫣然として一度笑みたまへば。看る者たちどころに魂とろけて。有頂天外にたちいづべく。莞爾々々として二度つゞけに笑み給へば。一度もあうた事のない者だに。きいたばかりにて早腰ぬかして。家庫公債も何の物かは。もつてけしよつてけと夢中になるべし。おまけに此の姫は女子に似氣なく利口で發明でましますのみか見識楠の胡摩姫よりも高く。學識秋布の乙女よりも廣し。香花茶の湯琴三味線。これらはなか〳〵にいふにしもたらず。敷島の大和言の葉。お豆腐の漢土の學問。空蟬のイギリス學。一心のフランス言葉も。いくらかより〳〵に習ひうかめて。要ある折からには擔ぎ出したまひて。我慢な兄君をもやりこめたまへば。看者聞者が驚きたゝへて。寔に利子どのは人にてはおはさじ。天津乙女などの再來ならずや。たゞ恨むらくは正夫ぬしが。姫のおん諫言を用ひたまはで。よろづほしいまゝにもてなしたまふ事を。もし正夫ぬしが我慢をとゞめて利子のおん言葉を重んじたまはば自然豐原のおん家運もふたゝび。いや榮えに榮ゆべきに寔に是非もなき事なり抔さゝやきさゝやかぬはなき程なれども。良藥口に苦しとやらん。げに人心はさるものにやありけん。殿は姫君をば疎んじたまひて。女子は深き窓

に居るべきものなり。餘計な屑をさしいだすは。沙汰の限なる生意氣なり。トツトと奥へ往て琴でも彈なと權兵が烏を追ふ主義よりはげしく。二度が三度までも追ひのけたまへば。さすが女性の身の御心よわくて。あんまりはしたなくは得論じたまはず。杞憂を振袖のうちにをさめて。むなしくおん居間へとさがりたまふ。あな御笑止なるおん有樣や。正夫ぬしのまします限りは。豐原の行末おぼつかなげなり。いでや正夫ぬしを隱居させまゐらせ。姫に聟ぎみを迎へばやなど。ひそかに企謀むもありぞと聞えて。お家もいつとなう物騷がしうなりぬ。

然るに豐原家の御親戚に。中津國彦といふ人ありけり。その父某と聞えたるは。維新前の頃にありては。何の何の守といはれし人にて。勢猛なりける武士なりしが。維新の後程なくみまかり。其子國彦が家督をつぎしが。それより不幸の引續きて。家運あさましう衰へつゝ。今は西京の祇園に退き。母と諸共にわび住居して。辛く年月をおくりて居り。件の國彦といへる男は。そのかみ如何やうなる故ありてか親と親との相談にて。利子の姫君とは結髮の中なり。雙方年頃となりたらん折には。必ず婚禮をば行ふべしなど。正しく約束せし事なりしが。維新の大變にて中折なし且は東西に別れしから。件の結髮の一條の如きは雙方ともに忘れたるが如く。年月夢のやうに走りすぎて。國彦十九歳となりけれども。曾てこの事をばいひもいださず。只其儘にて打過ぎたり。

もと國彦といへる男は。うまれつき學問好にて。修學一方に熱心なるから。其餘の事なんどは夢にも思はず。殊に試驗前の眞夜中などには。蘇秦の故事にはあらざれども。ほんまに太股へ千枚通をさしかねまじき少年なる故。吉田の法師などに見せたらんには。人間にして人間にあらず。できそこないの玉の盃。透明潔白の色氣なし。淡々泊々のお坊さんそだち。五六年以來東京へたちいで私塾で學問はしてゐれども。未だ揚弓場ッ這入したことなく。ましてや湯屋の二階。のぞいたことなし。かゝる石部派の人物なるゆゑ。結髮のはなしは知ぬにあらねど。女子と小人とは養ひがたし。外面如菩薩內心如夜叉。遠ざかるべきは女子にこそあれ。裴炎が三畏の誡。まことに御道理至極なりなど。變に聖人めいた御託を吐して。苟にも色がゝつた談話はせず。たま〳〵友達がよりこぞりて昨夜登樓の恍惚ばなしや。若くは提灯に釣鐘筋（片思ひ）なる。地色の風評などはじむるときには。ツヽと起て便所におもむき獨睪丸かくしと相對して英書を諳誦する撓まぬ心底。教師も友達もおそれ入りて。中津は木かストーンの化物であろ。さらずば勉強ちふ無形の物が。假に人間に生れいでて書生となつたるにてある可いとて。驚きたゝへたる程にぞありける。

さはあれ人の心は脆きものなり。沙翁（シエイクスピヤ）のものされたる臺詞にはあらねど。あるひは西あるひは東。風に任する鵞毛と一般。ふは〳〵ふは〳〵と變るが常なり。かゝれば今日の心

堅しといふとも明日は如何やうに變る事やら。決して前方より期するは難かり。俗に食ず嫌ひといふ事あり。こいつ當になる事にあらず。蓋し味の如何を知らずと。之を無茶苦茶に嫌へる事ゆゑ。たま〳〵其味の美なるを悟れば。今まで見るもウシというた族が俄に牛肉は大スキ燒。イヨ結構などいふ事あり。これから推測して考ふれば。放蕩爲盡て堅い男はいかさま大丈夫と信ぜらるれど。初手から堅いのは當にならず。況んや色好むは人の性にて。之を好まざるは無理なろをや。されば國彦が頑固きも。段々東京の水に染て。ヲイソレの浮氣を呼吸するに至りし庇にや。いつしか街中を通る折にも白い首ッ玉がぶらつくを見れば。赤い角絞がちらつくを見れば。華美な緋縮緬がひらつくを望めば。覺えずふりかへりて見送る樣になりぬ。扨かくの如くなりもてきたれば。國訛の武骨な聲にて。ヲイ中津ウと呼ばるゝよりは。東京ッ風の小意氣な聲音で。アラ國ちやんと呼んでもらふが結句うれしいやうな心持になり。そろ〳〵矢場そゝりをはじめしかど。元來が西京のおまへん生長。ましてや今まで偏屈一方。意氣のデフヒニション（定義）もしらざる程にて無類飛切の野暮天なるゆゑ。色白面長のノッペリ男。顏容みにくきにはあらざるのみか。機轉もなかなかにきいては居れども。金のつかひかたの不器用なるのと。可忌筋が鼻のさきにぶらつくので。兎角女うけが墓々しからず。あまり面白うはまゐらぬゆゑ。國彦案外に失望して。獨で散財高の

胸算用。こなひだ春木座へ出掛たのが。二個で二三が六。六十錢。かへりに蕎麥くうたが六錢八厘。其外先月來茶代の名義で。其都度くれてやつた十錢紙幣。總計て一圓とたしかに十錢都合一圓七十六錢ヲツトまだある七錢五厘。これはこなひだ根掛の絞を是非なく緣日にて買うてやつたが。思へばつまらない贅散財ぢや。もすこし資本高を氣張らうものなら豫約の英和字彙が買へる位ぢや。はてさて色といふは高いものぢやぞ。本望もまだ遂げぬさきから。こないに小二圓もいるやうでは。到底われ〳〵には佛の御器ぢや。もそつと手短な手段はないかと。獨で塾の部屋にとぢこもりて。洋書はそつちのけと。彼方におしやり。机に頰杖をつくねん惘然ランプと睨競で考へしが。流石に西洋書を讀んだだけに。權利といふ事に思ひつきて。ハタと手を拍てつぶやくやう。豐原の女利子といふは今年でたしか十五か十六。モウ十分に結婚齡ぢや。おれは幼少い時あの娘と。たしかに結髮がしてあるといふ事。よもや今更に不の字はいふまい。但し此年來久濶疎遠。無音無沙汰勝で打絶えたさかい。あのお約束は變改でおます。履行しまへんと云はさる歟。其邊ちひとばかり氣がゝりな事ぢやが。ハテえいわえ。ハテえいわえ。其時こそは日頃の學問。契約論で論じてこまそか權利說で難じてやらうか。兎にも角にも談判うてみよう。隣の英たらいふ官吏があんな女房でも自慢の積か。いつも〳〵お神酒饌。ならんで出掛をるを見るにつけても向家の米問

屋の若夫婦がこゝから見て居るのを知つてか知らずか毎日々々ひツつきくツつき巫山戲くさるのを見るにつけても。アヽ〳〵妻ほしうなつて來たわい。鰥寡孤獨は片輪者も同樣。妻を娶らざるは天則にあらずぢや。況んや結髮の妻女のあるのに。久しく打棄て顧みざるをや。思ひたつ日が吉日良晨早速一談判はじめて見んト。忽ち無造作にも心を決して。貯蓄の嘉平治平折目たゞしくたゝんであるのを。無殘や曲なりに穿做しつゝ親父ゆづりの黑羽二重。三ツ紋の羽織を皺だらけに被下し。急ぎ下宿屋をばたちいづれば。辻待の人力車夫チロリと睨みて。(車夫)旦那御都合まで。まゐりませう。(中)小石川まで若干でやる。ヱ。十二錢ぢや。十錢やるから急いでいけイ。

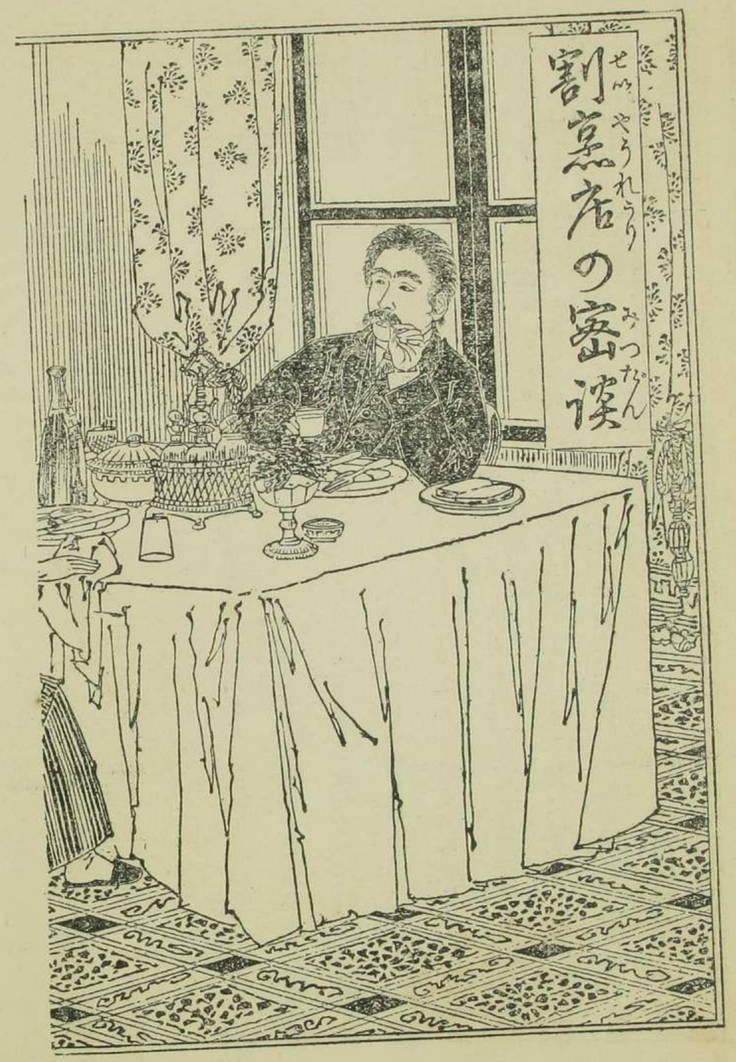
第二回

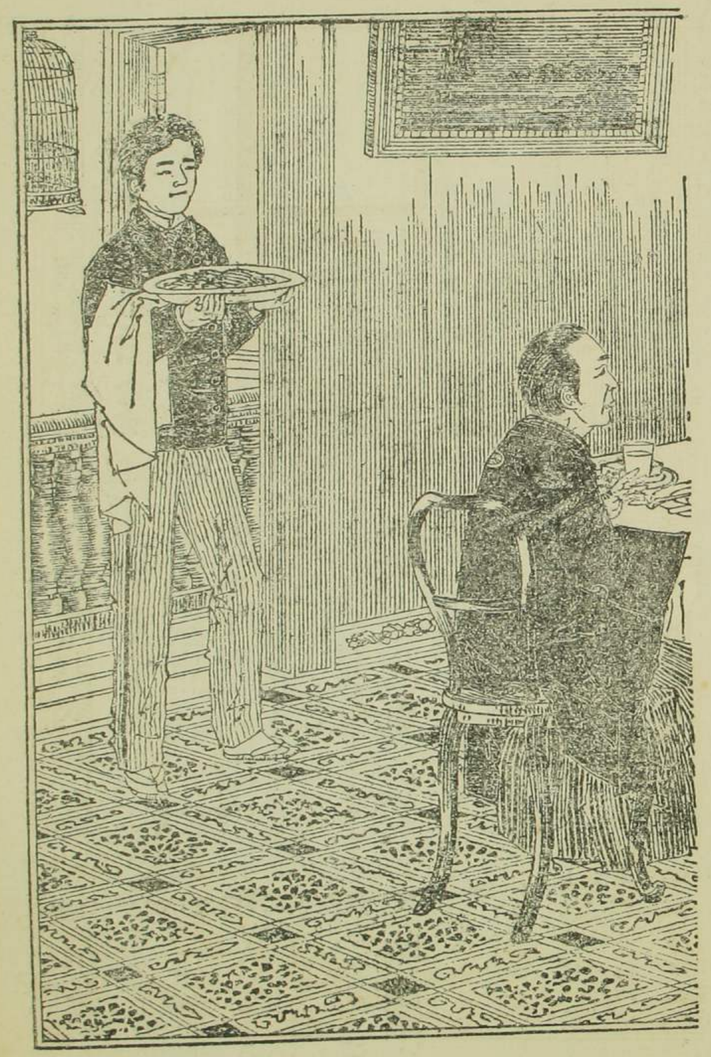
割烹店の密談

千早振神田橋のにぎ〳〵しきは。官員退省の時刻とやなりけん。頭に黑雜紗の高帽子を載き右手に八字做す髭を捻りて頻に手車を急がしたまふは。知らず何の省の鰒爺さまぞや。お宅で權夫人が待兼たまはん。もちつと御車夫をば急がしたまへといふは餘計なる岡燒なるべし。手に辨當箱携

へつゝ。雙子唐桟の袴をはき半靴もしくは日和下駄にてチョコ〳〵歩みくる四十男は。是や等外の鰌ぬしにやあらん。腰様齢には似ず曲屈にたるは低頭が習慣となりたる故にや。馬車にめす勅任さま。馬にのる奏任がた。洋装の紳士和服の歴々。思ひおもひに家路へと。別れて歸る退省どき。學習院の門前をば。一人の別當に先を追はせ。騎馬にてあゆませたる紳士ぞありける。年の頃は三十歟三十一二。色あくまで黑うして鼻筋通らず。眼は大きけれど凹みたるゆゑ。此奥眼玉ありといひたき程なり。眉秀で鬚うるはし。眉は逆體に八の字をなし。鬚は並體に八字を做したり。故に遠くして之を望めば。どうやらXといふ字に似たとは。あんまり牽强なる形容にこそ。身幹人並より大なる方にて。肌膚も脂滿ち肥ふとれり。其洋服の立派なると。生來高くもなき狎兒鼻が。いくらかお高さうに見らるゝを思へば。中々薄俸給の官にはおはさじ。莫大月給をば貰はせ給ふ尊きおん方とぞ思はれける。折柄錦町の彼方よりして。車で急ぎ來る男ありけり。年頃四十四五と見られたるが。忽ち目敏くも此方を見認めて。あわてて人力より飛下りつゝ無性に二ツ三ツ低頭をなし。(男)コレハ〳〵は萩野の御前。只今御退省でございますか。只今御尊宅へ伺ひませうと立出ました所でございますが。(萩)ホウ誰かと思うたら豐原殿の家令さんか。アゝえい所であうたわい。實はなア今から他行せうと致いた所ぢやつた。何か緊急な用でもあるか。(男)ヘイ少々申上で叶はぬ事件が。(萩)左様か。コウツト。然らば三河屋(西洋料理店)で小憩致いて。暫時面談を致さうかのう。(男)寔に御他行のお妨を仕りまして。實以て恐縮ではございますが。ヘイ〳〵。何分切迫致しました儀で。(萩)宜しい。承知致いた。○コリヤ忠次(別當の名也)三河屋へ參るぞ。

斯てやんごとなき萩野ぬし(其名を隼人と呼ばれたまふ)は。豐原正夫ぬしの家令と聞えし。縣居管兵衛を隨へつゝ。三河屋の二階に登りたまひて。御前上等の料理を命じたまひつ。偖管兵衛に打向ひ給ひて其のいふ由を尋ねたまへば縣居おそる〳〵椅子を進ませ聲をひそめていひけるやう。(縣)申上まする儀は餘の儀ではござりませぬが。(トいひかけて暫く口隱りて)主人の妹の儀に關しまして。(萩)ナニ。利子さんに關係の事ぢやと。どうぢや。足下から談じてくれたか。正夫さんは承諾ぢやらうのう。エ。どうぢや。何と申してをられたか。ト捻髭微笑して宜給ふにぞ。縣居いよ〳〵もじ〳〵して。(縣)イエ。どうも其儀に付きまして寔にはや實にはや甚だ恐れ入りました儀でござりますが。(萩)エ。何ちふか。それでは正夫どのが不承知ぢやと申すか。(縣)イエ然樣ではございませんが。意外な妨碍が生じましたのでいまだあの事に關しましては。御前の命令を主人の耳へは。萩野ぬしは俄に御氣色を損じ給ひて。(萩)まだ一言も申さんちふか。


割烹店の密談



そして意外なる妨碍とは。何か。どないな妨碍が發生したのぢや。利子さんが病痾にでも罹られたと申すか。(縣)イエ。全く左様ではございませんが先般一寸お聞に達し置ました通り利子殿事は。兼々結髮の夫君がございまして。(萩)アヽ其事は過日も聞いたが。中年破談いたいたと申したではないか。(縣)デ。ございまするでございましたが。突然昨日の事でございますが右の結髮の夫君と申すが。(萩)ナニ。今頃になつて。出掛て參ッたか。其者は當今何省に奉職いたいちよるか。(縣)イエ。奉職などは致されませんて。(萩野ぬしは忽地。逆八の眉を並八に顰めたまひて)(萩)エ。何ちふか。それでは新聞屋どもか。(縣)イエ。新聞屋でもございません。純粋な書生でございます。こいへばはぎのぬしはすこしくあんしんのおんかほいろにてうなづきたまふ。突然主人邸へ推參致て。是非とも正夫殿に面談いたしたいと。遠慮會釋もなく申しまするゆゑ。主人も一度は驚かれましたが。何か理由のあることであらうと。早速立出て逢れまするとイヤハヤ。お話にも成り兼まする次第で。○右の國彦が申しまするには當家の令嬢利子殿儀は兼々親々の結髮にて。拙者の妻とすべき筈でござれば。是非とも早速に約束通り。履行なさるゝやう仕りたい。少々性急なるやうではござるが。今日申受る譯にはならぬか。成るべく然願ひたいものであるとか。○御前で申上るは恐入ますが。イヤハヤ狂人の譫言同様理不盡な勝手のみ申しまするゆゑ。主人もほと〳〵憫れ果て。成程親共が在世の頃

には左様な約條を致したかもしれんが。それは維新前の事にてもあり。時勢も異なりたる折柄の事。そんな古い事を持出されては此方當惑をいたす事である。利子と結髮の一條の如きは全然破談なりと思うてくれよと。色々理を盡して申聞ましても。右の國彦と申す男は。年來洋學を修行いたして。生中法律とか政治學とかを。いくらか生嚙に致しましたので。兎角に不條理なる理窟を主張し。權利が如何ある斯であると種々生意氣なる事を申して。秋毫も此方より申す條理は。同人の腹中には。入りませんので。主人も返答に困却いたして。いづれ二三日に返答するから。一旦歸宅してくれるやうにと。漸く一旦は追返しましたが。實は其折の契約書なども。どうやら今以て先方には。たしかに保存してをりますていゆゑ。斷然排斥をいたします譯にも。ヘイ〳〵參りませんので。主人も當惑を致されまして。殊には御前よりの御依頼の一條或はこれがために妨げられては何共御前様へ對しましても。實に申譯のございませぬ儀で。彼是。(萩)ハヽア。それは馬鹿な事が出來いたいたなア。なんぢや先方は高が。書生ではないか。斷然叱りつけて追ひかやせばえいに。萬一不條理を申すやうなれば。巡査に其旨を申すがえいわい。(縣)御前の命ではございますが。何分證據物がございましては。まさか其様にも申されませんで。(萩)いかさまのう。證書が先方の手元にあつては全然取消すといふ譯には○アヽこりや困難な儀が生じたのう。アヽ

如何したもんぢやかまひつくぐしあんにくれたまふていなり。○ア、えいワイ。一策を案じだしたぞ。トしばらくむごんにて八字ひげをひねりた斯いたせい。左様に先方が熱心であつては到底破約といふ譯にはいかんぢやらうから。マア兎も角も承諾いたいて。斯様々々に約してのう。トいひつゝ何か小聲になりて。凡十分程さゝやきたまへば。管兵衛頻に頭をさげ。(縣)ヘイ〳〵成。成。成。程。ヘイ。ヘイ。○それでは約束書を認めまして。(萩)左様ぢや。(縣)しからば如何やうに認めませうか。御前で草案をこしらへまして。(萩)イヤそれには及ばん。おれが今直に草案を作ツてやらう。○マアそれはえいが。足下何か食はんか。先刻より話に紛れて。酒が薩張いかんやうぢやのう。ナニ。西洋酒はいけんと。ヤ。それは氣が付んぢやツた。マア何か食ふがえいワ。足下は最初から並べたまゝで皿を一枚もあけんによつて。ボーイ(給侍男)が困却をいたいてるぞ。ウハヽヽヽ。此うちしばらく飲食して兩人ともに無言なり。萩野ぬしはたちまち腹案ができたりと見えて。ボーイに命じて料紙と硯箱を取よせたまひて。即座にさら〳〵と認めたまひて。やがて縣居に示したまふを縣居うや〳〵しく受いたゞきて。小聲で讀上る其文に曰く。

○○○

一○○○

して心配をするに及ばん。○ア、併しながら退いて思へば是は悉く足下の罪ぢやぞ。イヤ。何もそないに恐入らんでもえいがのう。おれが兼てより依頼しちよくに。早う其事を周旋せんから。圖らず此様な妨が起つたぢや。(縣)寔に恐入奉ります。決して等閑に致しました譯ではございませねど。承りまする所では。御前は御愛妾が御三方もおいであそばし。殊には奥方もおいであそばしますから。實は御座興かと存じまして(萩)馬鹿いうてはいかんが。奥はほんの飾物ぢや。彌利子さんを貰ふときまれば即座にでも放逐いたす積ぢや。アヽしかしのう。油斷は足下ばかりではない。實はおれも油斷ぢやつたぢや。○實はのう。あの利子さんは重に深閨にばかり閉籠つて他行致いたことがないといふから。誰も見知つてはをるまいから容易に貰ひたいといふものなぞが。外から出ようとは思はんので。それで猶豫してをつた譯ぢやが。アヽ實に油斷は(折からビールの栓をぬく音唐突にポーン)アヽ吃驚いたいた。ウハヽヽヽ。

第三回

根岸の失敗

年若くして色氣なければ。無骨にしてしとやかならず。老て色氣なければ慳貪にして邪見なり。色氣は愛嬌なり。また艶なり。強に婬慾をのみさすことかは。紳士にして色氣なければ巧なく。商賈にして色氣なければ店先寂れん。天地の間何物か。色氣なくして立行くべき。戀せずば人は心のなか〳〵に尊ぶべきは色氣なれども。又退いて考ふれば迷ひ易きは思案の外道。人目の關屋のりこゆる。戀を曲者とはたがいひけん。よしや鐵石の腸なりとも。色てふ氣の爲に煽られなば竟には溶解ずしてやは止むべき。色即是空などと悟り顔に。達摩たいしたることというても。いづれも受取られぬ。言行相違。色を色として賢にかへて。野に遺姸を問ふ君子ぞ多かる。ましてや有漏無漏の辨別なく。血氣定まらざる少年輩をや。迷ふはなか〳〵に道理ぞかし。されば中津國彦は一たび戀の道を蹈そめてより。是非に利子姫を娶らでやはと思ひ込んだる氣は張弓。矢も楯もまたたまらばこそ。直に豐原家へおしかけゆき。短兵急な履約の談判。思ひがけねば豐原家にては

呆氣にとられて。吃驚敗亡。一時は答辭に困ぜしかど。家令が機轉の計ひにて彼のやんごとなき萩野ぬしの。智慧をば一寸かり條約。不思議な約束書をかきしたゝめ。こを國彦に握らせつゝ。偖さま〳〵に利害を說き婚儀を猶豫せよと求むるにぞ。中津も流石に其理に伏して。强ち强情をば張も通さず。蓋し中津は此年頃頗る零落はしたりしかど。今尙四千圓か三千圓位は公債證書も所持せし事故。此約條書に隨ふのも。さしたる難儀な事でもなしと。しぶ〳〵ながらに承引つゝ其日は一まづ下宿に歸りつ。早速國元なる母の許へ事の來歷をば言やりつゝ。兎に角母親をば東京表へ。呼迎へまくなしたりしに。母は俄に病に罹りて。病むこと久しからで空しくなりけり。國彦此不幸の訃を得て。なき悲む事大方ならず。急ぎ古鄕へたち歸りて。野邊送など式の如くしはてつ。偖家地面も賣代なし。家財こと〴〵く取纏めて再び東京府へたち戻りて。氣の知れぬ麻布のほとりの。とある地面附の家作をあがなひ。一旦お神輿をばすゑたりしが。さて斯なつて見る日になりては。何やら書生をするが否氣になり。早速利子姬を呼迎へて直にも妻にしたく思ひしかど。さりとて婚姻は五年の後ぞと堅く約束せし事にあれば。今更如何とも詮すべなく一日千秋の思をなして。時計を早めて見つ。書眠をして見つ。さても年月はのろまの返答。長くてはきはきせぬものぢやなどと。欠伸と口小言でもちきりつゝ一月二月と暮すものから。流石は少年の

忍耐心なく終に道ならざる心を興して。いと淺墓なる振舞をぞなしける。それは如何にといふに。元來國彦が利子の姬をば。是非に貰ひたしと思ひそめしは。姬の人質の高尙なるのと。其禀性の慧敏なるのを。慕ふに基きたる事にてはあらず。全く春心のつきそめてより。火急に女欲しうなりたるに因るのみ。されば約條を結びし後。五ケ月六ケ月は我慢をして。辛と劣情をば忍びしかど。いつしか堪難うなりたりけん。國彦つく〳〵と思ひけるやう。斯して惘然と手を束ねて。俟は憂いもの難忍ものなり。寧手取早に姬をば口說きて自談で手に入れるが上策なるべし。さりとて平民の女と違ひて。たま〳〵豐原家へまゐつた時にも。一度も貌見せたる事さへなき二重三重の箱入娘。容易に近よるべき手段もなし。こいつ如何としたるものであらうト。首を右左りにふりかたぶけ。三日一晩まで考へしが。竟には容易ならぬ惡意をおこして。いつそ手短に姬をば奪とり。否應なしに思を遂げん。これが第一の早手廻し。さうぢや〳〵と心を定めて。それより日々日々に我家をたちいで。そらみつ大和町におもむきつゝ。ひそかに豐原の邸の近邊をあなた此方と徘徊して姬が外出するを窺ひしは。まことにおろかなりし振舞なりけり。斯るべしとは豐原家にては。誰も心附きしものだになければ。ある日夕暮の事なりけり。家令縣居が一個女。其名をお道といふ愛嬌者。姬君の代理として何か御祈禱の筋でもありてや。根岸のさる處に住ふと聞え

し。江東法印を訪ぬるとて。一個でチョコ〳〵と立出けり。お道の其日の扮粧は。當世流行の束髪姿。島田を見慣れたりし眼で見てさへ。縹緻がさがり卷と思はれざる。天性丸顔出の佳人なるゆゑ。結句淡白なる挿頭の花。さすが似合ひたる西洋服。これは利子姫の御不用をば。近頃いたづいたる者と見えたり。西洋姿をして御祈禱三昧。どうやら矛盾したる話に似たれど。表裏相違するは浮世の常。たとへば愛國家と陽邊に見せても。内々私利を圖る當世の人情。それらと引比べて見た時には。まだしもありがちなる世間の不都合。笑ふはなか〳〵に不通なるべし。さる程に中津國彦は。此日も例のごとく我家をたちいで。丑天神小石川大和町の前あたりを。彼方此方とたちまはりて。姫や出來ると窺ひをりしに。今しもゆくりなく一個の娘が立派な洋服をば身に纏ひて豐原正夫ぬしの表門より。人力に乘移るを見たりしかば。さてはと且喜び且勇みて是こそ豐原家の姫君なるべし。其容貌の麗はしげなる。其粧服のきらびやかなる。一度も面を見たる事だもなけれど。兼て美しいと聞たるからには。爭でか此美人であらざるべき。精妙々々と。勇みはしたれど。時しも眞日中の事にてもあり殊には人力車で走らせたるゆゑ。卽座に手を下して盜まんやうなし。されど彼が後を尾ひゆきなば。日もだん〳〵に暮るべければ。盜まむ便宜なども自然に生ぜん。マヽヨ。おのれもまた車にのりて。滅多矢鱈に後を尾ひて彼が行さきまで蹤て行べし。

さすれば好機會がなからずやは。しかなりしかなりと心に頷き。辻の人力車に飛乘して。お道が行方へと尾ひゆきぬ。嗚呼淺ましき哉中津國彦。只管一旦の痴情に溺て婚儀の大事たるを忘るゝのみかは。利子の姫君とは似ても似つかぬ。お道を利子姫と思ひ違へて。之を奪去んと企つる事。まことに憫れかへる振舞といふべし。蓋し國彦の粗忽かしき。利子の姫君のおん容は。果して如何なるかを見も定めず。わづかに聞かじりし容顔をたよりに。姫を盜ままくほりせしかば。斯る間違も生ずるなれ。眞の高尚なる戀情もて。男女相慕ふ時に於ては。決して此樣なる不都合はなけれど。偏に一旦の痴情に任して。婦人に親ままくほりする時には。得手此樣なる痴戯をこそすれ。慎むべきは劣情なるかな。

さる程に中津國彦は。お道がゆくかたへと隨ひゆきて。竟に根岸までも到りしかど。生憎往來の人多かりしかば。手を下しつべき便宜もなし。しかるにお道は車を下りて。とある家の前に立寄つつ。格子戸引すべらして内に入りぬ。但見る其家は修行者と覺しく江東法印といふ表札を掲たり。偖は此家へ來りしなんめり。しばしは用向にて時間どるは必定。われも車より降居て待べし。空も雀色になりにたれば都合は頗るの御前上等。上々大吉となりたれども。車夫めが俟てるのが甚だ邪魔なり。突然あの車で歸られては矢張手を下さむ便宜はなからん。何とか工夫をしてあの車

夫をば。首尾よく退拂うて除たいものぢやト。右さま左さまに思案を運らし。頻に智惠袋を絞る折しも。たちまち格子戸を内より開きて。車夫をヲイ〳〵と呼近づけ。紙幣を一二枚手渡して。何やらコソ〳〵と低語きしは。夜食を喰て來いと命ぜしなるべし。車夫は二ツ三ツ低頭をして。車を家の前へ引寄せおき。毛布をおのが肩に引掛ながら。彼方の街をさして走りさりぬ。國彦此體をば打見やりて。たちまち一策をば案じいだしつ。急ぎ車夫の後邊に隨ひ。街へとたちいでて。彼方を見やれば。車夫は案の如く煮賣店に入りて。今しも夕餐をば求むる體なり。國彦偖こそと心に頷き。おのれは傍なる駄菓子屋にたちより。駄菓子五錢程買取つゝ。それを愛素にして腰打かけ。急ぎ筆硯を主人に借受。何やらサラ〳〵と書認め。堅く上封して其家をたちいで。車夫が憩ひ居たる茶店におもむき。急いたる面色していひけるやう。(中)ヲイ〳〵。豐原さまの車夫は居るか。「車夫は食ひかけたる茶碗をさし置き。(車)ヘイ〳〵居ります。何か御用で。(中)ヲウ急用がおこつた。お姫さまが急病だから。イヤ持病のお癪氣がさし込んだので。イヤハヤ大騒ぎだ。おまへは大急ぎで此手紙を持て。大和町までいつてくんな。車はあの儘で置てもいゝから。ヲイヲイ。早くト急たつれば。此車夫も山出男天保通用の恍然者と見えて。中津がいふ所を眞實に信け。お道をお姫さまというたを聞けども。そこらを變だなどと疑ひもせず。ヲツト畏つた。そ

いつは大變。早速お邸まで馳てゆきます。何分人力をト會釋もそこ〳〵。箸と食代とを一所に投だし。手紙をひツつかんでかけゆきけり。後打見やりて中津はうなづき。ハテサテ頓痴氣な粗忽者め。マヅ〳〵一方は甘くいつたト獨腹の中で打笑みながら。手早く身に纏ひし羽織をぬぎすて。尻を端折りて元の所へ戻りつ。以前の人力車に腰打掛け。娘のたちいづるを今か〳〵と。胸をドキつかせて俟折しも。お道は用向をば終りしと見え。ハイ左樣ならの聲もろとも。漸く格子口に降たちつゝ靴を穿かんとする音など聞えぬ。(お道)ヲイ車夫居るかい。「中津はこゝぞと。一生懸命。(中)ヘイ居ります。戰慄聲擬聲して人力車を。やゝ門口に牽寄すれば。お道は何の心もつかず。格子戸ガラ〳〵と引開つゝ。(道)ヲヤ暗いぢやないか。提灯を點ないのかい。折しも送つて立出たる。江東法印顔さしいだして。(法)ヲイ車夫さん附木がないのか。サア提灯をだしなさい。こちらで點火てあげませうトいはれて中津は閉口窮迫。絶體絶命危急存亡。モウ斯なつては破れかぶれと。短氣は損氣と知らぬ火の。擬聲だに出ればこそ。マア今直に點ますからマヅ兎も角も。トお道の手を取り。强て車に乘んとする。其聲音といひ樣子といひ。出入の車夫ぞと思はれねば。アナヤと叫びて二足三足退くお道驚く法印。何事ならんと格子戸あけ。さしだす鼻先突出す顏。中津と法印物の見事に。頭合せしてアヽいた〳〵。中津は尙もお道を捕へて。車にのせ

んと追まはる。事の不思議に江東法印。偖こそ曲者ござんなれ。と走りかゝりて中津の襟がみ。エイヤとつかんでエイヤと引く。血氣の國彦剛毅の法印。しばしは勝負もつかざりしが。何をいふにも中津の方には。巡査が或は來はせぬかと。恐るゝ心が五分あるゆゑ。次第々々に腕なまりて。あなやと思ふ其間もなく。たちまち法印に組仆され。あげくの果に三反あまりも。彼方へエイヤとなげられたる。無殘の敗北意外の不名譽。眼のとびでる程鼻柱を。伊丹にあらでタツ〳〵タラリ。瀧の水なす鼻血の汐時。上汐所か大達をも。あざむく彼奴に敵たふこと。兎てもできぬと臆病風。吹とぶごとく中津國彦。あとをも見ずして一生懸命。一足出して我家へと。こけつ轉びつ逃かへりぬ。家へ歸りてやう〳〵にホツと太息をつく〴〵とまづおのが身をかへりみれば。身のうち彼方此方摺むきしのみか。悲しや虎の子と崇めたりし。三千五百圓の公債證書を其日肌につけて出たりしかば。爲に所々磨破れて幾分か價値さへも下落りしやうなり。それより後は。之にこりて再び野心などは起さざりしか。さりとて學問など爲る氣はなく。日毎にぶらり〳〵爲す由もなく空しく尊き日を暮し居たり。詢や小人閑居して不善をなし人富貴なれば友集るとかや。何處から如何してだか數月にして。無賴の懶惰生が訪ね來りて。いつしか國彦と親しうなりつ。ヤレ花見ヨ。ヤレ納涼と甘い口先で中津を煽動て。菊が咲く頃には淺草公園乃至は團子坂へつれだし

つゝ。一寸一晩だけ飲み明し主義。酒で根津などとはどうですネと。駝酒落半分にて大八幡へ。まんまと誘ひあげる野太皷書生。蓼々皆非也と悟らばこそ。とんだ面白い事しつた太子。公債珍寶及袍衣もツてけしよツてケとみづから浮れて。此處やかし座敷へ流連荒亡。高野のお山ほどの財産ならねば。坐して食ふまゝに次第に窮して。今は家庫をもいつの間にやら恥ともろともに書入質。さすがに氣を紅葉で利息を拂へば。期限は立田川となりたれども。幸ひ代物は流れもせず。兎に角陽面だけは從前通りに立派な屋敷持と見らるれども。其實公債さへ人手に渡して。所謂素寒貧も宜しくなれども。段々性根までが腐りし故にや。以前の熱心には似もやらずて。利子の事なんどは忘れし同樣。芳原中樓の娼妓と聞えし紫陽花といへる賤き女にいつしか夫婦の約束をなして。無理な非道工面であくがれあるきつ。隙ゆく駒下駄の減るのを悔まず。茫然二三年を過したりしは。豈淺ましき限にあらずや。扨は先つ年利子を慕ひて彼是理窟めいた議論を提出し是非とも姫君をば賜はれよと。嚴しく豐原家へ談判しは。全く其場ぎりの浮氣にいでし歟。さらずば約束の婚姻期限が。正しく五年前に瞭然たるのに。などてか家庫をば棒にふりすて。折角取纏めし公債證書を。ムザ〳〵散亂につかひ散して。身の後楯を失ふべき。變りやすきは人心。あきツぽきは男の魂。ハテサテ是非なき境界にぞありける。

第四回

深閨の物思ひ

忍ぶれど色に出にけり我戀は。物や思ふと餘所人に。面見らるゝが懶しとて。奥の一間に隱口の。愧かはしさと本意なさに。獨くよ〳〵物案じ。敏慧く見えても娘氣に。なぐさむ便も知らぬ火の。心盡に身も痩て。憂事つげの小櫛さへ。なは代時の早乙女歟。束ねし髪にさしかざす。櫻の花も鳥の音も。唯憂しとのみ聞做して。利子の姫はたゞ一個。小庭に向ふ窓の戸に。身をよせかけて悄然と。歎息つく〳〵庭面を。ながめがちにぞ見え給ふ。お氣に入の腰元お道(年の頃は十七八。頗るの剽輕者にて。お姫さまとは友達同樣。時々ぞんざいなる言葉はつかへど。決して主從の儀は紊さぬとんだ發明なる感服娘)間の襖押開き曲みなりに手をつかへ。(道)モシお姫さまへ申上ます。御前さまが御意遊ばします。明日はいよ〳〵千歳座へ參るからお姫さまにも是非御同道遊ばしませツと。ネエお姫さま。お出掛遊ばしませヨウ。(姫君は眉を西施形にひそめたまひ。(姫)せつかくのお催しだけれど。アノわたしは廢止ませうヨ。なんだか心持がよくないから。(道)アラお

姫さま。それが宜しうございませんヨ。貴嬢があんまりお鬱閉あそばし。どうやらお氣合でもお惡さうゆゑ。御前さまが御心配遊ばし。ちつと御保養でも遊ばしたら。結句お氣が晴て宜らうとて。斯樣に被仰るのでございますもの。(姫)それだツても妾は。(道)アラア。不可ませんネエ。貴嬢はまた國さまの事をお思ひ遊ばして。お鬱閉遊ばすのでございませうが。モウいゝ加減におあきらめあそ諦念遊ばせな。貴嬢が如何程に思召たツて。お先方がお先方で被爲入るんですもの。あはびの片思とやらで。眞個に阿房らしいぢやアございませんか。モウ中津さまの事なぞは。全然放擲ツておしまひ遊ばせ。(姫)アラ又してもお道とした事が。ほんに氣樂さうな事ばつかり。妾は國さまの心變りを。怨むの嫉むのといふ譯ではないが。萬一國さまが此頃のやうに。以前のお約束もお忘れあそばし。賤しい藝者などに心を奪はれ。うか〳〵年月を。トいひかけたまひて。覺えず涙ぐみし目を拭ひて。(姫)お廿三といふも最早咫尺の間。若し國さまが其時になつて。家庫御財産を御所持でなければ。以前のお約束も破談とやら。サアさうなるも宿世の因緣。決して下々の娘子どうやう。女々しう愚痴な事をいふではなけれど。只々氣に懸るは豐原の行末。御兄さまは知ツての通り。段々世間での評判もわるし。到底は御隱居をおさせ申して。お代をかへないではならないぞと。内々誰彼もいうて居るとやら。又二ツには。トいひかけたまひてすこしくお聲を低めたま

ひ。(姫)あの萩野さんとおつしやるお方が。折々妾へのお玉章のお便り。あだいやらしい横戀慕。主ある此身へ大それたと。其度毎に腹はたてども。さう立派さうに言はれぬのは。國彦さまの今のお身持。もし國さまと萬々一。添れないやうな譯ともなつたら。あの萩野面が否應なしに。妾を貰ひたいといふのは必定。サアさうなつた日になつたら。此豐原の一家の浮沈。あの萩野面が邸へ入込。トいひかけて又も聲うるまし。(姫)妾はたとへどうなつても夫と思ふは國さま一個。親のゆるした御方の外には。夫は持まいと思つて居れども。もし國さまとの御縁談が破談になつた其時には。主ない此身であつて見れば尼になりたいともいはれぬ譯。見す〳〵貞女の道に背き。あの憎らしい萩野面の。翫弄物になる事歟と。思へば妾は朽惜い。それのみならず屋舗とても。萩野の勝手に任したなら。いよ〳〵世間に負債もでき。信用もます〳〵惡くなつて。血統正しい豐原家も。竟には華族とあがめられた。其名譽さへ。トいひさしつゝ。又もや涙を押拭ひ。(姫)そればツかりが苦勞になり。妾は夜の目も。あひませぬわいのう。○國彦さまは血筋の御方。殊には正しく親々の。許可を受た夫婦の中。此心配をも打明て。力になつて貰ひたさ。泥江にはえる蓮ツ葉な。浮た心はサラ〳〵なけれど。たゞ家のため。身のために。相見ぬ御方がなつかしく。斯して苦勞をして居るもの。どういふお氣か先年の。御熱心にも似もならず。おん貯蓄の公債さへ。湯水のやうに

此頃では。花の街の放埒に。益なく御つかひあそばすとか。賴がたきは男氣と昔の人もいつたとやら。秋の扇と棄られた。此身はサラ〳〵いとはねども。家の行末。國さまの。おん身の上が案じられる。察してたもや。トひれふして聲に泣く音を忍ぶ摺。とりみださねど女氣に。かきくどきつゝ歎きたまふ。御道理さまやとゆふだすき。かけかまひなき腰元も。主を思へばさすがにも。貰ひ泣してベソをかき。鼻はつまれど不樂。おもしろからぬ世の中に。愛素もこそもつき出す。鐘はいづこぞ兩人が。思案と共に暮かゝる。空や愁の色なるべし。

○嗚呼國彦はあやかり者なり。姫にこれほどに思はるゝは。如何なる先ツ世の好果報ぞや。しかるにこれを棄て彼をとる。蓋しいまだ姫を見知らざるに因る歟噫。

第五回

溫泉場の大虛喝

秋來ぬと。目にはさやかに見えねども。涼風だちて客足の。いつしか稀になりはひの。閑暇なにそれと白妙の。浴衣もどうやら寒さうな。九月中旬の正午過。鶯谷(上野の岡)の溫泉の。奥

の一間に高あぐら。今湯あがりの一個の客。たいくつさうに惘然と。頻に煙草をくゆらしつゝ。煙管。鳩首諸共に小首傾げて思案顔。其人品はいかにといふに。

年の程は廿一二。色は白けれども麗やかならねば。一目亞細亞産の動物なりとは。誰にもわかりさうな。黄んだ面色。眼は近眼ぞとも思はれねど。兎角眼前の物のみ見て。遠くは眼の届かぬ不便な質なり。鼻は羅馬鼻とは參らねども。別段低いといふ程でもなし。然し憾らくは此人には。鼻を濫用する癖ありと思して。つまらぬ平凡功名をしたる時にも。屢此鼻をうごめかすと思しく。是を濫用といはずして何ぞや。口は薄脣にて能く動けど。概ね口眞似に用ふ事多かり。齒は次第よく並びてあれども。幾分か根が堅くもあらぬと見え。切齒扼腕の其砌に。忽ち齒切を中途で廢して。グウタロベエ乎となる妙な病あり。耳は二ツとも滿足なれども。世にいふ筒耳といふのにや。頗る緊切なる大事を聞ても。右から左へと筒抜にする事あり。例ば獅子が來た御用心なさい。ソラコソ鷲がきた御注意なさい。と屢傍の人が忠告なしても平氣の平左にて恬然顔なり。是等も此人の病といふべし。頭は路易十四を氣取つた者にや。滅法長々しう延たりしを。肩のあたり迄も垂たはよけれど。別に肩當でもなさざる時には。お召が汚るのを奈何かなすべき。身幹は五尺あまり。手足も人並には肉附きたり。之を全體より評する時んば。まづ〳〵日本風の好男子。動作行

住がしとやかなりせば。華族の御宴席に臨みたればとて。汚辱をとるまじとぞ思はれける。

去程に件の男は。煙草も漸々に喫あきしと見え。二ツ三ツ四ツ欠伸をなして。(男)ア、〳〵。弱つたぞ〳〵。十年一覺す揚州の夢。贏し得たり青樓薄倖の名。此頃は面工が不の字で。どうも失望の續くには恐れる。司法省の御用係は是非とも出來るのだと豫期して居たのに。ガラリと外れるとは情ないなア。いつそ地方へでも稼ぎに出ようか。イヤ〳〵中學校の教員なんぞは。頗る我輩には不適當だテ。嗚呼伯樂は何處にある。千里の逸物の嘶くを聞かぬか。嗚呼々々〳〵。しかし現今は虚喝の世の中。虚喝の吹方の巧な奴輩が。優勝劣敗で用ひられるテ。我は生來が正直だもんだから。苟にも虚喝なんぞは吹いた事なく。眞面目で地位を得んと望んだからして。こんなに窮谷に立到ッたのだ。ヨシ〳〵是からは主義を變じて。ズット虚喝主義で威かしてくれよう。イヤまてヨ虚喝ではいかんテ。いつそ詔諛主義を取つた方がいゝかナ。時事新報でも論じた事だが。兎角立身にはお鬚の塵だテ。しかし我のやうな我儘者では。お世辭が六々にはいはれんからして。寧ろ虚喝の方が持質にあるかナ。ハテどうした者であらうなア。天保の皮どうするもんか。兩樣共に用ひて見よう。アヽ誰かやつてくれればいゝナ。まづ手はじめに試みて見よう。折から恰ど隣の座敷へ。今あがり來し一個の老人。地方の官吏と見られたるが。覺えず此方を打

見やりて。以前の男と面見合せ。(老)ヤ。あなたは中津國彦さんでござりませぬか。トいはれて此方も打驚き。(中)これは寔にお久振。あなたは山賀退藏さんでございましたネ。これは〳〵と計りに。思ひ寄らざる對面に。二個はしばらく時候の挨拶。一別以來の物語に。酌たる茶さへも冷しにけり。そも此山賀は如何なる者ぞや。聞是京都府の士族にして。中津國彦が幼稚頃色々世話になりし男なりしが。中頃靜岡縣の官吏となり。近頃縣用にて出京なし。數年振にてゆくりなくも。こゝに國彦にあひたるなりけり。退藏は小膝を進ませ。(退)うけたまはれば國彦さんには。たしか豐原家の令嬢をお娶りなさるやうに。(中)ハイ。明年の春を期して。僕が妻にする約束です。(退)それは實以てお芽出たい次第で。エート近頃は失禮ながら。何省へ御奉職でございますか。「中津はこゝぞと咳拂ひして。(中)イヤ何省へも奉職しません。イヤ何も困りますテ。已に一昨日の晩であつたが。態々九鬼から手紙をよこして是非文部省の少書記官にと。頻に申越した次第ですが。實は其以前に東京府知事が。僕に依頼された事があるから。正可一方を蔑にして我意に決斷する譯にもいかんし。且は新聞社の仲間からも。エ。アノ何です。報知と明治日報の二ケ所からして。僕に來てくれろと申してよこすし。いくら義理故だといつたからツて。官吏になつたなどと聞いた時には兎角民間の記者なんぞは。直に偏執を興しましてネ。變に邪推などを

致しますから。節を換へた抔といはれるもいやさ。それに此頃は八方からして新奇の著述物を頼まれるので。イヤどうも首が回らず。何さ。二三日机に向つて。眞地目で筆を取れば二部や三部は。忽地脱稿になります譯だが。イヤどうも世の中は儘にならんもので。已に今日も横濱からして。是非に演說に來てくれろと。再三再四の依頼であつたが。今朝據ない用向で。大隈重信の邸へまゐつて。少々相談を致す事があつて。中々其樣な暇がない故。いゝ加減な口實を設けて。やつと演說丈斷りましたが。エ。大隈の邸へですか。エ。アノ何さ。今朝八時頃に行ましたがネ。イヤ圖らざる厄介を受ましたヨ。ナニ外の儀ではありませんがネ。恰ど大隈氏へ參ツた時に。今日は日曜の事ですから諸省の官員が參りあはせて。段々時事論がありましたが。竟に英語の事に及んで。斯樣に世の中が進歩をなしては。到底英語や佛蘭西語が日本の國言葉となるもしれん。然れば今からして英語を學んで。內地雜居に相成らん以前に。假令訛轉でもなんでもかまはぬ。多少洋人と談話をなすべき。準備がしたいといふ議案がでたので。其處に居合せたが僕の不幸さ。直に其教授を申しつかつて。來ル週間から毎週二度。會話の教師とは情ない譯で。イエ。あんまり名譽にもなりませんヨ。それも無爲でくらす族にとつては頗る外聞にもなる事であらうが。エ。羅馬字の會ですト。然樣さ。あれなんざア馬鹿氣たものさ。はじめ矢田部なぞが羅馬字說を唱へ

て。僕に賛成をせよといつて。屢〳〵面談にも來ましたがネ。僕アよねつけてやりましたのさ。日本も今日程進んだからには。斷然大げさに奮發して。いつそ日本語を丸ッ切やめて。悉皆英語國にするがいゝです。よしや羅馬字を用ふるからッて。中々手早くはいくものでない。どの道迅速にできない事なら。ズット大業に目的をたてて。歸着の目的を目的として。而して着手するが本道ですわネ。僕なんぞの考へでは。社會の究極の目的といふのは。世界一統といふ事であらう。果して全社會を一統して。萬國同胞となす事を以て歸着の目的となすからには。言葉も成可く丈同一にして。世界一統てふ大目的の便宜を興へるのが至當でせう。然るを因循な手段を用ひて。まづまづ羅馬字丈用ふるなどとは。所謂二度手間の時間潰し。一旦羅馬字で假名をかいても。到底後になつて英吉利言葉か。或は佛蘭西語にかへずばなるまい。是豈骨折損の草臥儲にあらずやです。ヱ。假名の會。ありやアいよ〳〵論外です。僕の原則で押した時には。假名に日本字をかへるなんぞは。所謂三度手間といはざるを得ずです。何故かといつて御覽なさい。僕がうけたまはる所によれば。假名の會員の人々のいふには。世の急進なる論者達は。直に日本字を羅馬字なんぞに。悉皆改めるといふ由であるが。それは到底可言不可行。無理な席上の論といふべし。吾等は實着なる主義を取て。實際行ひ得る事をなして。以て國益を圖るんであるとか。何んとか漢とかいふ

さうですが。若し此言をして實なりとせんか。假名の會員は取も直さず。羅馬字會員の下調役です。ハ、ヽ、ヽ。斯う論じ詰て見た日になつては。三度手間の理由。何と瞭々でございませう。ネ。ヱ。よく此頃は會が流行ると。いかさま節酒會。成。束髪會。成。衣服改良會。成程。宗教改革會。成程。〇いかさま會許りがふえましたネヱ。實は斯申すとをかしいやうだが其御話の節酒會がさ。實は可笑しい譯ですヨ。僕が先達て加藤を尋ねて。ヱ。ナニ。あの小使の加藤ぢやアございません。大學の總理です。加藤弘之を尋ねまするとと。折柄中村敬宇翁が來てゐましてネ。色々酒の害の論がでまして。僕が偶然に西洋諸國の。ヱヽナニ。アノなにさ。天ペレイト。曾サイエチイの事を思ひだして。節酒會を建てはどうだと。何の心もなくいひだしましたが加藤氏敬宇翁も大賛成で竟に御存知の盛會となりましたがネ。ヱ。束髪會。あれには僕は關係がないて。實は新神といふ男が。はじめあの會を開く時分に僕に賛成の演説をば。例の井生村でしてくれろと。頻に依頼して參つた譯だが。全體束髪の事に就ては。少々獨立の議論があるから暫く曖昧な返辭をして。漠然謝絶して置ましたが。ヱ。何です僕の議論ですか。ヱー。アノ全體束髪といふは。如何なる理由から主張したかといふに。第一經濟上第二交際上第三衛生上此三點を土臺として。日本の結髪を排撃した譯だが。第一第二の二理由の如きは。元來附會の應援説で。無論齒牙にだ

もかくるに足らず。但し第三衛生の議論に於ては。頗る取る可の處ありです。成程日本風の島田丸髷若は三輪。唐人髷或はおたらひ島田くづし。是等の込入たるデコ〳〵頭は。決して有害でないとはいはれぬ。畢竟日本人は慣れて居ればこそ。別に疼痛をも感ぜぬ譯だが。少しく心附いて見た日になつては。實に驚く可き馬鹿氣た習慣。身體に害になるは必定ですテ。然らば束髪會賛成歟と必ずおつしやるでありませうが。否けつして然でないテ。僕は日本風の結髪頭を。改良なさんとこそ思つて居れども。けつして何事も西洋々々と碧い眼玉どもを眞似たくはないテ。イヽエサ。負惜みでいふのぢやアありません。西洋人の行ふ所が。果して確乎不拔であつて。決して誤らざる眞理であるなら。成程彼奴輩をば模範と仰いで。萬事の改良をするのも宜からう。然し考へて御覽なさいヨ。ミルの聲色を使ふぢやアないが。人間は終始「フホウリブル」。イヤサ兎角誤謬に陷り勝な者で。當時は認定して善と思ても。後世に之を見て不善とするやら時世々々の變遷でどう成行かもしれない事。哲學完全の程度に達せず。究理其奥に到らざる限は。如何なる是れ之を眞理といはん歟。決して定められた者ではない。耶蘇聖人のジウダに生るゝや。輿論之を見て妖賊と做し。ポール尊者の賢明を以ても。尚聖人を知る事能はず。耶蘇が聖教を說くのを聞いては。切齒扼腕して腹をたつて。咄妖賊めと罵つたといひます。して見りや輿論とても當にならん。たとへ

歐洲の文明諸國が當時用ひて居る風俗だからツて。必定最上とはいはれぬ譯です。衣服は筒袖に限る者だの。ヤレ細袴風に限るなんぞと。世間の開化狂が喋々りたてるが。僕は此輩には與しませんヨ。イエサ何故に細袴に限るか。イヤサ何故に筒袖に限るか。開化狂がいふ所によるト。束髪は働くに便利だ。洋服は働くに便利だ。ヤレ便利ソレ便利と。妄に便利主義を提出しますが。顧ふに開化狂は。ベンザムが實利の御說教を嚙違へて。實利を實用と心得てしまつて。實用が肝腎だと思ふのかしらんが。人生終極の大目的は。是も判然とは定め難いが。マア假定して最大數の最大幸福。幸福とは何をかいふ。到底快樂といふ事でせう。知らず快樂は何者よりなるぞ。曰く精神の快樂。曰く肉體の快樂。此二ツより外にやアありますまい。所謂肉體の快樂のうちには衣食の樂も籠つて居るから。衣食も中々馬鹿にやア出來んテ。暖衣飽食すなはち足れりと。ズツとすましこんで居た時代は所謂堯舜の蒙昧時代で。今時其樣な主義はいけませんテ。人間お互に孜々汲々。刻苦拮据して勉强するのは。イヤサ。汗水をたらして稼は。抑亦何の爲です。蓋し綽々たる餘融を得て。衣服食物はいふも更なり。其他百般の事々物々も唯に命を維ぐ爲許りでなく。幾分か精神をも養ふ程な完美な物件にしたいのが本願。此本願が遂たい計で。ヤレ權利とか。ヤレ立憲とか。色々政治にまで及んでさアネ。政治を議するのは權利を重んずるが爲です。權利を重

鶯溪乃夫嘘鳴

んずるは幸福を重んずるが爲ですネ。ソラ。幸福の原素は何です。ソラ。第一に自營の道。卽ち衣食住にございませうがネ。然し只食ひ只被るのは野蠻も大方は成得て居る事。僕等が希望する衣服と食とは。決して其樣なものではないです。未來の幸福の基礎ともなるべき。御前上等のがほしい譯です。僕が退いて考ふるに。日本の袖の長い衣服なんぞは。頗る風致のある裝服だから。或は人生の歸着の望に相應して居るかも知れないですテ。何故といつて御覽なさい。衣食足つて禮節を知り。自營成つて他營に及び。他營なつて美を弄ぶト。スペンサアもいつた通り。人が段々に進化をしたなら。終には綽々たる餘地が生じて。美妙の妙想をば樂む事をば。其本望とするかもしれない。知らず長袖と筒袖とは。いづれか美妙の趣に叶つて居ますか。長袖善舞ふとは。陳腐な言だが。僕がツラ〳〵と考へても。矢張長い方が風致があります。是は因襲の久しきよりして生じた癖見とはいはせないテ。已に英吉利の社會にがても少し體裁をば要する折には。ガウンといふ者を被ます譯です。ガウンは長上被と稱する者で。日本の僧服などに似て居ますヨ。或は大學の卒業生なども一種の長上被を被て居ますテ。現に東京でも南條文雄などは被て居た樣だし柴四朗なども被て居ましたヨ。エヘン。是に因て之を觀れば日本の裝服も棄た者ぢやアない。むやみに洋服に替へるよりも。和服改良を圖るといふのが。極の正論かと思はれますテ。兎角。

日本人は氣概に乏しい。動もすると人眞似ばッかり。獨立獨行する氣性のないのは。實に慨せざるを得ざるなりです。束髮の一條も之と同理で。何も西洋の左捻り或は糞たばねが世界第一。萬古冠絶と極りやアしない。顧ふに日本風の前髮なんぞは。最も面白い一機軸さ。僕は近年に泰西へ參つて。佛の巴里城に旅寢をいたして。都下のレディ達を說得して。悉皆前髮を結はせて見せます。エ。其洋行の費用ですか。ナニ近日に橫文字新聞を發兌しますから。遲くも來春の三月頃には。無慮二千圓は儲る積です。最も貯への財產も公債證書のみが一萬圓。其他雜財が金につもつて。凡二萬圓もありませうから。兎に角二三年は大丈夫です。エ。其新聞の名ですか。エー。ゼ。イースト（The East）と命じます積です。卽ち東洋新聞といふ意義です。ヲツト。お話が外へ轉じた。コウツト。何とか論じかけて居ましたッけ。さう〳〵前髮の稱贊でしたネ。マア前髮は兎も角もとして。其他髭なんぞを出すなんぞも。頗る面白いといはざるを得ずです。是は西洋にも支那にもないから。プライマフハシイには可笑くも見えるが。中々〳〵洒落切ッた工夫であります。それに先刻も申した通り。人間終極の大目的が。果して便利といふ事でもあるなら。便利を第一とするのもよけれど。美を樂むといふ一義が。萬一目的の原素であるなら。粧ひ飾るといふ方便なんぞも。今から考へざる可らざる事で。殊に女子は男と違つて。專ら粧飾る動物ですから○是は造

化の妙配劑ですテ○男子に腕力を與へ○ネ能うごすか。女子に美貌を與へ。以て相防ぐに便ならしむ。エヘン。僕ながら甘くいひましたネ。ですから女子共は工風をこらして力めて容づくるのは自然の道理で。容づくらぬのは能うごすか。若し女に美貌といふ者がなかつたなら。男子の壓制を防ぐ方便がございますまい。美色は女の干才なりとは實によくいつた名言ですテ。間違つた譯です。已に容づくるといふ以上は。衣服頭飾は申すに及ばず。百事悉く其身に應つた程のよい者を採らざる可らずです。西洋人は氣候のお庇で。若くば其人種の異なるが爲に。髪の毛赤やかに縮れてるのみか。額廣く面貌圓く背もスラリツと高いからして。髪を束ね上げて愛嬌毛を垂れると。縮毛バラ〳〵と面に懸つて。大きに。其美色を添へます譯だが。日本の女は概して矮小。顏は長いし額は狹いし。背が高ければ面が長く。背が低ければ面が丸し。おまけに髪の毛が縮れて居ぬゆゑ。若しバラリズンと垂た時には。何だか綠は居ぬか。アイヽヽヽヽといひさうで。變ではありませんか。然いふのは癖見だ。慣習の然らしめし所だ。見なれりやア可笑くないト。束髪贊成家はいふかもしれんが。そいつ甚だ險呑な議論だ。煙草も燒酒も飲はじめは誰も否がつて嫌ふ譯だか。喫なれゝば喜んで喫む。然らば煙草と燒酒とは。元是人間の喫むべき者歟。否慣習の然らしめし所なりです。見慣れりやアよくなるといつて。僕の說を駁のは血で血を洗ふと同じ事

で慣習論で慣習論をうつやうなもの。決して勝敗の標準にはならない。否。標準にならない計か。頗る壓制な論鋒だから。何にもしらぬ匹婦匹夫は往々此法で欺されますテ。何所かの新聞にありましたヨ。ソラ外國人の誰とやらが日本の結髪の風を頻にほめて。日本は面白い工夫をする。吾等の國共にはない風ぢやが。帽子や花なんぞを假ないで以て。天然自然成の髪の毛を束ねて巧に粧飾の一部となすのは。甚だ妙趣向とほめたとやら。マア其事は一箇人の所謂獨斷と排した所が。矢張僕の說は堅固なものです。僕はデコ〳〵の丸髷島田を。決して擁護する譯ぢやアないが。さりとて束髪をも贊成しない。蓋し僕の意は改良にあり。盲目滅法なる眞似主義にあらずッ。トしきりに圖に乘つて出放題に。中津が喋口たてる聞取傍聞。此方は地方者の天保產。殊には西洋語がまじつて居るので。議論も半分餘はわからねども。あんまり虛喝の音が大業なるゆゑ。呆氣に取られてしばしの間は。成。成。ハア〳〵の返答さへとぎれて。欠伸をする程にぞありける。中津は傍の急須を引寄せ茶を波々と汲たゝへて。一息にぐッと呑ほし。面白半分膝進ませ。(中)扨序だから申しまするが彼の北畠の道龍法師が。此頃はじめました宗教改革。トいはんとするに。山賀退藏。此御談義を聽かされてはみろくの世までも湯舟の中に浮む瀨ある可らずと悟りしと見え。いそがはしく聲をかけて。(退)イヤモシ國彥さん。其御高說は面白うございませう。是非承

はりたい義で有ますが。あまり熱心に先刻より。お説を拜聽した故でもあるか。大層身のうちが熱しまして。汗が尾籠ながら出ました次第デ。ハヽヽ。失禮ながら一浴いたして。其後拜聽をいたしませう。トいひつゝさながら逃るが如く。風呂ある方へと立てゆく。中津は跡に本意なき顏色。口あんぐりとすきやの羽織。飛白と共に引寄つゝ。やをら浴衣をぬぎすてて。衣服をきかへ帶ひきしめ。手を打鳴して女中を呼び。湯錢席料拂ひ了りてやゝ立去らんとなしたる折しも。忽ち後に一個の人あり。「ヲイ中津さんト呼かけたり。中津は吃驚ふりかへれば。是なん兼て相知りたる某省の官員にて。曾ていくらか金子を借置き其儘にして返しもせず。今日まで棄置たる事なる故中津はハツと赤面して。如何はせんと進退谷り。ほと〳〵當惑なしたりしが。こゝぞお世辭の入用時。お鬚の先の塵取主義。イデ實行して效能を見んト。さも殊勝らしく打笑みながら。膝まづきつゝ頭をさげ。(中)誰君かと思ひましたら生津さまでございましたか。其後は甚だ御無音をいたして實に申譯もございません。寔に赧顏な次第ですが。何分先達ての恩借の金子を。未だに御返濟致しまする譯に。ハイ。イエ。決してさういふ譯ではございませんが。エー過日束根さんに賴まれまして。束髮會贊成の議論を草しはじめましてト。口から出任せにいひ出るは。此生津といふ官員事は。非常の束髮熱心家にて。妻女が束髮を嫌つたといふので。竟に離縁した程の豪

傑。中津は其邊をば知つて居る故。其處等をお阿諛の土臺にして。徐々持かけんず心底なり。生津も愚なる人物ならねど。國彦の出鱈目にフハとのせられ。(生)エ。何といはツせる。おまいが。束髮の論を書かツせるか。それは定めて面白からアずなン。如何いふ議論か聞たいなン。(中)何も是といふ議論でもございませんが。實は其起稿にかゝりましたので。外の飜譯を打棄置まして。それ故書肆からして金子を得ませず。(生)ナニそんな事はえいワ。其議論が聞たいなン。おまいが新しう書く位でや必ず普通の說でやなからず。(中)ハイ少々は機軸をだした積ですが。(生)マア如何いふ主意でやな。トいはれて中津も當惑なし。早速新趣向も附かぬれど。例の向不見の鐵面主義。平氣で二ツ三ツ咳拂ひをなし。(中)エー。私の考へまするに。凡束髮と申す者には。所謂三利益の其外にも。エー。多少。大裨益があると思ひます。(生)ハヽア。それは新說でや。余輩も同僚の反對論者と。屢束髮の利害を論じて。折々三利益の說ばツかでは。危ないやうに思ふ事があるでやテ。ヘヽイ。其別にある利益といふは。(中)サア其裨益と申しまするは。(生)ヘヽイ其利益といふは。(中)エー。其利益といふは。エー。第一に政治上の利益です。(生)ハヽア。大層に大きく出たなア。(中)其の然る所以を申せば。日本の皇室の尊嚴を增し。萬世一系の皇統たるをば。萬古に傳ふるといふ因緣にあります。其故は如何となれば。古く古記錄を取調べて。古

代の風俗を御覽なさいまし、ソラ神功皇后の如き。現に上卷の束髮でございませう。若し御不審にお思ひなさるなら。紙幣を取出して御覽なさい。ヱ。さうでございませう。是卽ち束髮は日本固有の結髮たる所以です。已に束髮が古風ならん歟。之を今日に恢復して日本人民の髮の風となすは。取も直さず。神代の遺風を追慕するなり。已に神代の遺風を追慕す。豈皇室の尊きを思はざるを得んやです。今や民權の說盛に起りて。不學の徒之を誤解し。不平の徒之を敎唆し。動もすれば。官吏を蔑如し。甚しきは恐れ多くも。主上を人民の代理視なす。是今日の大弊なり。然して此弊を除かんには。抑亦如何して可ならんや。思ふに神代の事實をしらしめ。皇室尊嚴の理由をしらしめ。不學蒙昧の少年子弟の。迷を去らしむるに如くものなしと。私倩ら考へましたが。卽ち束髮の流行の如きは。暗に此手段に適するだらうと。(生)成程。コレハ一寸面白いが。シテ其外の利益といふのは。(中)扨其次は。ヱー。其次の利益といふのは。ヱー。何です。アノ道德上です。其故他なし。總じて人間といへる者は。進化の天律を遵奉して。之に則るやうしなくてはなりません。よしや衞生に害はなくとも。强ち天則に悖戻して。之を曲げ之を矯め。さながら玩物をひねくるが如くに。身體毛髮を濫翫するのは。是豈罪業にあらざらんやです。支那の女が足を縮る。蓋何が故に非なる。曰く天則に悖ればなり。西洋貴女が腹部を緊束る。抑亦何が

故に非なる。曰く天律に背けばなりです。(生)ヲイ〳〵其事は已にいつた者があるやうでや。(中)イヤ申したかもしれませんが。未だ道德の罪とまでに。明言いたしたのはありませんテ。總て天則に背くといふのは。最も人間の恐るべき罪で。已に英國の某の如きは。鬚は造化翁の賜なり。男女を區別すべき天の制なり。髮をそるは男子の尊嚴を損ふの業なり。髭は男子の美をますの具なり。云々とまでにいはれましたテ。髭の論で心附きましたが。あなたも大層にお立派に。イヱどうして大層にお延びなさいましたヨ。斯申しちやア何ですが。あなたはお容貌が白皙人種に似ておいでなさるから。最もお髭が似合ひますヨ。トしきりに八の字髭をほめたてながら。束髮裨益論を中止になさんと。必至に盡力する其折から。女中がバタ〳〵走來りて。(女)お客さま。お連さまが。(生)ヲウ來たか。こちらへ呼んでくれ。中津はホツと溜息つき。是を機會にとゑしやくもそこ〳〵。店の方へとはしりゆく。時しも隣の一間の中より。のつそりいでたる。二個の客。互に面を見あはせつゝ。(甲)縣居さん。あの體なら大丈夫ですネ。(縣居管兵衞)萩野の御前が御心配をなさるには及びません。此方で手を下した譯でもなけれど。自分であの通りに馬鹿になつて。さながら貧書生のゴロツキ同樣。遊びまはつて居ります體ゆゑ。(甲)あれでは明年に相成つたとて。兎でも身を立べき樣子もなし。例の約束は

名義ばかり。最早や破談したも同様の事。早速此旨を萩野さまへ。折から上野の鐘ボーン。(兩人)ドリヤ參りませう。

第五回

大團圓　麻布の狼狽

隙ゆく駒に關守なければ。月日は會釋もなく過行きつゝ。兼て豐原の利子姫と。婚儀の約束はなし置ながらに。何の準備さへも中津の國彦。いつしか二十三の齡とはなりける。盗人を見て繩にはあらねど。後悔臍の緒を切ての不覺と。今更しかすがに惑ひも醒め。兎や角其用意に工夫を凝らせど。年頃うツかりして資産を費し。肝腎要なる家藏地面も悉皆書入になり居るのみか。已に今月の月末までに是非とも借た金を皆濟せざれば。利息が一年越したまりたるゆゑ。もはや貸方にて延期をゆるさず。家庫地面共に請取るべしとて。度々催促する切迫となりたり。さりとて家藏をば人手に渡して。本來空ことには困ずとも。家なし無財産の書生となりなば。必定豐原家も故障を唱へて。緣談破約などをいひいづべし。ハテサテ此急場を如何したものか。と中津もなかづには居

られぬ仕儀。頬杖ついて見たり。手を組んで見たり。恰で體操の圖式を見ながら。痴漢が獨稽古して居るが如く。いろ〳〵様々に身體をひねりて。右様左様に思案をすれども。急によい工夫がつきさうにもなし。折柄臺所から駈でる下女。(今まで洗濯して居たりしと見え。端折りたる裾を下しもせず。穢汚古湯卷を露したるまゝ。襖を押開きて立はだかり。)(下女)旦那さまお客さまが參りました。(中)エ。誰が來たんだ。留守だといへばいゝのに。(下女)それだツて。いつもの借金取ではござりましねえもの。(中)默れ。主人を馬鹿にしやアがる。おれは忙しいから留守をつかウンだ。借金取が怕いのぢやアないッ。(下女)ハヽヽヽ。旦那さまアそんな負惜いつたツて駄目なこんでございますア。此間もおめいさまが内住さんにイ。此處の家イ開渡せといはれて。(中)默れ失敬極まる。(下女)なんでわしが失敬でござりますかア。(中)また口答へをしやアがる。今直に暇をやる。出て行やアがれ。(下女)ハア出去なすべい。その代りに。給金を貰ひますべい。先々月からの分を貰ひましねえぞ。それに結髪錢も貰ひますべい。ソク髪にいつたのは。わしイ。勝手でしたこんだから。結髪錢は三四イ十二。それが二タ月分で二十四錢。おめいさまに預けて置いたもおんなじこんだ。極通りイ貰ひましねいでは濟ましねえ。(中)エヽ姦しい。女關で客が呼んでるぢやアないか。マアそんな事はいゝから。(下)ウンニヤ。よくはござりましねい。(中)エ

麻布の狼狽

エまだ喋口りやアがるか。そら又頼まうと呼んでるぢやアないか。イヽヤおれがいつて逢つてくらアと。腹立半分中津國彦。ツカ〳〵玄關へ立出つゝ。覺えず來客と面見合せ。(中)ヤ貴君は豐原さまの縣居さんでございましたネ。(縣)サテハヤ寔に暫く。(中)それでは御挨拶ができません。マヅ〳〵此方へ。ト奥に招じて。互に時候の口儀も了れば。縣居管兵衛は膝進ませ。(縣)扨今日推參致したは餘の儀でもございませんが。過般御約束の緣談の一條。已に本月とも相成たる故。結納のしるし持參までに。トいひつゝ目錄など取いだして。傍へ恭しくならべたつれば。國彦こゝぞとグツとすまして。(中)コレハ〳〵御丁寧に。此方よりして參殿いたして。御樣子伺ふべき筈の處を。わざ〳〵御枉車とは恐縮です。(縣)就ては兼々の御約條には。云々箇樣々々トござりましたが。失禮ながら此御地面。並にお屋舗は貴君の御所有で。(中)ハイ。拙者の財產でございますが。トいはんとしたる其折しも。臺所からかけくる(下女)旦那さま芝の借金取がめいりました。「中津は冷りとして下女を睨み。(中)なんだシヤキ。イヤ崎取さんがおいでなすつたと。只今客來でございますから。例の著述物の事であるなら。後程出直してお出なすつてと。(下女)崎取ではございましねえ。內住さんでござりますア。(中)いゝヨ。解ツたヨ。いゝからさういひなヨ。ト頻に目まぜにて其意を知らして。留守だとごまかして返せといへども。下女には其意味が毫末も

通ぜず。(下女)モウ留守ウつかツても駄目なこんでございますア。たつた今おめいさまが取次に出たとこヲ。見つけて來ただからねい。(中)馬鹿ツ。てめいにやア用はない。引込んで居やがれ。(下女)ハヽ。わしはア用はなうても。お客さまがおめいさまに用があるといふから。(中)チヨツ。爲樣がない奴だ。後に來いといひな。(下女)それはア駄目だツて。是非ともけふは返辭をきくツて家を明渡してもらふか。「中津は氣をもみて。頻に目まぜすれどお通じなし。(下女)金をかへして貰ふか。(中)いゝヨ。解ツたヨ。先方へ申してやつて嚴しく掛合ツてあげませうから。後程もう一度お出なさいツて。證人にたツたが不祥だ。萬一當人が間違ひましたら。わたしが取換ても返辨するから。決して御心配に及ばないテ。○チヨツ。エヽ。いゝからさういつてやんなヨ。トやう〳〵玄關へと下女を追ひやり。(中)イヤどうもつまらん友人に關係ツて。とんだ保證人になりましたので。(縣)それは定めしお困却でござりませう。動もすれば證人になつたが元で。思はぬ迷惑をする事があります。ト始終の樣子に縣居管兵衛。さてはと十分悟りしかど。元が萩野の密意をうけ。只管中津の現情をば。探らん爲にとて來りし事にて。結納持參などはほんの口實。婚儀をおこなふちふ心もなければ。態という〳〵と尻をおちつけ。なほも其樣子を窺ひたり。

○とかくする程に玄關にて。彼の内住の聲と思しく。○後に來いなぞとは氣樂なにも程があらア。なんだ證人になつたが不祥だと。惘れかへる事をいふぢやアないか。氣でも狂やアしまい。馬鹿な事を吐すな。ナンダお客がある。お客があつたッて介意ウもんか。直にあつて掛合ふから。トいふ聲あらはに聞ゆるにぞ。中津はたまらず腹の中で。扨は下女めが口條をば。聞いた通りに彼方へ告しか。氣がきかざるにも程こそあれ。なさけないやつ非道いやつと。腹の中では憤懣れど。さすがにそれと打出して。えやはいふきのさしも草。障がありとも白髪の内住。ます〳〵たけりて罵詈たて。はや玄關より客の間へと。あがり來れる樣子なるにぞ。國彦ます〳〵狼狽して。今縣居に此體をば。洞察されては一大事と。思へばきつと度胸を定めて。小用にたちたる趣して。急ぎ客の間を退り出て。玄關先までたちいでて。今かけあがりし内住とたちまち面を見合せつゝ。

(中)ヤこれは内住さん。寔に失禮を致しました。「内住は額に蕁菜のやうなる筋を顯し。(内)ヲイ中津さん。今女中から聞けば。(中)下女が何か取とまらん事を申して實に申譯がございません。實は内々折入て。(内)イヤ折入ッたお話も。モウ〳〵私は聞飽た。家を明渡すか金を返すか。二ッに一ッ。(中)サア〳〵〳〵。お腹立も御道理だが。マア一通り。トいひかけつゝ。強て内住を傍に坐らせ。何か低聲打さゝやけば。内住は漸く面を和げ。(内)エ。何といはつしやる。

それでは來月はじめまでには。豐原家のお令嬢を。(中)僕が女房にいたしますれば。持參金は少くとも。(内)いかさま三千や四千圓は。(中)たしかに僕が手に受納は必定。その時こそは元利そろへて必ず御返濟申しますから。(内)いかさま其言葉に相違なくば。高が半月の猶豫であるゆゑ。(中)御承知なされて下さりますか。ト中津がいひも了らざるに。思ひがけざる玄關傍より。走り入りたる一個の婦人。お召の小袖に繻子の丸帶。ガツクリ島田の當世姿。裳裙もほら〳〵中津のそば。かけ上りさま胸づくし。(女)エ、この不實男め。ワタイと約束をして置ながら。三月も四月もいたちの道。それさへあるにノメ〳〵と緣談三昧もよくできた。サア兼々の約束通り。ワタイは身脫をしてきましたから。今日から細君にして下さい。なんですネエ。とんまの面して。(中)ヤア手前は紫陽花ぢやアいないか。とんだ所へ。イヤどうして今頃やつて來たのだ。(紫)なんだヨウ。惘れッちまウヨ。兼々今年の冬と約束をしておいたぢやないかネエ。前借がなくなつたから。出てきたんだヨ。サア今ッから引取ッておくんなさいヨ。ワタイはおまへの女房ぢや。トいふ聲彼方で立聞たる縣居覺えず北叟笑。時分はよしと客の間より。此方へヌッと立出つゝ。(縣)こりや。國彦さん。承はれば先生には。利子殿をさしおいて。これなる婦人と夫婦の契約。トいはれて中津はいよ〳〵うろたへ。(中)イヤ其樣なおぼえはござらぬ。(紫)そりや胴欲な國彦さん。あれ

ほど堅い約束して女房にせうといひながら。(縣)さう聞く上は緣談も最早履行いたしがたし。約束破談と思ひなされ。ト聞くより内住進みいで。(内)さうきく上は此方とても。返金猶豫はいつかならぬ。家をわたすか。金をかへすか。(中)サアそれは。(紫)ワタイは全體どうするんだヨ。今日から置いておくんなはるか。(中)サアそれは。(縣)拙者は是より立歸り。此旨主人へ一伍一什。(中)マア〳〵お待下さりませ。(縣)しからば是なる債主は勿論。あやしの婦人の落着をつけるか。(中)サアそれは。(内)金を渡すか。(中)サアそれは。(紫)さうしてワタイをどうするんだヨ。(中)サアそれは。(内)家をわたすか。(中)サア。(縣)立かへらうか。(中)サア。(紫)どうするんだヨ。(中)サア。(三人)サア。(中)サア。(三人)サア〳〵〳〵返辭はなんと國彦さん。切迫つまりし其折しも。最前よりして門前に。馬をとゞめてひそやかに窺ひ居たりし一個の紳士。マア〳〵待ッたの聲もろとも門の内へと入來るを見るより縣居うちおどろき。(縣)あなたは萩野のごぜんさま。思ひがけなく此所へ。(萩)ヨウ自身にこれへ參ッたには。深き所存がある事ぢやが。マアうろたへんで其處にいやれ。トいとおほやうに萩野ぬしは。まづ玄關へぞのぼられける。かくて萩野ぬし國彦に向ひたまひて。初對面の挨拶あり。且いはるゝやう。斯くさし迫りたる上からは。寔に是非もなき次第なれば。家屋並に地面の如きは。悉皆債主の手へ渡が當然。

扨又豐原との婚儀の一件。是も此儘にて破談に成んも。いかにも殘念なる事なるべければ。兎に角利子どのは拙者かたまで。貴殿に嫁すちふ名儀にして。客分同樣に引取おくべし。貴殿も家庫を失ひたる故。さだめし行所に困るべければ。當分拙者かたへ寄寓なすべし。但し利子姫と夫婦といふのは。全く名儀のみの事なるゆゑ。相近づくこと禁制たるべし。紫陽花とやらんいへる女も。貴殿に關係ある女と聞ては。流石に此儘にも棄がたかるべし。幸ひ腰元女入用なれば。これも拙者方へ引取るべし。かくても貴殿は異存なきや。いかゞなるぞ。

と宣告たまへば。國彦頓首閉口して。無念ながらも詮方なければ。了承の旨答へまをしぬ。かゝりしかば國彦は。萩野隼人ぬしの宣ふまに〳〵。家庫地面ともに債主にわたして。其身は萩野ぬしの邸におもむき。所謂食客の書生となりけり。其後幾程もなく利子姫は。中津へ嫁すといふ名儀をもて萩野殿かたへ引取られたまひつ。萬端おんめでたくをさまりはしたれど。只つまらなきは國彦なり。毎日利子姫のおん顏を見れども。これを妻と呼びて語らふあたはず。これと相むかひて物いふあたはず。我物といふは名のみのお庭の櫻。手折がたきをなげくなるべし。めでたし〳〵。(否)ふでかし〳〵。

因に云ふ。其後は如何なりしや。編者もしらず。

誠諷京童（まことうたいきやうわらんべ）

終

追記

神代種亮

「内地雜居未來の夢」「解題」の項（三頁）『合本は發行されざりしものの如し。』とあるを、『合本は第十號と同時（但し奥附には九月）に刊行。』と訂正。

同解題（五頁）に追加。

（三）夢遊居士（大久保常吉）作　「内地雜居東京未來繁昌記」明治二十年刊行

校訂本解説補記

本書の背文字は「内地雜居未來の夢」合本の扉文字を寫したるものなり。

1876

大正十五年六月廿五日印刷
大正十五年六月廿八日發行

未來の夢
內地
韓居
附京わらんべ　定價二圓

著作權所有

著作者　坪內逍遙
校訂者　神代種亮
發行者　東京市京橋區南金六町九番地　福永一良
發行所　東京市京橋區南金六町九番地　明治文化研究會
印刷者　東京市京橋區濱山町五番地　渡邊吉郎

發賣元　東京・銀座・新橋　福永書店
振替口座東京四〇四六六番
電話銀座一五八七番

新舊時代

明治文化研究雜誌

定價　一冊　金五十錢
　　六ケ月　金二圓八十錢
　　一ケ年　金五圓五十錢
　　共料送

凡そ西洋文明の接觸をうけて社會萬般の上に激しい變動をみた明治時代ほど、世界文化史上に光り輝く時期は多くない。その「明治時代」が如何なる時代であつたかといふを、政治・經濟・社會・文學・美術其他あらゆる部門より眼を放つて研究せんとするのが「明治文化研究會」創設の理由であり、且つ同會編輯の『新舊時代』誕生の理由である。この時代の國民史上重要なる資料は今や漸次に堙滅に瀕してゐるのであるから、これを保存し、これが價値を發見し而してこれを後世に傳承せんとする重き任務に「新舊時代」は就てゐる。

新舊時代合本

第一年度第一冊から第十二冊まで

總布裝函入美本
菊判七百餘頁
寫眞版七十圖
カット數百個
定價五圓五十錢
送料(書留)二十七錢

重なる執筆者

關野貞氏　吉野作造氏　石井研堂氏　藤井甚太郎氏　小野秀雄氏　廢姓外骨氏　野崎左文氏　井田馱天氏　中尾清太郎氏　鳥居龍藏氏

荒木三雄氏　杉浦平六氏　久保田米齋氏　神代種亮氏　清水連郎氏　織田一磨氏　湯朝竹山人氏　井上和雄氏　尾佐竹猛氏　石川巖氏

渡邊修二郎氏　鈴木券太郎氏　山崎宇治彦氏　藤田斗南氏　原胤昭氏　波多野賢一氏　藤懸靜也氏　坂本箕山氏　和田千吉氏　以上

宮崎滔天著

解題、索引（吉野作造作）
著者小傳（宮崎龍介作）　添付

三十三年の夢

四六判三百餘頁
寫眞三圖
定價金二圓
送料二十錢

本書は著者の自叙傳である。明治初年に生れた有爲の青年の受けた教養と、その歩んだ道の如何を本書は巨細に語つて居るのみならず、志を東洋全局の革新に立て遂に支那の孫逸仙と結んで初期の革命運動に骨身を碎いた一團の志士の隱れたる史實が叙べられてある。一部の傳奇的支那革命史であると同時に亦日支兩國内面關係秘史とも謂ふべきものである。

加之著者の數奇風流の運命と、飾る所なき其の赤裸々の告白と、巧まずして人を魅する其の名文とは、單なる讀みものとしても吾人をして一讀遂に卷を措く能はざらしむものがある。

私は支那革命史の良參考書如何を曾て孫逸仙の一派に問ふて始めて本書の名を聞いた。その漢譯が今日なほ廣く支那で讀まれてゐるは言ふまでもなく、創刊當時日本でも版を重ぬること十數回に及んだとやら。私は支那初期革命の眞相を告ぐる貴重なる文獻として、又一代の漂泊兒奸漢滔天君の僞らざる懺悔錄として、多年本書を愛讀書十種の中に數へて居る。今日之を再刻して世に問ふは、藝術的作品として、又歴史的重要史料として、保存し且普及せしむる必要を認めたからである。

校訂者　吉野作造

八木書店小売部
東京・神田神保町
電話(291)5458